

新しい家庭科

ウイ

はたらくことをめぐる

6

巻頭言

○ “はたらくこと”をめぐって ○

栗原 彬

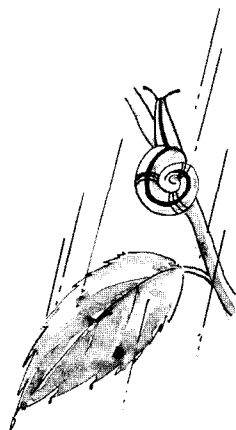
『はたらく』という絵本を松岡達英さんにつくった。私が文を書き、松岡さんが絵を描いた。働くとはいつもやっていることなのに、それが何なのか考えてみると難しい。

ある国語辞典で「はたらく」を引いてみると、「目的を達成するべく行為をすること」とある。よく「労働の喜び」などというが、この国語辞典の定義に従えば、目的をよりよく成しとげる喜び、達成や成就に伴う喜びということになる。この感覚はよく分かる。でも、働くことの喜びはそれだけかな、と思う。

石牟礼道子さんがどこかで語っていたことだが、水俣の漁師たちは、魚や鳥や猫が「おる」といわずに「おんなはる」と言い、魚といわないで「魚どん」と言う。こういう人たちだから、捕獲された魚が有機水銀を含むという理由で人間に食べられることなくコンクリート潰けにされることに、ことのほか心を痛める。水俣の漁師たちにとって「はたらく」とは、いのちといのちの働き合い、活かし合いということなのだ。

水俣の漁師たちの働き方におそわって、松岡さんと私の絵本は、生き物の細胞と細胞とが働き合うところから始めて、人と人との働き合いを経て、地球と宇宙、遂には生と死が働き合うところで終わる。いや、より正確には初めにもどっていく。「はたらく」の中の「いのちといのちの働き合い」に眼をとめることで、もう一方の「目標達成」の側面が、いかに肥大化して私たちの生を歪めているかが見えてくる。

(立教大学)



野の花をたずねて

あつもり草

逐次刊行物

昭和 58.5.20 和

国立婦人教育会館
情報図書室



長い間描きたくても、この花に会えない年が続いていたのですが、今年、栃木県で教鞭をとっておられる K 先生より、O 氏を紹介され、やっと、本当にやっと自生の花に会うことができました。

深い山へ行く道々、O 氏は、三年前よそ者がアツモリ草を根こそぎ取って行き、その花が都会では法外の値段で売られていること。それを知った村人は、まだ残っていた花を、自分の庭へ移してしまったこと。また村ではダン袋などと言っていたが、それ以来すっかり見直していること。そんな話をした後で、こう付け加えました。「わざわざ山へ行かなくても買えばいいのに」。私は、「人の手に植えられた花でなく、花自身が選んだ故郷をどうしても見たくて」と答えておきました。やがて目的地に着くと、そこに三株だけ咲いていました。この山での最後の花とのことでした。山草展などで見たことはあったのですが、やはり自然の中での花の姿は抜群に美しく、夢中で描きましたが、この三株が七株となり、更に十数株となって山を飾る日はもう望めないのだろうか。やりきれぬ思いがふつとよぎりました。自分たちの代で絶滅させてはならない。後の世代に、山で見る感激を是非残しておかなければ、と濃紅紫色の美しい花と向かいあっていて、引き抜いて行った不埒な人間共に強烈な怒りを覚えました。梅雨の空は不安定で、落ちて来た雨が、描いたアツモリ草の両の葉をにじませました。（大室君子）

新しい家庭科



1983年 6 月号

はたらくことをめぐって

〈巻頭言〉はたらくことをめぐって

栗原 彬

はたらくことをめぐって

仕事と職業……………奥田 暁子 4

仕事は仕事と割り切らない生き方を求めて……………荒井 利春 8

「ひととき」にみる農村の女たち……………戸田 恵子 13

✓主婦と職業―誰だって本当は働きたいのだ―……………鈴木由美子 15

私にとって「はたらく」とは……………川名はつ子 17

教師をやめて見えてきたもの……………押切 郁 20

職業につかなければ働いていないのか……………近江谷まつ美 22

働くことを女子高校生にどう学習させたか……………佐々木加代子 24

✓〈特別企画〉We一周年記念公開ゼミナールに参加して……………54

新しい家庭科を創るために

小学校では おもしろい家庭科の授業を……………福田三津夫 29

中学校では 食品研究II……………大森 嘉子 36

高等学校では 生活実感を育てる「生活と経済」の学習……………42

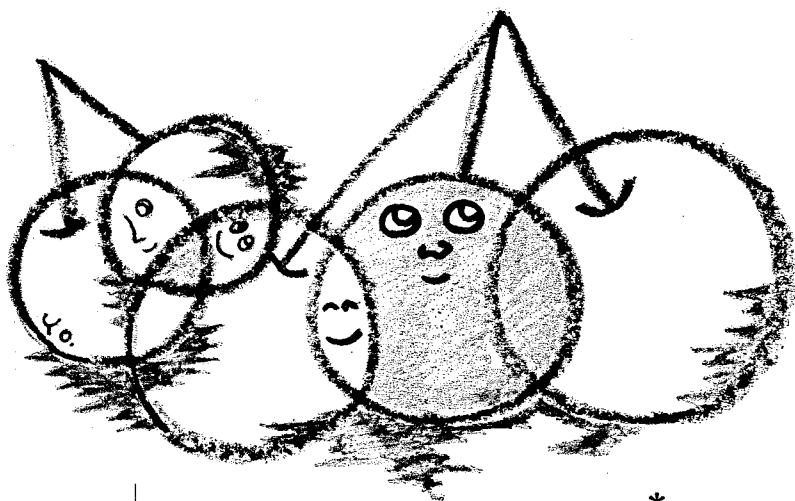
入江一恵、西本和代、町田道子……………48

大学では 教材づくりに向けて……………福原 美江 60

発言

学習の主人公たち……………横浜市立公田小学校 60

静岡県立松崎高等学校



＊連 載＊

市民として 本当の生命尊重とは何か……ヤンソン由実子
教師のつぶやき “ソフト”と“家事”と“落ちこぼれ生徒” 64

親として ああ、ソツギヨウ式……………梶原 公子 68
……………芦谷 薫 69

野の花をたずねて あつもり草……………大室 君子 1

視点 へしかるゝとへおこる……………長谷川 孝 56

霞通信 すすきの穂の打擲……………武田 秀夫 58

ねえ、きいて 父家庭つて最高だよ……………宮 淑子 80

つがるいろはがらた ①ほえない犬あくつつぐ……………藤田 健次 74

銀輪のうた 社会人になってからの「ボランテア」……………栗原 実抄 75

団地の風景 かあさんがあよなべえをして……………遠藤 和枝 76

We の読書室 まちの選挙(1)……………横山 雅子 77

ドラマ残像 愛って何? 「ラヴ」を観て……………野村 康子 78

ぼくのシネマガイド 『東京裁判』……………名取 弘文 78

○波 はたらくことをめぐって……………半田たつ子 82

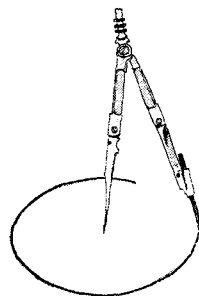
○新刊紹介 12 ○ひと 71

目次イラスト 馬場洋子 本文イラスト 中野敬子／半田たつ子
表紙デザイン 加藤由美子

はたらいてゐるのよ

仕事と職業

奥田 暁子



かつて、「仕事」という言葉には働くことすべてが含まれていた。女性たちが家庭で行っていた食料の加工や保存、糸紡ぎ、はた織りなどは立派な仕事であり、仕事の種類が人間を評価する基準となることもなかった。しかし、産業社会になって、賃労働が一般化し、賃金を支払われる仕事と、支払われない仕事との区別が生じるにつれ、「仕事」そのものが歪められた使い方をされるようになった。今日では、賃金を支払われる仕事だけが「職業」と呼ばれている。

財とサービスの生産および交換で成り立っている産業社会では、経済生産性に関連のある仕事だけが価値あるものとみなされる。このような社会では、人間の評価の基準は、その人の就いている職業の知名度や収入、あるいはどれだけ職務の権限を持っているかということによって測られるため、家事労働のような、生産とは無縁の仕事は「仕事」でさえない。低賃金や無償の労働を余儀なくさせられてきた人びとが疎外感を味わったり、少しでも高い賃金を得ようとして、他人と競争することになるのはそのためである。

したがって、家族を養うために、管理された職場で朝から晩まで働かざるを得ない多くの男性にとっては、かつて中世を通じて、「賃労働」が惨めさの代名詞であったように、職業は苦役を意味するかもしれないが、長い間職業市場から閉め出され、就職の機会と賃金の平等を求めてきた多くの女性は、職業に対してある種の期待感を抱くことになる。女性にとっては、職業はまさに自己解放の手段としての意味を持つのである。

一九五五年から六年間にわたって、多くの学者や評論家を巻きこんで行われた「主婦論争」の論議の中心もそこにあった。二度におたる「主婦論争」では、家事労働の評価をめぐる、愛情論、社会参加論、経済的価値論などが交わされ、明確な結論には至らなかったものの、大筋の合意は、家事労働に経済的な価値はない、女性も夫の傘の下から出て経済的に自立していくことで社会的責任が果たせるのだとする認識であった。すなわち、主として経済の視点からなされた論争であった。今日では、この経済的自立論は多くの人が

との支持を得ており、もはや常識のようになっていく。

しかし、時代に逆行するようであるが、私はこの辺で、この常識を疑ってみたい。それは経済的に自立していない自分自身を弁護するためでもなければ、職業を持っている人を否定するためでもない。経済的自立論は明快でもあるし、「働かざるもの食うべからず」の労働倫理は説得力を持っている。ほとんどの人が自立とは関係なく、食べるために働いていることも知っている。そうではあるが、やはり私たちにとっての職業と仕事の意味をこれまでとは違った視点で考え直さなければならぬ時に来ているように思われる。なぜなら、現実の世界がいや応なしに私たちに問題をつきつけてくるからである。

これまで私たちは、女性も職業に就き、男性と対等に社会的責任をわち合うことで、差別や不平等のない社会を実現させることができるのだと信じてきた。女性の社会参加によって、いのちを重視する女の視点が、経済重視の男の視点にとって代わり、その結果、既存の制度は変革されて、ひとりひとりの人間性を尊重する生活が保証されるのだと信じてきた。だが、いまのところ、このような期待はみごとに打ち砕かれている。不平等は一層拡大し、差別も一向に消え去っていない。

女性の就業率は年々増加しているにもかかわらず、仕事の様式や家庭生活のあり方には大きな変化は見られない。アメリカの場合、二五年前に比べて女性は経済的にはむしろ不利になったと言われている。また、資本主義国であれ、社会主義国であれ、「二つの仕事」（賃金労働と家事労働）を持っている女性の数は一向に減っていない。

被害を蒙っているのは女性だけではない。自然の破壊や核の脅威、公害、資源の枯渇などによって私たちの環境が脅かされているだけでなく、かつては万人が平等に享受することのできた自然の恩恵——太陽や水や空気や静けさ——までもが、貧しい人には容易に手に入らなくなっている。さらに、企業、学校、組合、自治体など社会のあらゆる組織の管理化が強まり、人間性が疎外されるという現象がますます強くなっている。私たちの日常生活そのものが危機に瀕しているのである。

このようなことが起こるのは、女性の社会参加がまだ不十分なためであろうか。完全な参加と平等が実現されるならば、社会の制度は必然的に変革されるのだろうか。だが、それはいつのことだろうか。はたして、そのような日は来るのだろうか。私たちが職業に就くことを優先項目にしている間にも、この非人間化の状況は一層進み、やがて回復不能なままになってしまうのではないだろうか。

誰もが現在を真剣に生き、自由と解放をもたらす未来を志向しているにもかかわらず、社会がそれとは異なる方向に向かっていくとしたら、私たちの生き方のどこが間違っているということである。職業を持つか持たないかという視点だけでは現状を打開する回答を得ることはできないのではないだろうか。

イヴァン・イリイチによれば、仕事は三つの領域に分けて考えなければならぬ、という。一つは私たちが職業と同一視している賃金労働であり、第二は、その賃金労働を支える役割を果たすシャドウ・ワーク（影の仕事、その代表的なものは主婦の家事労働）である。この二つは産業社会が成長するためになくてはならない仕事であり、いわば産業社会によって強制された労働といえることができる。

そして第三に、この二つの仕事と対立するものとして、彼が「ヴァナキユラー」な活動と呼ぶ仕事がある。

賃金労働とシャドウ・ワークとの関係についてイリイチは次のように言っている。

「賃金労働が広がる場所はどこでも、その影としての産業的隷属もまた拡大するのである。支配的な生産形態としての賃金労働と、その支払われない補足物の理想型となっている家事労働とは、両者ともに歴史の上で、また人類学的に見ても、前例のない活動形態である。自立と自存を目ざす生活のための社会的条件を破壊したところに限って、賃金労働と家事労働とはさかんになる」(『シャドウ・ワーク』(玉野井・栗原訳、岩波書店)。

ここには二つのことが示唆されている。一つは、家事労働のようなシャドウ・ワークは賃金労働の補足物として、賃金労働のある限り、消滅することはあり得ない、ということである。むしろ「二つの領域は共働的に作用し、一つの全体を構成している」のである。したがって、近代産業社会は完全雇用を目標としているけれども、これも疑わしいということになる。ある人がシャドウ・ワークから脱出して賃金労働の領域に入り込んだとしても、誰か他の人が、その人に代わってシャドウ・ワークを余儀なくされることになるのである。第二に、私たちが賃金労働を目ざせば目ざすほど、自立と自存をもたらず主体的な生き方は私たちから遠去かるだけでなく、反対に、そのような生き方を破壊してしまうということである。

しかも、高度産業社会からサイバネティックスの社会に移行しつつある今日、賃金を支払われる活動は徐々に減っていくだろうと言われている。既に先進工業諸国の失業率は増加の一途にあるし、O

Aやロボットの導入は第三次産業にまで及んでいる。イリイチは、「今世紀の終わりにには、生産的労働者の方が例外的な存在になり、賃金労働よりもシャドウ・ワークの方が一般的になる。……女性が職務解任されたように、やがてすべての人が職務解任されるようになる」とまで言っている。自民党が提唱している家庭基盤充実政策や臨時行政調査委員会の最終答申で強調されている「自助」の精神は、このような将来を先取りしたものとすることができる。雇用の機会を拡大するよりも、シャドウ・ワークの創出が意図されているのである。

地球の資源には限りがあるわけであるから、地球上のすべての人間の需要を満たすほど生産を続けていくことはできない。現在はまだ機能しているように見える経済の法則も、限られた地域については該当するかもしれないが、地球全体としてみるなら、もはや機能しているとは言えない。そして、先進工業国といえども、近い将来には必ず破綻するだろうと思われる。そのような未来に向かって私たちはどう生きたいのだろうか。シャドウ・ワークに意味を見い出すというのも解決にはならない。

アメリカのフェミニスト神学者で、この春来日したレティ・ラッセルは、人間がいきいきと生きるためには三つの要件が満たされなければならない、という。その三つとは、①現在生きている世界とその未来を理解し、形成する仕事に参加できること、②自分自身を成長させ、自分が何であるかを明らかにしてくれる社会の中で生きること、③他人によって操作の対象や社会の機能として受け入れられるだけでなく、主体として受け入れられること、である(『自由への旅』奥田他訳、新教出版社)。厳密に考えるなら、私たちは今

日、職業を持つ持たないにかかわりなく、この三つの要件のどれひとつをも自分のものとしていない。ここで、イリイチの言う「ヴァナキュラー」な仕事が必要になってくる。

ヴァナキュラーな仕事というのは、シャドウ・ワーク同様、賃金を支払わない仕事ではあるが、産業社会が要求する仕事とは本質的に異なっている。それは、「交換という考えに動機づけられていない場合の人間の活動」であり、「人びとが日常の必要を満足させるような自立的で非市場的な行為」をさす。つまり、産業社会以前の家庭でなされていたような、自分の生を自分の手でつくり出すことのできる、主体的な活動である。

もちろん私たちは産業社会以前にもどることはできない。しかし、私たちの生活全般におけるすべての活動が市場経済に埋め込まれてしまっている現状を見直し、経済的価値のあるものだけを評価する価値観から脱却するための努力を続けることはできるように思う。もし私たちが経済成長する生活よりも、ひとりひとりの自立を志向する生活を選ぶならば、いまとはまったく異なる仕事観が生れるのではないだろうか。そうすれば、職業の種類や賃金の額は人間を評価する基準とはならず、人間生活を生き生きとさせるための社会を目ざす「仕事」をしているかどうかが評価の基準となるに違いない。

世界の各地で起こっている、共生のためのたたかいに参加している人たちは、その事例である。私たちのまわりにも、そのような働き方をしている人たちがいる。反原発・反公害のたたかいをしている人びと。有機農法による野菜を生産している人びと。それを購入して支援のグループを広げている人びと。家族の中で新しい人間関

係をつくり出そうとしている人びと。学校に依存せずに学びたいことを学ぼうとしている人びと。西ドイツの「緑の党」の人びともまた同じように価値の転換を試みようとしているのだから。

私の友人もそれらの人びとの一人である。彼は大学卒の学歴によってもたらされる社会的評価から自由になるために、自ら「高校卒」とし、ある生産会社に就職し、ブルーカラーの一人として働いている。職業は食べるための手段と割り切って、勤務時間中は真面目に働くが、五時になると残業を断わってさっさと会社を出る。帰宅後は、地域で無農薬野菜の購入活動をしたり、障害者や労働者と交流したり、自分の勉強をしたり、子どもと遊んだりする。収入はもちろん多くないので、テレビも見ない。外食はしない。衣類などは破れを繕って最後まで使う。子どもの衣類は中古やバザーを利用する。し好品は買わない。本は図書館を利用する……というような日常生活である。残業や日曜出勤の拒否には、日本経済のアジア進出、公害への抵抗の意味もこめられているが、何よりも自分の生活のすべてを管理されないための自衛の手段なのだ。

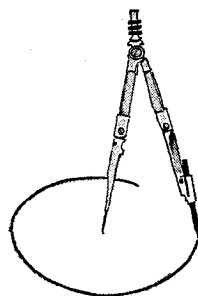
彼のような生き方に対しては、まだ若いから（三十代）できるのだ、妻や子どもの意思を無視している、同僚にしわ寄せがいく、自分中心だなどときまざまな批判があるようだ。しかし、自ら「怠け者」を志向する彼の生き方は、私のように余分なものをいっばい抱えこんで生きている者の目には大変さわやかに見える。自立自存を目ざす生き方の一つのモデルとは言えないだろうか。

（アクセスの会）

はだら／＼ことをめぐって

仕事は仕事と割りきらない 生き方を求めて

荒井 利春



□ゴム飛行機の赤とんぼ□

小学五年のとき、ゴム飛行機が大流行し、校庭では昼休み放課後ともなると、無数の飛行機が飛び交っていた。ローソクの炎で竹ヒゴをていねいに曲げ、ニューーム管でつないで主翼尾翼をつくり、一センチ角の棒に部品と組み合わせながら組み立てていく。作り始めたら止まらない、食べることも忘れて夢中になっていた。夕食のため作業を中断しなければならぬ時の、むずむずした体の感触が今でも残っている。

左右のヴァランスを正確にとり、均整のとれた飛行機ができるとそれは良く飛んだ。夕暮の校庭で、第一号機のゴムをいっばいに巻いて手を離れたとたん、ゆるやかに上昇しながら真直に飛んでいった。それはなんと、広い校庭を横切り校舎の壁につき当たった。安定して飛んでいる姿に興奮し、そういうものを作った自分にも興奮していた瞬間であった。

そのうち正統的に作るのでは満足せず、失敗を繰り返しながら色

々な工夫が始まった。こうして生まれたのが主翼を小さくした小つづな飛行機。これを真赤に着色し「赤とんぼ」と名づけた。こいつはカッコ良かった。ゴムを巻いて垂直に空に向けて投げつける、ぐんぐん上昇して、上昇しきると垂直に落ちてくる、地面に激突か、と思うところで水平飛行に入り「どうだ」といった様子でしばらく飛行して着陸する。戦後のベビーブームで、校庭は芋を洗うがごとく、子供たちで、そして飛行機で、あふれかえっていた。その中で「赤とんぼ」は何度も何度も魅力的な飛行を繰り返した。

思うに、幼いころから絵を描いたりものを作ることを楽しみながら育ってきた私にとって、「赤とんぼ」は一つのシンボルのようだ。

□好きなことを仕事にしたい□

工業高校卒業の間際、「このまま就職すると企業の中堅技術者としての人生が自動的に決まってしまう」といった先の見通しに恐怖感をもった。これは嫌だどうにかしなくては、と思ったものの、総ての面であきれるほどのんびりと日々過ごしていた私にとって、す

ぐに答のでる問題ではなかった。

「仕事をしないことには生きてゆけない、それならば好きなことを仕事にすることができないか、少なくともそうするための努力をしなければ……」。

自分の子供の頃からのことを振り返り、好きで楽しいこと、そして人より少しは上手にできそうなことは何かと考えるようになっていった。頼りなげに、また適切なアドヴァイザーもなしに一人迷っていた私を勇気づけたのは、「赤とんぼ」に象徴された数多くの思い出であった。

新たに一から始めるに等しい受験勉強、傾向と対策、出そうなことだけをマスターすると割り切ったにもかかわらず、アルバイトを続けながらの二年の受験準備が必要となった。大学闘争、さらに移転問題で学内が二つに分かれていた、今はなき東京教育大学で四年間を過ごせたのは私にとって幸運であった。

工業デザイン専攻の学生たちは政治的には比較的穏やかであったが（というよりは私を含めて政治意識と体験の希薄な人間が多かったと言える）、デザインにはラジカルであった。一学年九名という小じんまりとした三十六名の集団には、いわゆる上下関係がなく、それを否定する空気が流れていた。デザインナーとしての活動に対する考え方のみが人間関係をつくるといった理想を各自が望み、そうしようとする共通の理解をつくり上げようとしていた。こういった学生のなかに流れていた空気や香りは、大学の消滅とともに大気中に吸い込まれて、再びとりもどすことはできないものになってしまったが……。

□大学の講座に対する疑問□

工業デザインは産業革命の落とし子である。大量生産という技術の獲得と発達に伴い、とどまることなく生み出されてくる製品が、流れるように販売されていかないうちに限り生産活動が持続しなくなる。

「他国の製品に負けない競争力のある製品が必要だ、それには見えないがよくなってはならない」と当時の企業家が英国の議会で発言している。企業家松下幸之助が戦後、米国帰りの飛行機のタラップを降りながら、「これからはデザインの時代だ」と開口一番語ったという話がある。それから二十年もたったのに、大学の講座は少しも人間のために進歩していなかった。「歯ブラシたてをデザインしろ」「電動鉛筆削りをデザインしろ」、いうなれば企業に就職して即戦力となる者の養成の域を出ていない。

実習というものは特定の技能を初心者が体得する手段だから、そこは割り切ってやってみることが必要だという考え方も否定はできない。しかし、どんな簡単なことでも人間が行動するには本人にとっての目標が明快でなければならないということとはより確かなことだ。単なる技能習得のためにと割り切って行動することが、ややもすると、食うためには仕方ないと割り切って行動することにつながるっていかないか。学生たちの中には当然のように不満が生じた。

「今、なぜ電動鉛筆削りが必要なのか、何が問題なのか、あえてやることはあるのか」。この問いに対する答えを出さずに、単に美しい電動鉛筆削りを考えるのは不毛なことである。

小学校の教室に電動鉛筆削りが置かれ、ナイフを使えない子供が増えてきたことがマスコミを賑わしていた。私は自分も含めたデザインナーや建築家が、製図作業で使えるポータブルな芯砥ぎ器を考え

ることとした。これならば必要性が単純に見えていたから、どの程度の機能設定がよいか判断ができた。

こういう視点に立つと、デザインの良し悪しは、見た目に気持ち良いものとするのは後の問題となり、何を対象とするのか、どこまでの機能を備えた道具とするのかという条件設定で決定されることが分かってくる。私たちのクラスは、共同製作の課題に対して従来の、テーマを与えられるやり方に対して、テーマを自分たちで設定するところから始めていきたいと教授と交渉した。その結果デザインの考え方を重視する方法をクラスで模索することにした。卒業製作は、問題として選んだテーマの背景と取り組むための考え方、具体的な解決方法を十九枚のパネルに表し、それとともに実際のモデルを共同製作した。

今にして思うと、人間生活の食住衣にわたって、道具や環境を評価する講座がなぜなかったのか、またデザイナーが積極的に取り組むべき対象は何か、どうアプローチするのか追求する講座がなぜなかったのか、はなはだ片手落ちの講座編成のなかで学生たちが模索していたのだ。そして、この状況は残念ながら現在も変わっていないようだ。

□企業の中で□

正直なところ、大企業のデザイン研究所に就職が決まったときは期待感をいだいていた。初めから、魂までは売っていないと割り切って就職する態度はとれなかった。またそこまで企業をとらえていなかったとも言える。家電品から住宅設備、工事用重機器と幅広い対象を百数名のデザイナーでこなしている組織は、私には魅力的であった。学生時代に試みたデザイン展開を現実の場で追求できると

信じようとしていた。可能性があると考えていた。

半年もたたないうちに、期待感は薄れ、重圧感が迫ってきたのはいうまでもない。激しい販売競争の渦中の企業内で、現在の人間生活をどうとらえるのか、その理想はどこに求めるのか、そこに向けて今からできることは何か、それを具体的に実践する場として、研究所と名の付いた組織を、私は自分勝手に決めつけていたのだった。売り上げだけを目的とした組織行動は、私にとって日増しに息苦しい場所となっていた。

□自転車デザインコンペに挑戦して□
今の時代に生きるデザイナーとして、何ができるか、どういう方法論があるのか、それを探る手だてをしようとして、企業で同期の仲間

に声を掛け、賞金三百万円のデザインコンペに挑戦した。思えばまだデザイナーが多少脚光を浴びている時代でもあった。
自転車は歩行の次の速さの移動手段で排ガスも騒音もない実に魅力的な道具である。すべての人が自転車による生活圏の拡大を享受できるようにと考えたときに、浮かんできたのが、なんらかのハンディを持った人々の存在であった。力の弱い老人、肢体不自由の人、幼児をかかえた婦人、これらの人々が安心してのれる自転車は一台もなかった。今必要なのはこれらの人々ものれる自転車だと考え、僕は折りたたみ式の三輪自転車を提案した。

賞金は逃したものの、単に同期だった人間が友人となり、デザイナーとしての自分の課題がなんであるのか、おぼろげながらもつかむことができた。また障害者という特殊な言葉に対して、ハンディキャプトという言い方で、妊婦や、荷物を持った人、老人、体の不自由な人すべてをとらえ、互いに条件は異なるが人生というテーマ

に向かつては平等だという主張のこもった、爽やかな言葉も知ることができた。

□障害をもった人の道具、環境づくりから□
企業で六年間、割り切りの下手な私は開発的な仕事を比較的多く担当しながらも、今にして思えばドンキホーテのように一人で空回りの頑張りが続けていた。六年間は私にとっての限界であった。割り切って「企業の人」となるのか、分岐点に立たされた私は、企業をやめ、割り切らないでやれる仕事を求める道を選んだ。

自転車コンペにともに挑戦した友人は、すでに企業をやめ、他の企業で機械設計をしていた彼の幼な馴染の友と二人で木工の工房を開いていた。独身男二人のおおらかな共同生活は、周囲の者を魅了していた。知人の体の弱い子供のために日曜大工で簡単な踏み台を作ったことから、彼らはものを作ることの意味を体得したのだった。そこに切実に道具を必要としている人がいる。そのために努力して作る。うまくいったらお互いに喜びあえる。

現在でも多くの地域で欠落しているのだが、体にハンディを持ったり、弱い子供が生まれたりすると、ハンディをもった本人を支えたり、介助する人の負担を少なくするちょっと工夫した道具がほしくなる。ところがそれがどこにもないのだ。一つの踏み台を作ったことがきっかけで、母親の口伝で子供の体に合った椅子やテーブル、訓練遊具などの注文が彼らに続いてくるようになっていった。いつの間にか新しい仕事が生みだしていたのであった。

「清瀬市に地域の施設を作る計画があるので参加しないか」。次の仕事の展開を考えていた私に、彼らから声がかかった。

自分が道具や住宅環境を考えるのに、固有の現場がある。地域の

個性があり、個性ある人がいる。そしてそれぞれの事情がある。その中で何が可能か目標を設定し具体的な答えを出す。それは私にとって気持良かった。努力することが単純に気持ち良い、これは企業にいたときには味わえないことであった。彼らと同じように私の体の内で、ものを作ることの意味がガンガンと鳴り響いた。

脳性マヒの幼児にとって体に合った椅子は生活の必需品である。椅子の高さ寸法、角度をていねいに求めた上でいくつかの工夫した体を支えるパッドをつけると多くの子供たちが一人で坐る姿勢をとれる。坐れるということは大変なことでこれができてはじめて、家族と同じテーブルで食事をとったり話をしたり、手を使って遊んだりできるようになるのだ。このちょっと工夫した椅子がないと子供は寝たきりになってしまう。たった一つの椅子に子供の生活を変え家族の生活を変える可能性があると思ったら大袈裟だろうか。

私には自分の作る椅子の重さよりも、こんな簡単なことがこれまでに日本でなされてきていない希薄で殺伐とした生活状況で、道具をつくる人間、その仕事に課せられた重さを感じられてならない。

こういう視点で仕事をしながら身の回りを見ると、使う人間をていねいにとらえないで設計した道具や建物に囲まれて私たちが生活しているのが見えてくる。二歳児の体に合った低い椅子がどこの保育園にもない。小学一年生の体に合った椅子と学習机がない。みんな大きすぎて足がぶらぶら。設計する人間に使う人が見えていればこうはならないはずだ。人間としての感受性が喪失されたままで道具が作られている状況には、生活者の側から注文をつけていかなければならない。その基準を各自が身につけていかなければならないと思う。

僕らの仕事は切実に道具を必要としている多くの人たちの生活の現場で、医師、作業・理学療法士、看護婦さんと打合わせを重ねながら様々な道具を作り続けてきている。生活道具、訓練遊具、食器の開発、地域施設の建築計画、仕事は自然と道具から環境までとつながりをもっていく。生活者の側からの道具・環境づくり、これが私の生き方のメインテーマになりつつある。

障害をもって生まれたら、より人生は楽しいものでありたい。道具が、住居が、地域環境が、様々な個性と能力の人にとって魅力的な人生の舞台となるようにしたいものだ。

僕ら三人での工房活動が動きだして五年目、様々な人に出会いな

れてきた。

耕太郎クン、竜太クンのママとして、弁護

士業も宙ぶらりん、子育ても宙ぶらりん。「シ

ンドイ、シンドイ」とわめきながら、離婚事

件が大好き、とおっしゃる松尾さん。私など

読むだけのため息をつくの……。それは、

松尾さんが女性たちの人生ドラマにどっぷり

つかり、共に泣き笑い怒り、そして考えるか

ららしい。ぶつかった数々のドラマと、そこ

に見る人間のさがから、これだけは知ってお

いてというメモが大変に役立ちそう。

結婚七年、同業のおつれあいから五輪真弓

によく似ていて、最近はもっとすてき、とい

われる松尾さん、ガンバッテ！

新刊紹介

★松尾道子『楽しんでます、共働き』

創元社刊 価一〇〇〇円

日弁連が、「高校家庭一般女子のみ必修は差別撤廃条約はもちろん、憲法・教育基本法違反」との意見書をまとめる時、女性弁護士さんと親しくなった。昨夏「拘禁二法を考える女性のつどい」で、若い女性弁護士さんたちのキビキビした活動を見た。エリート中のエリート、と思いこんでいた彼女たちが、ぐんと身近に感じられてうれしかったのだが、この本で、隣に住む共働き夫妻のように思わ

がら多様な活動を展開してきた。現在の僕らの仕事は三人それぞれのこれまでとこれからの生き方への思いのこもったものである。仕事とは生きることであり、それはドラマだと思う。自分の人生のドラマの筋書きは人に書いてもらうものではない。お互いのドラマがより魅力的なものとなるよう、さらに切磋琢磨していきたいと思う。自分のささやかな歴史を振り返ると、仕事をとおして知り合った多くの方々や、工房の二人の友、竹野広行、光野有次の存在に、また、肩をならべて生き生きと生きようという、人生のよき友であるつれあいに、自然とお礼が言いたくなる。

ありがとう、これからもよろしく。

(でく工房)

★いま、人間として 別巻 I

『生き方・食い方・かせぎ方』

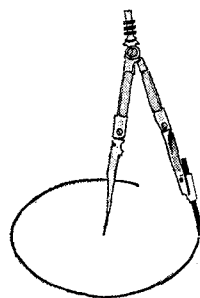
徑書房刊 価一三〇〇円

「就職・転職・独立の手引」と副題にあるがむしろ、これは人間の生き方の書だ。巻末の座談会で語る人を含めて三〇人のかせぎ方は一回こっきりの自分の人生を、納得した上で紡ぎ出そうとするものだ。真の豊かさがここに輝く。いのちきセンセ奮戦の半生記抄(松下竜一)、農に生きる根を掘る(小平範男)の二編は、特にくり返し読んで、その都度心を洗われた。いささかも誠実に生きようとするれば、いのちき下手に生きることしは許されないはず……と松下センセは言う。(半田)

はたらくことをめくつて

「ひととき」にみる農村の女たち

戸田恵子



「ひととき」は一九五一（昭二六）年に、朝日新聞家庭面に新設された投稿欄の名称である。「アクセスの会」の共同研究テーマとして、「ひととき」三〇年間を取り上げたのは、職業も年齢もさまざまな庶民の女たちの声を、いろいろな角度から読みとることにによって、戦後の女の生き方を日常生活にそくしてトータルにとらえられればと思ったからである。

戦後の日本を見ていく上で、農村ほど変化の大きかったところはないのではなからうか。まだ研究の途中でもあるので、政治・経済の間で、貧困や因習と戦いながら生きてきた農村の女たちを、一九五二年から、一九七二年までの二〇年間にわたって追ってみたい。

一九五二年から五五年にかけて最も多いのは農繁期の過重労働と農閑期における過ごし方である。午前一時ごろ床に入る間もなく三時には起床というような毎日の労働の中で、健康より仕事、命より金という考え方がみられる。「農繁期の医院は誰もこない。理由は時間が惜しいから……」という農家経済の底の浅さと農民の貧困性に

ある（茨城県）（「」は投稿文、（）内に地域・年齢、以下同じ）この時期、農閑期の過ごし方については、他人の悪口、うわさ話やグチを言い合うばかりでなく、生活改善をして自分を高めていこうという声や、農民の意志を政治に反映させるための啓蒙運動を望む投稿が多い。

一九五五年ごろから高度経済成長期に入り、五六年の造船ブームが口火となって、世の中が神武景気に突入するなかで、農村では中学生も大切な労働源として扱われた。勉強する時間も持てない生活を強いられる中学生について書かれたものがいくつか出てくる。また農村の主婦の立場から、「主婦連代表による消費者米価値上げ反対の気持はわかるが、それが農村へどのように影響を及ぼすか、一家あげて十五時間労働を基とした生産費で算出された米価でも高いというのか。農村・都会を問わずお互い幸福になれるような運動にしてほしい」（千葉県・三三歳）というような都会生活者と農民の立場の違いを指摘した声もある。

このころから農機具の機械化に関する投書が出はじめ、農機具購入が農村に広がるなかで、家計を圧迫し、その穴埋めをするために、夫が出稼ぎに行かなければならない妻の嘆きが語られる。一九五八年はこの二十年間のなかで最も投稿数が多い。この年をはじめ、「私も美しい作業着がほしい」(福島県・二〇歳)「既製の作業着が欲しい」(群馬県・二九歳)など身のまわりへの関心が出てくる。貧しい生活の中からも精神的ゆとりが少しずつ生まれてきたのだから。

一九五九年から六〇年にかけて、洗濯機などの電化により家事労働が軽減され、機械化に伴い作業能率が上がっている反面、経済面での苦しさ、野菜の生産や養蚕・酪農の不安定さなど、農政の貧困がもたらすさまざまな問題が投稿に反映されている。「農作業機械を購入して四年になる。前と現在を比べてみると、作業の方法も生活も向上したように思われる。しかし機械化が進むと、浮いた労力で多角化や集中化が進められ、結局所要労働量はふえ、それは主婦や嫁の負担となり必ずしも労働から解放されているとはいえないのです」(長野県・三三歳)という悩みも農家の主婦から生まれている。

一九六一年には農業基本法が施行された。これは農業と他産業との所得格差の是正を、基本目標としたものであるが、所得倍増、レジャーブームが進むなかで、そのひずみが農業労働力の流出となって現れる。「池田首相の所得倍増政策のなかで、手伝いの人の労賃が食事付で五百円、町内の工場で働く時は二百円、農家にとってあまりにも不利なこの矛盾」(福島県・二十歳)という声は代表的なものである。

六三年には「三ちゃん農業」といわれるように兼業農家は全農家の四割を超えた。「農業から男衆が外に働きに出て三ちゃん農業となり、とくにかあちゃん、の我慢病が増えている。人に気がねせず病気の時は医者、の門をくぐりたい」(長野県・三二歳)。池田首相の農業人口六割削減政策を待つまでもなく若者は都会へ、残った男子も、土木工事や工場へ出ることで、農業基本法が志向した自立経営農家の育成は失敗に終わった。しかし重化学工業中心の高度成長に必要な労働力を確保していく上で、企業側から見ればその方が都合であった。

一九六五年ごろから都市化が進む一方、過疎化現象が一層深刻化し、六七年には山口県で婦人だけの防火隊が誕生し、各地で出稼ぎに伴う自衛消防隊づくりがさかんになった。このような過重労働から、農村主婦の八割までが農夫症にかかっているといわれるほどになった。「五年前に農休日を設定したが、今では男はみな出稼ぎで農休日どころではない。夫と共に野良仕事できる日を持ち望む」(群馬県)。またこのころ主婦の出稼ぎ問題が出はじめ、家庭の電化や車の購入、家の改造、その結果家計のやりくりのため工場へ働きに出る。それがかきなきかぎっ子と呼ばれる子どもたちを大勢生むこととなった。何のための労働かと疑問の声もある。「三、四年前までは農閑期という楽しい季節があったのに、今は男も女もみな現金収入のある他産業へ出てゆく。家にいる私など無能な女のように恥ずかしい。働きに出ようかと気がもめる。残った者は七〇近い年寄り」と幼児のみ。減反問題ですっかり農業に魅力をなくした農民は、朝早くから夜おそくまでよく働く」(郡山市・四五歳)。

少しでも生活を向上させたいと過重労働に耐え、化粧もせず明日

への向上心に燃えた、時代の女たちが目ざしたのは何だったのか。
しかし、一九七一年には農村地域工業導入促進法が公布され、七
二年田中通産相の「日本列島改造論」が出た。こうした大きな政治

はたらくことをめづつて

主婦と職業

―誰だつて本当は働きたいのだ―

鈴木由美子

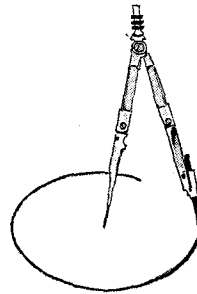
「えっ、お仕事してらっしゃるの？ いいわねえ」

この一年、何度この声を聞いたことだろうか。娘を保育園に入れていたのに、転居したら欠員ゼロで入れてもらえず、やむなく公立幼稚園へ。朝九時と午後一時には園までの送り迎えが義務づけられている。昼さがりに母親たちは、カギをつつんだハンカチ程度のも
のだけ手にして笑いさざめきながら園に向かう。私はずっしり重い
ショルダーバッグをかけて、しばしば地下鉄の駅から全力疾走して
園の玄関前にたどりついたりしたので、何をしているのかとよく聞
かれた。まだ本格的とはいえないし、経済的自立とはほど遠いけど
一応仕事していると答えると、驚きの声が返ってくる。

その声は、誰それが毛皮のコートを買ったと聞いて驚嘆するとき

の流れの渦の中に巻きこまれながらも、農村の女たちは、その日そ
の日をきのうよりは少しでも良いものとするべくいっしょうけんめ
い生きてきたように思える。

(アクセスの会)



とは、違ったひびきを持っている。人間の奥底からわき出る反応の
ように思えるのだ。どんな仕事？ どうやって見つけたの？ 私も
子供の手が離れたら何かしなきゃと思うんだけど……。質問を浴び
せかけられて、誰でも心の奥底に社会的労働への願いを持っている
のだと改めて感じた。

三十代前半ぐらいの無職の主婦の大部分は、生涯主婦専業でいよ
うとは思っていない。自分が将来働いて収入を得る人間だと予測し
ている。

ではその将来とはいったいなのか、どんな仕事にしようというのか、
そのために何か準備するのかしないのか、といったあたりになると
はっきりしたものを持たないことが多い。四十歳以上のミセスの多

くが働きに出ているところを見ると、あと数年もすれば自分にも誰かがパートに出ないかと勧めてくれるのだろう、というような受身の姿勢にとどまりがちだ。

幼稚園児の母親集団の中に身を置いて私は、この女性たちが、同年輩の働く同性——保育園児の母親——と切り離された地点にいたことが残念に思えてならなかった。無職の女性ばかりのグループにいては、職業に関する具体的な情報は得られない。耳に入る情報といえ、テニスクラブやお稽古事に関するものが主となり、さしあたり夫の収入で暮せる女性は、そちらへ流れがちになる。

もし母親たちが「幼保一元化」して同じ場で顔を合わせれば、「ウチの会社でタイプの打てる人探してるんですが」という具合に、無職の主婦の仕事との出会いはずっと促進されることだろう。障害のある人と同じく専業主婦も、一般社会から隔離しちゃいけない、と思った。

ここ数年『わいふ』という主婦が主体になった雑誌づくりにかわってきわかってきたのは、女性の意識は、身近から刺激を受けて自分が行動してみれば確実に変化する、ということ。たとえば、子育てに専念する暮しに充足して子持ち女性の就労に批判的であった人が、知人から短期間の仕事を紹介されていくばくかの収入を得たとたん職業への意欲がわきおこるという例がいくつもあった。

さて、専業主婦であった女性が働き始めたとき、どんな問題が出てくるだろうか。

週に一、二回外出する程度の仕事を始めたら、夫が全く家事育児に手を貸さなくなったと嘆く女性。子どもをまめに風呂に入れるタイプだった夫は、外へ出ようとしないう可愛い女房だからこそ協力し

ていたらしい。仕事などナマイキなことやるのなら、家のことを百パーセント立派にやってもらおうじゃないかと居直って、手のかかる大きな子供のようになっているという。

中断なく共働きを続けた場合と違って、専業主婦のいる時代を経た家庭は、主婦が自分の生活を持つことに拒否反応を起こしがちだ。「子供を途中から保育園に入れるときには、春や夏のほうがずっとスムーズにいくのよ。秋や冬は五時半に迎えに行くとうま真暗でしょ。ママといつも一緒だった子は、不安で心理的におかしくなったりするから」。

再就職した女性のこんな言葉にも、生活の急旋回で子供が打撃を受けられないようさまざまな配慮があることが感じられる。

そして職業の貴賤という問題。子持ちの女性が働ける職種は限られているのに、夫から「店先にカオさらして物売ったりしてくれるな」とクギを刺される。そして自分の中にも学歴や職歴へのこだわりがある。

ある女性は、夫の大病を機にそのこだわりを捨て、確実に稼げる職をと、調理師の道をめざした。するとちょうどそのころ、予備校生の金属バット殺人事件。評論家の「早稲田にこだわらずにコックでも何でもいいと心を広く持っていたら」などという言葉は、彼女にとって偏見そのもののように感じられたようだ。十数年前にその早稲田大学を出た自分にも、調理師試験の勉強はそうたやすくない。とりくんでみたら、幅広い知識がいる社会的責任の重い仕事だとわかった、という。ここでもやはり、経験が意識を塗りかえていくのだ。

ところで、こんな例もある。外国製の合成洗剤のセールスを始め

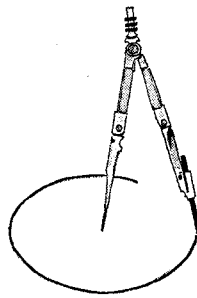
た女性に対して、粉石けん推進派の無職の主婦たちが、「そんな仕事ならやらないほうがいい」といさめたのだ。批判されたほうにも言い分がある。私は自分のパンを自分で稼ぐ第一歩として、手の届くこの仕事をつかんだのだ。世の中に何らかの害悪を及ぼしている企業に勤める夫の給料で食べているあなたたちは、夫に対して「そんな仕事やらないほうがいい」と言っていないではないか。どうして私に向かってだけ言うのか……。

この論争は、女が働くことの本質に触れるものを含んでいるような気がする。生活の場にいる女性が、炊事洗濯の排水で川や海を汚すまいとする思い、自分だけでなく人にもそうしてほしいと願う思いは言うまでもなく大切なもの。だがその思いを、夫のいる女は扶

はだらくことをめくって

私にとって「はだらく」とは

川名はつ子



養されてあたりまえだから有意義なお仕事にだけ手を出そうという発想と、安直に結びつけてしまっているものだろうか。女性が、自分の労働権を置き去りにしたまま形成した市民意識は、意外な保守性を持っていないかと感じさせられる一幕だった。

家庭から労働の場に向かってみると、未知のパノラマが出現したかのように、これまで見えなかった光景にとりかこまれる。そのひとつひとつが、家庭に逃げ帰る口実にも、より強固な職業観を築くきっかけにもなる可能性を持っている。主婦であるひとの心にひそむ社会的労働への欲求を、よりよく現実化できるように、手を貸し知恵を貸し合うつながりをもっとつくらねば、と思う。

(「わいふ」編集部)

五人家族の大黒柱
学校を出てから十余年。三年目に結婚し、思いがけず子どもが二人生まれ、三年前からは年老いた姑を引き取って同居している。その間、小さな出版社の社員から現在の学校職員へと、転職も一度経

験したが、このとき一か月間失業した他は、ずっと外に働きに出ている。夫は「自由業」というのは名ばかりの、金にも時間にも不由がちな仕事に打ち込んでいるので、五人家族の大黒柱として、私はドーンと突っ立っていないなければならない。

私は今、職業をもたないで生きる自分を思い描くことすらできない。それは私がそうしなければならぬ立場に追い込まれているせいではあるが、振り返れば、そればかりでもないことに気づかされる。

「自分の口は自分で養う」

私が生まれたのは貧しい農村の兼業農家で、女の子であれば高校卒業後は家事手伝いか銀行、官庁など「堅い」所へ勤めるかたわら習いごとでもして玉の興に乗るのを待つのがいちばんの幸せと、周りにから言われて育った。

しかし一方で、私にそう言い含める母も祖母も叔母たちも、大家族の中で黙々と耐えて働く典型的な農婦たちである。

それに私も、ものごころついた時にはリヤカーにのせられて田んぼや畑に出て、幼ければ幼い年の仕事をあてがわれていた。一九六〇年頃までの農村では、小・中学校に農繁休業というものがあって、夏・冬の休暇を短縮する代わり、田植えや養蚕の最盛期に一週間ほど全校一斉に休みとなり、生徒は家業を手伝い、非農家の子は友人の家で手伝った。

こうして、耳からは玉の興に乗るように吹き込まれ、目には一生働きつづける女性の姿を映し、身には肉体労働の苦楽を刻みながらも、大して屈託することもなく、別に大志を抱くでもなく、のんびりと日々はすぎた。

その私が、ふとしたきっかけで大学に進み、一九六七―七八年の大学闘争に出会った。それまで抱いていた押しつけられた価値の呪縛からすっかり解放たれて妙に身軽になった一方、力およばず、代わるべき新しい価値などそこに築くいとまもないままに大学を出

た。

親の期待を裏切って歩きはじめたからには、養ってもらうわけにはいかない。入学後一年で寄宿先の親戚を出てからは、仕送りをほとんど受けず、家庭教師や市場調査、ウェイトレスなどのアルバイトと奨学金でまかなった。こうして自分で稼いで誰からも干渉されずに生きるうれしさを、もう学生時代から身につけてしまっていた。

負い切れぬ責任

教職と大企業には就く気も自信もなかったのも、小学生のころから新聞づくりが好きだったというだけの理由で、編集・校正の仕事求め、中小の出版社に求職の電話をしてみた。そして小さな出版社に半年がかりの長い「見合い」のち入社して、四年間勤めた。

そこで働くことの大変さはよく承知しているつもりだった。むしろO大生の肩書だけで甘やかされていたことを思い知らされながら、企画、編集、制作、営業、倉庫整理の全過程を経験し、多い時でも十人足らずの同僚と苦勞を共にする生活から逃れてはいけなような気がしていた。

田舎育ちの私は、家内工業の印刷所などで都市の片隅で働く人々のやさしさとこずからさ、弱さとたくましさといったものに触れ、誰も彼も精一杯生きているという思いに胸を波打たせながら、ひとり夜道をたどった。

社員が皆、力を出しきって働いても、自転車操業から脱け出ることが出来ず、印税などの支払いが滞りがちであった。人に迷惑をかける――心苦しさに胃は縮みあがり、痛みどおしになった。責任がとれない、と悩む私に、編集長が「責任は負いつづけるものだ」と応えてくれた言葉は今も背中中に張りついている。しかしその時、私

は心身ともに宙に浮き出したように疲れ果て、責任を負い切れずにそこを辞めた。

女が家族を扶養するとき

今の職場には、初め、心身がすっかり復調して本来の職にもどれるまでの、一時の腰かけのつもりであったが、二か月ばかり経たころ、不時の妊娠に気づき、うろたえた。たまたまポストが一つ空いていたので私は正職員になっていたが、産む決心をした私は、先の見通しもないまま進退うかがいをした。

「結婚しているのだから、妊娠するのは、まあ仕方ないでしょう。でも、実家のお母さんにでも里子に出して育ててもらうのかな」と、上司も前例のない事態に戸惑っていた。

職場の産休制度や保育施設を一つ一つ手さぐりで調べあげ、私よりは働く時間帯のやりくりがつく夫の協力を得て、なんとか勤めをつづけながら子を育てる道を敷くことが出来た。

二人の子どもが同じ公立保育園に通えるようになり、ひと息ついたころ、今度は夫の母が病み、もう一人で暮らせないと訴え出した。三世代が一緒に暮らすために、私は悲壮な決意でアパートを買い、多大な借金でますます職場に自分を縛りつける羽目になった。門違いの所に腰を据えざるを得なくなり、同じ職場に働きながら研究者として業績をつんでゆくキャリア組に対して、ノン・キャリアの自分がみじめでならない時もたびたび訪れ、競争社会の原理から、私はまだ自由になれないでいる。

女性が子どもや老人を扶養家族として認めてもらうには、夫に収入がないことを証明し、その理由を書類にして提出しなければならぬ。男性ならば、こんなややこしい手続は不要なのに、女性差別

の屈辱がひしひしと膚身に感じられたが、逆に、事実女が子どもや老人をこうして養っているではないかという強烈な自負に奮い立つのをおぼえた。

誰もが働ける社会を作り出したい

子どもや老人——自分の口を自分で養えない人間の存在など思ってもみなかった、最も軽薄な部類の「翔びたい女」であった私が、両の翼にしがみつかれてあがきはじめたとき、はじめて見えてきたものがあつた。

労働時間に通勤時間を加算した延長保育は働く女性のための当然のサービスと思い、夕やみの下りた保育園に駆け込んでわが子と再会する瞬間に胸踊らせ、満足して働いてきたつもりが、Weや育時連と出会って、それは本当の幸せであつたか、と反省を迫られた。

既成の価値観から解き放たれて職業人として歩みはじめたはずの私が、いつの間にかまた「仕事は生きがい」などという産業社会の合言葉にからめとられて、大事なものを失っていた。

動物園やテレビで日がな寝そべる野生動物をみると、つくづく人間は不急の仕事を増やすぎたと思う。本来に必要な仕事だけにしぼり、それを皆が分かち合えば、どんなに快適に、満ち足りて生きられるだろう。複雑にガッチリと組み上げられてしまった産業社会の下でも押しひしがれず、男女による差別、職種による差別、もろもろのうとうしい差別をなくし、誰でも楽しく働ける条件を作り出したい。そのためには、まず私自身が日々気持ちよく働ける場を、これからも働きつづけるなかで模索して行こうと思う。

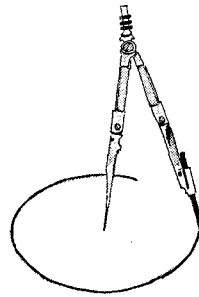
*「男も女も育児時間を！ 連絡会」の略称

(大学職員)

はだら／＼ことをめづつて

教師をやめて見えてきたもの

押切 郁



教壇を去つてはや三年がすぎました。夫は転動となり、四月から新任地での生活が始まります。引越しの準備をしながら私にとってここ岩手県大槌町での三年間の生活は一体何だったのだろうかと考え続けました。退職という一大決意をして赴いた土地であり生活であつただけに、さまざまな感慨が去来します。

高校家庭科教師として二四年間、養護学校での障害児教育六年間、若さと活気あふれる高校生と共に、また、虚飾を知らない青い実の子どもたちと共に過ごした三十年間の教師生活の哀歓は、私にとって生涯忘れ得ぬ心の財宝です。学校という組織体から離れ、教師という肩書きから離れ、一人の「私」になった時、これまでいかに思われた諸条件の中で、いかに多くの人々に支えられて生きてきたかを痛感し、教師という仕事のきびしさと素晴らしさを改めて思うこのごろです。

職業を持たない生活を考えることができなかった私。生涯仕事を持ち続け、現職で死んだら本望と思っていた私が、いろいろの事情

があつたにせよ、職場を去ることを選んだことには何か後めたさを覚えしました。女性の自立や社会参加がマスコミを賑わす時代になつたというのに、それに背を向けるような結論を下したことになつたからです。一度選択したら後は振り返らないと決意はしたものの、葛藤のあつたことは否めません。

仕事から解放されたら、これまでやりたいと思つていたことができる。家事も、もっとねんごろにやれるだらうと思つたのは、どうやら誤算だつたようです。仕事がついから家事―私の場合特に食事のこと―は気分転換とも、時には、レクリエーションともなりました。多忙だから、少しでも生活にうるおいがほしく、趣味的なことにも心が動いたのです。家事が仕事となれば、同じ家事でもそれに対する心のありようが違ってきました。心ゆくまで、ねんごろにするはずだつた家事は、時に繁雑なばかりに思い、内容が充実せず、水まじしたような希薄な時間ばかりが流れて、イライラしてしまします。絵も書も読書もと思つたことも、仕事があつての余暇で

あり、趣味であり、よりよい仕事への願いがあつて意欲がかきたえられるもの。その支えがなくなつては、何をするにも無意味にさえ思へました。

第一、日中家にいることが、どうにも落着かず、長年の生活のパターンを変えることはその対応に時間を要するものの方でした。身体的にも拒否反応が起こつたのか、経験したこともない後頭部の痛みに悩まされ、ついに治療に通う身となりました。東京で教師をしている友人は、私の身体的不調は職業病として認められているものだと言ひ、そんなことも知らずにいた私はうかつだったと思ひました。三十年間、学校と家庭生活というベルトコンベアにのせられて過ごした身体と心は、新しい生活への対応のため懸命に努力しているのだと思うと、我が生命が何かいとおしいものにさえ思えてきます。

誰しも多かれ少なかれ生活の変化による不調はあるもの。Nさんは、そのおちこんだ状況からコーラスによつて救われ、Tさんは油絵によつて解消したとのこと。Tさんはかつて有能な県職員でした。夫の転勤を機に育児に専念するため退職、仕事熱心であっただけに主婦となつてからは家事を完璧にやりこなすべき努力したようですが、一人家で家事をしながら、頭の中は子どもに言ったあのことこのこと、夫との対話の一言一言を反芻しては次第に内向的になり、孤独になる自分を不安に感じ、ご主人のアドバイスで好きな絵の勉強を始めたとか。これを突破口として、地域活動に入り、読書サークル活動に、手作り絵本の製作に、PTA活動にと、かつての仕事を生かした活動に充実した毎日を送っています。

私の場合は、幸いなことに二十五年ぶりに再会した教え子たちに

生かされ救われました。若い主婦たちのサークルに誘ひ、外に引き出してくれたのです。長い間、高校生と過ごしていたことが幸いして、若い主婦たちは、皆かつての教え子のように思い、誰彼の区別なく声をかけたくなり、抵抗なく若い人たちの仲間に入ることができました。また、講演会、座談会、料理講習会などを計画、講師として招いてくれました。研究者でも学者でもない私は尻込みしましたが、偉い学者より、悩みを話しあい聞いてくれる先生がよいとのこと。それなら人生の先輩の立場でと、結婚・育児、食生活問題など共に語り合い、学習しあう機会を得、高校教師時代にもどつたような充実感も味わひ、職場を去つても家庭科教師としての経歴が生かされることに感謝しました。

教え子たちによつて拓かれた道、負うた子に教えられるとはこのことでしょう。教師冥利とでもいうのでしょうか。人と人とのめぐり合わせは不思議なもの。趣味の集まりや、学習会は、単に受身では長続きしないもの。求める人たちの人と人との触れあいの中で、互に人が生かし生かされることによつてはじめて生きいきした活動となり意義ある集まりとなります。こうして多くの人と知り合い、交わり、多くのことを学び、生活に活気がでてきました。

絵を描きたいという思いも、Tさんに触発されて実現しました。教師という枠を脱いだら、絵が下手という劣等感からも解放され、上手下手を超え、五十年生きたあかしとして私の絵を描こうと居直つたのです。処女作ともいえる海の絵、海の色を出すために何度描き直したことでしよう。それは、自分を見つめ、自己否定しながらこうありたい自分を求めるための作業でもありました。美しい自然の中で気の通う人たちと遊んだ楽しい思い出、春の野草つみ、桜の

下で海を眺めながら野だて、山菜採り、スケッチ等、こんな生活もあったという感動、自由に生活を選択できるのだという新鮮な発見もありました。

しかし、大槌町を去る日、笛吹峠で、山並みの向こうの大槌を思いながら、「やるだけのことはやった。悔いはない」と言い切った夫に対して、私は、ヤッター、という充実感には何か今一つ物足り

はたらくことをめづって

職業につかなければ 働いていないのか

近江谷まつ美

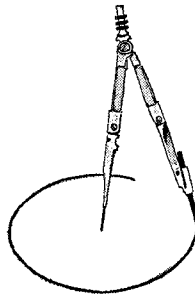
子どもが小学校へ入学したところから、「毎日何しているの？ 暇なんでしょ。働かないの」と挨拶がわりに聞かれることが多い。学年始めの懇談会ともなれば、PTA役員の選出にあたり、「私は働いているので忙しくて引受けられません」とか、「このごろは働く親がふえる一方で、働いている・いないは役員の選出について関係ないんじゃないですか」など、すごい見幕で押しつけ合う場面に出くわす（気の弱い私などは、ともすれば力で押さえつけられて引受けるはめになりそうで、小さくなりながらも必死に自分を守っているが）。

なさを覚えるのを淋しく思いました。それはなぜだろう。

鳥は、風に向かって飛ぶという。

風に向かって、たえず翔かなければ生きられない鳥たち。

そうです。私も、風に向かうことを始めなければ――。



ここで今私が問題に取り上げたいことは、PTAの役員云々ではなく、「働く」という言葉の意味である。この場合の「働く」は恐らく代価として賃金を得ることを意味していると思う。が、果たして「働く」ということは、それだけだろうか。貨幣流通を基とする資本主義社会の中では、全く金を使わない生活はないと思うが、だからといって、すべてを金で解決できるものでもない。

賃金労働の目的は、自己の労働力売り渡して得た賃金を、生活に不足しているものに替えるためであらう。とすれば、そこでの金の役割は、単に価値の交換のための一つ的手段と考えるのが適当だ

と思う。

遠い昔には全く貨幣を仲立ちとしない社会があった。そして現代でも金では仲立ちしえない部分がたくさんある。人間が生命体である以上当然だ。金のみで解決できないとなると、あとは自然の力と、自分自身の労働（自然への働きかけを基に）と、その場に居合わす人々相互の協力による労働といったところだろう。自然への働きかけを基にした自己の労働や、協力で交換しあう労働は、「働く」と言わないのか。これらの労働に職業としてのはっきりした名前は無い。が、むしろ名前のある職業に就き、その社会に組みこまれることで、気付かずに体制から強制された労働に従事している危険や、あるいは小さな権力者となって、より弱い者に労働を強制するようになる危険があることを常に意識して欲しいと思う。

分業化社会は急速に進んでいるが、単に成果として現れる評価のみを重視した、能率万能の合理主義が大手をふっている。そして企業によって生活を支配され、ゆりかごから墓場までのほとんどを知らずしらすのうちにその手に握られている。その上に、今ほんの少しか残っている自由な部分をさえも手離そうとする人がいる。夫と妻（というより共同生活者全員で）家事を分担することなく共に放棄している人である。

ここで「家事」について私なりの定義づけをしたいと思う。「家事」とは、かつての家庭科教育でなされていた、裁縫・料理といったごく狭い範囲のものではなく、この「We」で目指すところの家庭科全般というか、例えば食事を作る場合には、まず材料にはどれが本当に体のためになるものかを学び、それを求め作り出していく作業から始まっている。また、一般に家事と並び称される子育ても、

実は大切な家事なのであって、それはただミルク、オムツの世話ばかりではなく、健康に育つことのできる環境作りが当然含まれるはずである。このように限らない広範囲の仕事が「家事」であると思う。

ときたま「家事を粗末にしてまで、地域運動に参加できないわ」などという人がいるが、とんでもないことだ。その地域運動だってりっぱな「家事」ではないか。食事をしなければ生きていけないように、地域運動も必要なのである。

さて放棄された家事は、当然企業が請負うわけだが、そうなる自分のためであったはずの家事が、企業の利益を目的とする行為と替わることになる。テレビに代表されるコマースシャルでは、甘い言葉で、ポリウム一杯に、「使う人のために最善を尽した○○○」とか、「使う人の気持ちになって考え出された○○○」なんて言うけれど、まさか。

一方家事を放棄することで生じた時間を（経済的自立の意味をとりがえて）、ひたすら賃金労働に費すとうなるか。命の維持のためには決して欲しくない、食品添加物やその加工食品の製造に駆り出されたり、あるいは子どもを受験戦争の真只中に押し込めるような作業をさせられる？ 結果になることもあるだろう。そしてその代価として与えられた金は、形を変えてまた企業の利益へと消えていく。

私は賃金労働を非難するつもりは全くない。必要ならば、男も女も区別なくすべきだと思っている。ただ労働の中身を考えてみて欲しいとは願っているが。

賃金労働は、なぜ命を危険にさらす加工食品の製造や販売になる

ことがあるのか。それはこの労働は金が目的であり、その作業中には、それを食べる人を考えないからである。「家事」を放棄する人まかせの生活は、その危険を受け入れてむしろ積極的に助長していることにもなる。賃金労働はそれを提供する人が、受取る人の生活を見たくとも見ることができないことがほとんどだ。相手が見えずに、その人のためのものができるはずはない。また、世間一般の常識というものに操られ、自分の意志を持たない場合も相手は見えない。

相手を見えるということは、自分もその立場に立って考えることである。相手の立場に身を置くことなしに、頭が働くはずはないと思う。家事を分担しない人間が、「あなたのために作った○○○」と

はたらくことをめくつて

働くことを女子高校生に どう学習させたか

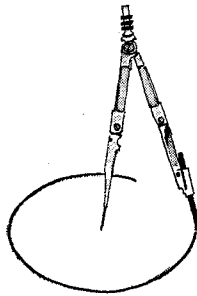
佐々木加代子

日だまりでのおしゃべり。放課後の部活動。現在高校生として自分なりに感じ、考えて毎日を生きているはずの生徒たち。けれども、卒業後のことは、自分で考えることを止めて、社会通念に任せてしまう生徒たちでもある。現在三年生を担任しているが、生徒

いくら叫んでも、それは決して「あなたのため」になりはしない。家事を時には、しんどい労働と感じるようだが、それは義務としてのみ働くからで、本来これ程興味のつけない奥深さを持った楽しいものはない。もちろん体制により押しつけられたそれが論外であることは言うまでもないが。

家庭科は他教科での学習を実生活に活用する方法を学ぶ大切な教科で、「家事」は、分業して営まれている労働をしつくり見極めて必要なものを選択し取り入れつつ、自らも頭と体を動かす労働である。

私は「家事」をしているが、職業欄は無記入である。私は働いていると言えないのだろうか？



は、一年生の時からロングホームルームなどで依頼心の強い発言をししばしばしてきた。自己に対する厳しさが欠けているせいであろうか。私は、働くことは、「自分が生きているのだ」と世に叫び続けるようなものだと思う。しかし、生徒たちは現実として自分

が働かねばならないのを知りながらも、働くことの厳しさに欠ける。他に甘えたままで働くことができるのだろうか。働かないでいることをよしとする者もある。このような生徒たちに、人間としての喜び、自分の努力で自己を実現してゆく喜びを知らせたいと思う。働く人間を育てるために、私たちは様々の方面から進路指導を続けてきたが、その中の「卒業生との座談会」を中心に、生徒が働くことをどう学習したかを紹介したい。

生徒の中の生きること

一九八一年四月十日（金）

十年間出席番号は女でいつも「一番」。今まで何もかも男の次にやってきた私が、女子高では何をするにも一番初めにしなければならぬ。大変です。でも反面、誰よりも最初にすることは気持ちのよいことでもあります。ただ、毎日「一番」ということで緊張しているんです。早く、早く日曜日がきて、ぐっすり眠りたい気分です。では、明日に備えて（？）……

（回覧ノートより）

女に「最初」のチャンスが与えられることは少ない。これまでは、彼女たちの前には必ず前例があった。「一番」は女子高に入学したことの最初の驚きであり、喜びであったようだ。回覧ノートの冒頭に、「最初にすることは気持ちのよいこと」と書かれて、担任としてほっとしたのを覚えている。ロングホームルームでも思うことを飾らず話す生徒が多かった。そのため、生徒の本音が聞こえてきた。ただ、その本音には、自分の力を活かしてみようという態度が

表現されることは少なかった。

二学期末、「私の将来」を話し合った時、働き続けることに消極的な意見が多く出た。「できるだけ簡単に、楽な仕事をしたい」「夫の経済力に応じて仕事をしたい」「姑がいたら仕事を続けたい」などという発言が次々と続いたのである。

本校の卒業生の就職者と進学者の比は、約六対四。就職者は地元志向が強く、定着率も高い。街のいたる所で働く卒業生を見かけると、進学者にも専門学校に進み、働くための資格を取りたいと考える生徒が多い。「働かねばならない」という生徒の意識は強いと言える。また、働けるだけ働いている母親を見ながら成長してきた生徒たちでもある。人口わずか十万人の地方都市に生活し続けたいと願う生徒たち。彼女たちの将来を考える時に、働き続ける卒業生の姿が浮かび、生徒の母親たちの生き方がダブってくる。生徒自身にも心のどこかに、自分が一生労働に携わるのだと了解しているところもある。

このような生徒たちが、一年生の二学期に、「楽で、簡単な仕事」という発言をしたことに、担任として考え込んでしまった。それまでのロングホームルームでも気がかりになっていた次のような発言もあって、気が一層重くなっていたのである。

七月十五日「生きがいについて」

・夫や子供・結婚が人生の生きがい・女が仕事に意欲を失うのも仕方がない・仕事よりも子育ての方が楽で、楽しいようだ

十月二十八日 読書会「太郎物語」

・太郎は、女子に友人として付き合っている。この点で一般の男子と違う・太郎の母は冷たすぎる・幼いのに、両親は厳しすぎないの

か・小学校までは甘えさせ、中学校で解放的にしてほしい

十一月十八日「男と女について」

・ボーイフレンドは甘える相手。頼もしい人。相談相手・女って、単純で、依頼心が強い

生徒の「生きること」のイメージは実に受動的である。「働くこと」「生きること」を、放ってはおけないと強く感じた。

「簡単な仕事」という発言にこだわりながら、特別な手だても出来ぬままに三学期を過ごし、春休みを迎えた。課題を学年として課すことが決まった。一、和田典子著『女生徒の進路』の読破二、『職業』の要約とその感想の提出。課題を点検しながら、それが生徒の労働観にどれだけ迫るものであったか、多少不満も残った。が、生徒は内容を読み取ってはいいた。

二年になった。新たなクラスで春休みの課題を基礎に「女子の賃金」を話し合った。女子の昇給、男女の賃金差、男女の能力差について討論したが、「なぜ」という質問にも社会の常識ですませ、討論の深まりに欠けていた。母親たちの低賃金にも、掘り下げた話し合いが少なかった。

卒業生との座談会

七月、進路部による「卒業生との座談会」がもたれた。この企画は十数年続いている。今回からは、三年生の他に二年生も加えてもらった。きてもらった卒業生は、生徒との年齢差も小さく、同じ職場で働き続ける人だちであった。身近な職種の先輩たちに、生徒は自分の将来を重ねて、話を聞いていた。生き生きと仕事を語って

れた卒業生たちの話の内容は次のとおりである。

A―市内私立幼稚園勤務七年目 既婚

嫁入道具よりは一人で生きていける力をと、親は短大入学を許してくれた。親が無理して与えてくれた資格は捨てられない。結婚退職は全く考えなかった。子供ができて辞めないだろう。仕事で自分が成長してきているのがよくわかる。幼稚園教育は、子供にきかけを与え、自分で発見し行動できるように働きかけること、つまり自立を育てることだ。私が誰かに頼っているには教えられない。夫やり家庭に埋没しない自分を確保しておきたい。

B―市内スーパー勤務レジ係五年目 独身

入社時事務への配属だったが、販売を希望。販売は受身ではできない。客とどうコミュニケーションが持てるかが勝負だ。仕事は、自分に自信がないと続けられない。すすんで仕事をすることで、自信はつく。たかがレジ係なのかもしれないが、私の全生活を支えていると思うと、仕事がかわいいというか、大切というか、とにかくやらなくちゃと思う。

C―市内商社会社勤務六年目 既婚

お茶くみ程度という仕事内容で応募したが、採用時に「結婚退職」の誓約をさせられた。すぐ先生に報告したら、「法律的根拠はないのだからがんばれば大丈夫だよ」と言われて動めることにした。キーバンチャーで配属され、腱しゅう炎にかかる。労災や通院休暇を認めさせるたたかひもあった。結婚時には退職を迫られるが、辞めても働く口がないので「辞めない」とがんばった。出産の時も、退職要請があったが、子供が産まれるからこそ辞められなかった。仕事は、誰かにかばってもらえない。全部自分の責任。仕事

をキチンとしないと、自分の意見は言えない。働き続けるのは、自分らしい自分を保つため。母親として、子供に生きている自分を見せたいから。苦勞して勝ちとった道を、みんなに続いてほしい。

D―自宅で理容師 独身

東京で住み込みをしながら、四年間理容学校に通う。働きながら学ぶのは苦しかったが、一生この仕事は離せないという思いにさせられた。理容師は他人を美しくする仕事で、自分は決して華やかになつてはいけない。自分を見失い、生き方が曖昧な時は腕も落ちる。今は母と二人で店をやっている。小さい時から働く母を見て、一緒に働けるようになりたいたいと思っていた。働く母親に子供は反発しながらも、着実に自分の未来像にしてゆくのではないだろうか。

E―市内法人病院看護婦三年目 独身

高校三年の夏まで進路が決まらなかった。ドタン場で母の仕事である看護婦を目指すことにした。受験勉強はスタートが遅く苦勞した。看護婦は人の手助けをしながら自分をみがいていく仕事だ。主に女同志のチームで仕事をするが、一人のミスも許されない。どうでもいい人が一人いてもチームとしていい仕事ができない。新しい医学の知識に毎日挑戦しているので苦しいが、働くことは労働とお金を交換することなので、そのような責任を伴うのは当然だ。

座談会を終わって、生徒の多くは、卒業生たちの生き方に感激し、働くことの厳しさと素晴らしさに興奮していたように見えた。

幼いころは親に甘やかして欲しいと思ひ、現在はボーイフレンドを頼もしいと感じ、未来は結婚や子供を生きがいとしたい生徒たち。おとなになることを、常識を身につけることと取り違えたりも

する。彼女たちを前に、卒業生は、他に寄りかかって仕事はできない、仕事は自分の責任でなされると語った。お茶くみでも、レジ係でも、精一杯努力をしていた。それぞれの生活をかけて仕事にうち込んでいた。就職してからのことについては、自分の思考を停止してしまっていた生徒たち。社会通念であろうと、ボーイフレンドであろうと、何かに頼る者に、自己の責任を重大に考える必要はなかった。生徒は、卒業生たちと、自分とに、大きな落差があることに気づいている。生徒たちは、楽しい家庭生活、子育てに専念できる専業主婦に憧れながらも、それでは暮らしてゆけない現実をも知っている。だから、働くなら自分に負担のからぬ仕事にとどめておきたいと考えてきた。働くことに真正面から立ち向かい、壁を乗り越えている先輩たちの生き方と、生徒のこれまでの労働観は、まっとうから対立する。

結婚後働き続けたいと考える者にも、家事に専念できないことや、子供を犠牲にすることに後めたさを感じる生徒もいる。働き続ける母に批判的な生徒もあるが、それは彼女ら自身の心理的自立が十分でないためであったり、子供として母を見るだけで、働く母を眺める視点が欠けているためであったりする。働き続けることが、自分が選べる道ではなく、そうならざるをえないだけの事と考える生徒たちに、卒業生たちは働く根拠のようなものを明示してくれた。母親たちの姿が当然なものであり、心の中に働き続ける人生は正しいのだという励ましを与えてくれた。

座談会で生徒たちは、先輩たちの生き方に自己実現している人間の充実感と自信を見た。卒業生の生き生きとした生き方が、大きな落差をもつ生徒たちの現状に激しい勢いで流れ落ちてきた。しっか

りとした自己を持つことは、自分の主体性を、働くということによって社会に向かって証明できることなのではないのか。人間は、歴史の中でも、自然へ働きかけることで自然そのまゝの生活を変えてきたという事実がある。人が社会に働きかけることは、生きている人間の主体性の証しであり、自立の始まりでもあると思う。主体的に生きることは、自分で考え続けることや、自己を主張することなどではないのか。様々の社会通念に疑問を感じる前に、すでに寛容な生徒。彼女らに物事を自分の目でながめて、自分の言葉で考える力をつけさせたいと思う。しかし、他への依存の強い生徒は未だに多い。また、自立を妨げるような情報、彼女たちの目や耳に多量に届いているのも事実である。だからこそ、私たちは、自己を見失わずに生きる人間を育てるために、手だてを講じてゆかねばならない。生徒は、そうした人間が近くにいるということを座談会で知ったはずである。しかも、社会通念を破るという、重く孤独な作業を重ねている人間が身近にいるのだということのみたのである。

今年度の座談会も近い。それまでには、経済的自立の問題、育児や家庭の問題について生徒の理解を少しは深めておきたい。数ヶ月後に働き始める者として、働き続ける壁をどうのり越えるかを話し合っ

合って欲しいと思う。
(酒田市立酒田中央高等学校)

月刊W I S E (ワイズ) 6月号

特集 子供たちは何を視る？

——離婚した父と母の狭間で——

対談 野坂昭如「子供をもったら離婚はするな」VS道下匡子
「別れないためにもっと悲しい思いをする子供もいる」他

原稿募集

① 研究論文・実践報告 (図表を含めて五千字まで)
② 発言

▼ 学習の主人公たち——小・中・高生徒の率直な声を
▼ 市民として (二千八百字まで)

▼ 親もいたい (千三百字または二千八百字まで)
▼ 教師のつぶやき (千三百字まで)

③ Weに、なんでも言おう、なんでも聞こう (本誌の内容・体裁などについての建設的な意見)

④ わたくしからあなたに (読者・執筆者・編集者の交換室) ③④は、はがきでお気軽に

『We』のバックナンバー テーマのご案内

<1982年>

創刊号 いでたちぬ、いま
6月号 共に生きる
7月号 新しい家庭科とは
8・9月号 反戦とは、平和とは
10月号 人間の自立とは
11月号 家事労働を問う
12月号 家庭・家族

<1983年>

1月号 男と女の新しいかわりを
2・3月号 くらしをいとおしむ
4月号 教師は今こそ声を
5月号 産む・産まぬ…

御希望の方は小杜宛ご連絡下さい。

定価 1冊500円です。

182 調布市西つつじヶ丘2-25-14

ウィ書房 (郵便・東京 6-59867)

新しい家庭科を創るために

＊ 小学校では ＊

福田三津夫

おもしろい家庭科の授業を

—家事・育児の分担—

今年の三月に卒業した一人は次のような作文を書いてくれた。私の授業内容とその方法が浮き彫りにされているので、ちょっと長いが付き合っていただきたい。

家庭科とぼく

ぼくは、六年生の四月に転校して来たので、福田先生の家庭科は、一年間しか受けられませんでした。

ぼくは、福田先生の家庭科を受けて、びっくりしたことがあります。それは、教科書などをあまり使わずにやっていたことです。だからとても楽しい家庭科になったなあと思います。

授業の方は、「スカッとさわやかコーラの授業」や「もう、毎日

(←) 楽しくない授業なんて……

福田 貴宏

が洗たく日、「ぐうたらママ」などのマンガを使った「家族の話」、「東京のゴミ」、「ゴミドン」などとてもためになることばかりだなあと思いました。

そして、その授業でびっくりしたことは、コカ・コーラなどのジュース類は、たくさん糖分をふくんでいることや、合成洗剤より粉石けんの方がよく落ちることや、はみがきこにも、合成洗剤が入っていたりしているのです。このごろは、頭を洗うのを、シャンプーを使わずに石けんで洗ったりするようになり、また、母に、「合成洗剤より、粉石けんの方がよく落ちるよ」と言ったりするようになりました。

また、調理実習やさいほうなどは、「エプロン作り」や「パン作り」や「デコレーションケーキ作り」などをやりました。「エプロン作り」は、図案をなにするかがまよいましたが、自分でも気に入る作品が出来たなあと思います。

そして「アルバムししゅう」の方も、図案を作るのが一番難しかったです。そして一枚、図案を書いてみましたが、陽明門には見え、ししゅうする時に、かってに自分ですすをへらしたりしてやりました。そして、メ切り日の九月三十日が近づいてきました。ぼくは、毎日、おそくまでやったので、なんとかその日までに出すことが出来ました。裏側がとてむぐちゃぐちゃなのですが、色をたくさん使っているからしょうがないと思いました。でも、良いのができ

たなあと、自分では思いました。

「パン作り」や「デコレーションケーキ作り」では、自分たちが作って食べるのは、またおいしく感じられました。調理実習でやりたかったことは、豆ふ作りやグラタン、チャーハンなどを作りたかったなあと 생각합니다。

福田先生については、初めての家庭科の授業の時に、その先生が男の先生で、ぼくと同じみょう字だったので、とってもびっくりしました。

福田先生の授業を受けて、本当に良かったなあと 생각합니다。クイズ式でやったり、マンガを使ったり、家庭科通信「パン」などを出したり。また、福田先生は、とてもユニークで面白い先生だなあと 思いました。授業中に自分の小さいころのことを話したり、それもまた楽しくて、授業がとても面白いでした。

中学へ行っても、技術・家庭と変わりますが、一生懸命やっていきたいなあと 思います。

七二年に教師となって、私は様々な民間教育研究団体に参加してきました。日本生活教育連盟を振り出しに、七三年に創刊された『ひと』による「ひと塾」(この中で最も影響を受けたものに、数学教育協議会、社会科の授業を創る会、仮説実験授業研究会など)さらに最近では日本演劇教育連盟の常任委員などもやっている。

こうした団体のサークル人と出会うことによって、確実に現在の自分があると思う。授業に対する考え方も徐々に固まってきたのである。

子どもたちが私の授業に対して、〈楽しい〉とか〈おもしろい〉

と言ってくれることを、現在の私は最も期待している。逆に言えば、こうしたことを言わせるがために授業しているのかなあと、よく思う。〈楽しい〉〈おもしろい〉授業を成立させるためには、まず教師自身が授業していて楽しくおもしろくなければならぬ。さらに、子どもたちにとっては〈わかる〉〈できる〉ことが〈楽しい〉〈おもしろい〉の重要な要素となっていることは言うまでもないことだろう。

もちろん、〈楽しい〉〈おもしろい〉と言っても、その内実は様々である。前掲の福田君は、卒業アルバム文集の表紙に七小の今までの水準を超えた実に素晴らしいクロスステッチしゅうをしたのだった。日光の陽明門に挑戦したのだが、あのきらびやかな色を出すために、彼はしゅう糸を複雑に幾色も混ぜて何日も半徹夜で頑張ったのである。出来あがった時、「つらかったけど、楽しかった」というのである。いろいろの楽しさ、おもしろさがある。

だから次のような調査結果が出た時、私は複雑な気持ちになる。1と2の子どもは、どんな気分で二時間いすにすわっているのだろう。

へ一学期の家庭科の授業について

	(五年)	(六年)
5 : とても楽しい	41人	27人
4 : 楽しい	38人	39人
3 : ふつう	18人	24人
2 : つまらない	1人	1人
1 : とてもつまらない	2人	0人

(じゃがいも80g 1個)

児 童	A	B	C	D	平均
包丁	6.2 4	16.6 1.40	17.2 2	26.5 1.30	16.4 2.13
皮むき器	7.5 1.30	14.7 1	13.7 1.30	12.5 1	11.7 1.15

てみたという。その結果が次表のようで、皮むきに要する時間を平均して短縮し廃棄率も五%ほど減らすことができたという。さらには、「余談だが、いただいた研究費で皮むき器を十数種類買いこんで使ってみた。日本製は刃が横に手前に引くが外国製は、刃が縦で横にすべらせる型が多い。中では、西ドイツ製リッターが軽くてよくむける」というように、家庭科の授業の中で皮むき器を推奨し、御丁寧に商品テストまでしてみる熱の入れようである。

確かに皮むき器の方が子どもにとっては早

5…よくわかった	33人
4…わかった	44人
3…ふつう	21人
2…わからない	1人
1…まったくわからない	0人

(一九八二・九 調査)

さて、授業をおもしろく、楽しくするためには教材が十分子どもや教師を刺激するものでなくてはならないだろう。

ある小学校の家庭科研究会の会報に載っていた次のような報告に啞然とさせられたのは私一人であらうか。

研究主題は「児童一人一人の発想や技術を生かす指導法の工夫—卵料理・じゃがいも料理の指導を通して—」ということ、皮むきの技能」を検討して、調理実習時間に包丁と皮むき器を併用させ

く、うまくむけるかもしれないが、包丁を使うことによって養われる、あの手のしなやかさをどう保障しようというのだろう。さらに、おそらく、手慣れた子にはずっと包丁の方が便利になるに違いないと思う。そして一番問題なのはこうした教材の授業で果たして子どもがのってくるとでもいうのだろうか。

私の考える家庭科はものを作る授業と消費者教育の二つに大別される。例を示そう。

・ものを作る授業——カレーライス(ルーも作る)、手打ちうどん、ハニークッキー、ロールパン、デコレーションケーキ、ぞうきん、三角きん、袋、エプロン、ししゅうなど
・消費者教育——合成洗剤と石けん、食品添加物、味の話(砂糖と食塩)など

・その他——東京のゴミ、家族の話など

一応のカリキュラムはできているが、変動的である。種々の民間教育研究団体の成果をへつまみぐいして、どんどんふとっていきうと考えている。ただ、衣食住の各領域がバラバラにならずに関連性をもたせたいものである。これからの報告の中で試案を提出したいと思うので批判検討を願いたい。

(二) 家事・育児の分担——初めての授業

五年生の子どもが教室に入ってくる。第一回目の授業は担任教師がついて来ることがあったり、クラス替えて新しい組になったばかりなので、お互いに緊張感が漂っている。初めての家庭科の授業ということもあり、まだ期待も不安もあるのだろう。

子どもたちとは、授業では一年ぶりということになる。三年の時

図工を教えているからである。一年も経つと随分大きくなったなという感じがする。相変わらず賑やかな子もいれば、いやに落ち着いたという子もいる。

家庭科室は二人机である。最初は機械的に出席番号順に座わせてしまう。窓側から左男一列、右女一列、五番までいったら次の行というようにする。五年の一学期はいつもこれで通してしまう。理由は単純、こうした方がすぐ名前を覚えられるからである。「名札があるから大丈夫」という教師がいるが、これは嘘である。昔風のハンカチを二つに折ったような一年生の名札でなければ、とうてい目の悪い私には後列の子までは見えるはずがない。

そもそも名札には私は大反対なのだ。生活指導研究会で年度末反省の時いつも問題になる。「名札をつけた方が早く名前を覚えるから付けさせたい」と賛成論者は言うが、本音はどうも子どもをいかに管理するかにあるようだ。なにしろ実用的でないのだ。名前は名札で覚えるものではなく顔で覚えるものだと思う。いや顔というより、その子とのかかわりの深さで覚えていくものだろう。名前は知らなくても名札を見て、「○○ちゃん」と呼びかければ、呼ばれた子どもはその教師に対して親しみを持つと言う。冗談じゃない。あまり子どもを馬鹿にしない方がいい。教えるだけの教師よりも、子どもの方がずっと感受性が豊かなのだ。教師のいやらしさを子どもは敏感に察知してしまう。

転入生もいるので、私の自己紹介を一応した後、一人一人の名前を呼んで返事してもらおう。ほとんど覚えていいるがなかにはおとなしい、目立たない子などいても再確認していく。名前は兄弟姉妹関係から覚えると忘れない。同じ親からの子で、こうも違うものか、な

どと考えていると時間はすぐ過ぎてしまう。

「お兄ちゃん、都立に入ったんだって?」

「お姉さんに今度の演劇部の上演いつ演るか聞いて?」

「お母さんよろしくね」

……こういう出会いはとても大切なものだと私は思っている。こうした交流の中で子どもたちもようやく緊張感がなくなっていくようにだ。

黙って入室して、私が席を決めると、日直らしき子が「起立!」などと号札をかける組もある。担任がいて指示する場合もある。

「ちょっとすわってください。あのね、この教室では号札はかけません。あいさつはみんなが入って来た時にそれぞれすればいいんですね。だから、みんなが席に着く時にはあいさつは終わっているわけ」

卒業式などでやたらと「起立!」「礼!」「着席!」などと号札をかける司会(たいがい教頭)が多いが、これなどはいかに全員を抑えるか、整然とさせるかをねらった教化でしかないと思う。こうした画一的な子どもとの付き合いの中からは本物の教育など生まれな
いと思っている。

家庭科室の使い方、ノートの創り方、担任と専科などについて少し前置きをして、いよいよ授業内容に入っていく。

毎日新聞の日曜版に「ぐうたらママ」(古谷三敏、ファミリー企画)という漫画がある。学校でとっているの、なにげなく読んでみたとしてもおもしろい。

ママは仕事に出ているわけでもないのに、どうやら家事一切をし

ないようである。サラリーマンのパパがその肩代りをするのである。子どもはグズオ一人、おとなしくって素直そうな小学生。

新学期にはこれを二、三枚用意しておく。例えば、八二年十一月二八日の新聞のあらすじは次のようである。

ある日パパは会社の帰りにどじょうを買って来て、はりきって柳川なべを作ろうとする。ママは金魚バチの中にどじょうを入れて飼うつもりである。「ママ、それ今日のおかずに買ってきたんだよ」と言う、ママが、「オニ!」。しょうがないので、夕食は出前ということになるが、ママのリクエストはうな重なのである。



(毎日新聞日曜版「ぐうたらママ」より転載)

こう文書で書いてしまうと、この漫画のおもしろさは全く伝わらなくなってしまうので残念だが、子どもたちは大喜びである。一人一人で楽しめばいいのだが、みんなで読めばもっとおもしろい。役を立候補させて、出ない時は元気のいい子をおだてあげてやらせてしまふ。語りは私が適当にアレンジして入れると、結構劇らしくなってくる。

漫画も三枚目になってくると子どもたちはのりにつく。三十人以上もいると役者はいるものである。ママ、パパ、グズオ、時にはグズオの友達、パパの会社の同僚なども登場して賑やかになっ

てくる。こうなると、台詞だけでは物足りなくなる。机をコの字型に並びかえ、即席のステージを作る。ギリシャローマの円型劇場らしきものになる。あらずじは単純だからすぐ覚えられる。台詞は相手の言葉に合わせて即興でどんどん言わせる。本来、子どもは劇が好きであるからやる側も見る側も楽しい。騒々しいなかで時計を見たら、あと十分なのでノートにまとめさせる。

〈感想〉・おもしろかった。

でも、しゃべりかたがみんなへただった。ナンチャッテ。来週も、今日の授業みたいなものをやりたい。(♀)

・ぐうたらママはかわっていると思う。夕がたになってから、おきたりして、とてもおもしろいと思う。なんでもパパにやらして、パパがかわいそうだと思う。パパは、きっと、こんなママとけっこうして、そんなにしたと思ったにちがいないと思う。(♀)

・ぐうたらママはどうしてかじをやらないのかふしぎだ。それでパパにたのんで、自分は、まんがやテレビを見ている。そんなおくさんとけっこうしなければよかった。でもパパもよりうりができるので、よかったと思う。ぼくもかていかをがんばってかじができるようにしたい。(♂)

・勉強じゃなくて、お話をきいてみたいできいておもしろい。マンガをいれてやるのがふしぎだ。先生は学校でマンガをよむとおこるのになぜだろう。(♀)

「ぐうたらママ」の家の持ちよう

- ① パパが料理する。買いもの、洗たく、そうじ家事
② ママはまんがを見る。テレビを見る。

〈子どものノートより〉

随分気を使ってくれる子どももいるもので、「ぐうたらママ」がなんで家庭科と関係があるのか、心配してくれたようである。

次の時間は、「ぐうたらママ」の家のパパがする仕事にはどんなのがあるだろうか想像してもらったら、子どものノートのようにいろいろ出された。

「実は、このようなことについて二年間家庭科で勉強していくんだよ」

ということでおさえる。さてそれでは自分の

家庭の仕事

- ① 衣…洗たく、アイロン、さいほう……
② 食…料理、配ぜん、かたづけ……
③ 住…そうじ、せいとん……
④ その他…病人・子どものせわ、ふとんのあげおろし……

〈子どものノートより〉

がに新しい教科書にはなくなっているが。我家の家事分担の表は妻との合議で作ったものである。結婚してからの変更については前号を参照していただきたい。

ある組では家事の特徴として①お母さんが中心 32人 ②お父さんが中心 0人 ③お父さんお母さんがほぼ半々 1人という結果になった。我家のような事実信じられないといった顔である。

次にこの組の家族関係を調べてみた。核

家では家事分担がどうなっているか調べようことにして、ここで教科書(東京書籍)の「家庭の仕事調べ」を参考にして表を作らせた。でもちょっと気に入らなかったのは、祖母が教科書では父母の次にきていることである。家父長制をひきずっているようで問題がある。

「家族は年齢順に並べてみよう。お母さんの方が年上の場合はお父さんより上にね」

我が家の場合を板書しながら一緒にノートにまとめさせた。私は妻より三か月早く生まれたので次頁表の順番になっている。

教科書と言えは六年のページに昨年まではある家族の団らんの写真があった。お母さんがお茶をいれ、女の子が菓子配っている。男の子はおばあちゃんの肩を揉むといった図で、人によっては大変ほえましく感じるかもしれないが、私は、これはひどいと思った。お父さんがデンと座わって一人何もしてないのである。さらに悪いことに人のいる前で平気でタバコを喫っているのである。さす

○時々ある

仕 事	食事作り	はせんかたづけ	へやのそつじ	ふろトイレまじ	家の外をそつじ	こみのしまつ	ふとんのあひだし	せんたく	パイロふけ (とろろかきまじ)	さいほう	買い物	家計簿のつけ	ふとんのせわ	病入のせわ	ちんぎの仕事	朝練のせわ
夫(男)	●	●	●	○	●	●	○	●	●	●	●		●	●	●	○
妻(女)	●	●	●	●	○		○	●	●	●	●	●	●	●	●	○
長男(男)	○	●			○	○		○	○	○		○	○	○		●
長女(女)	○	●						○	○							

家族が28人、おじいさんおばあさんのどちらかでも一緒に生活している子はわずか5人であつた。更にお母さんがパートも含めて、どれだけ家事以外の仕事をしているか、いわゆる共働きの家が25人、専業主婦はどうやらたった8人である。

「どうも、みんなの組の家族の様子でわかったように、ほとんどの家が共働きなのに、家事・育児はお母さんの仕事になっているね。では、外国の男性はどうだろう」。

家庭の仕事

	食事作り	洗濯・掃除	育児	その他
夫(37)	●	●	●	
妻(33)	●	●	●	
長男(6歳)	○	●		
長女(4歳)	○	●		

しているという。「それだけ女性が強いのではなかね」という彼の話に一同大笑いしたのであるが、私には笑えない事実として残った。

なぜ現在こういう情況なのか、子どもたちには一言で説明できるものではない。もっと、我々教師自身、女性史の研究をしなくては

家事をほとんどしない夫の比率(諸外国との比較)(%)

国 名	アメリカ	ドイツ	タ イ	ブラジル	日 本
掃 除	28.7	17.0	18.1	22.2	41.2
買 物	23.7	6.6	14.6	11.1	81.7
食事の後 片づけ	37.7	13.2	39.6	33.3	76.3

(NHK「働く女性の意識に関する報告書」1975年)

ならぬと思つた次第である。

そしてこの授業の最後に、私は我が家の家育史を語ることにしている。おむつの洗い方などの話題になると、ほとんどの子が興味津々と聞き耳をたてる。私にとって家庭科とは自分自身をさらけ出さなければどうにもならない教科なのだなあと、この頃強く思っている。

(清瀬市立清瀬第七小学校)

新しい家庭科を創るために

＊ 中学校では

太森 嘉子

食品研究 Ⅱ

——グループ発表から——

一、発表をめざして
前回で報告したように「安全な食生活を考える」ことに、どこから切りこんでいくか？ 各グループ、どうにかテーマが決まり、学習を開始した。

身近な書籍をさがしたり、食品会社に問い合わせたり、図書館、保健所、消費者センターを訪ねたりして、いろいろと資料を集める。また実態調査や、実験・実習を試みるグループもある。それぞれの方法で学習は、進められていった。

どのグループもスムーズに、学習に乗り出したかというところ、そうはいかなかった。受身の授業に慣れている生徒たちにとって、自ら求めなければならない学習は、めんどろで、なかなか腰があがらない。発表の期日まで三週間、授業時間をどう使い、放課後をどう使うか、そのグループの自主的な計画と行動である。グループの一人

一人がどのように学習に参加していくか、そのグループに任されている。少し要求が高すぎるのかも知れない。

前にも書いたが、図書室や家庭科室にある資料でさえ、見ようとしないグループもある。「テーマは食品添加物だけれど、どの本の何ページに書いてあるのか」と質問してくる者さえある。こちらには、何冊かの資料を提供することはあるが、それ以上の親切はしないことにしている。ガミガミ文句を言っても逆効果になりかねないので、いつ生徒たち自ら行動しはじめるか、じっと待っている。まわりのグループが行動しはじめ、だいたい学習が進んでいることが見えてくると、グループの一人二人が、仲間をつっついて、自分からこうしよう、と提案するようになれば、しめたものである。授業時間の初めに、学習がどこまで進んでいるか、簡単に報告させ、グループ相互に刺激を与えるようにした。

学習の過程で、勝手な行動から仲間割れをしたり、クラブ活動や委員会活動などとの時間の調整に四苦八苦したり、計画のなさで、発表の前日になってあわてたり、どのグループも、多かれ、少なかれ、問題を抱えながら、なんとか発表までこぎつけたのである。

二、いくつかのグループ研究を追って

〈着色料〉

・お菓子の中の添加物で目につく着色料に着目したグループ

タール系色素の有害性、日本で許可されているものが外国にくらべて多いこと。ジュースやアメの合成着色料で、白い毛糸を染める実験や、合成着色料をまぜ合わせて、チョコレート色やかき氷のシロップ（イチゴやメロン色）を作って見せた実験、目で見てよくわかる発表であった。

・着色料に着目したもう一つのグループ

「合成着色料は悪いというが、天然着色料は良いのか」を出発点に、天然着色料について調べ始めた。非食用の昆虫やカビが使われている。成分の抽出に化学物質を使う。使用基準なし、表示義務なしで用量が多い。天然もまた危険であること。天然着色料を使用しているかどうか調べる実験など、興味深い発表であった。

〈清涼飲料水〉

・自分たちが好んで飲んでいる清涼飲料水の中のコーラに目をつけたグループ

コーラの成分を調べる中で、リン酸の取りすぎの問題、糖分の取りすぎの問題にぶつかり、二つに別かれて、それぞれくわしく調べることになった。いろいろな加工食品にリン酸が含まれていること、リン酸の取りすぎは、カルシウムを追い出し、骨を弱くしている原因になっていること。

コカコーラ一缶で砂糖がベツトシュガー三袋（30g）も入っている、子どもの一日に必要な量以上の糖分をとってしまうことに驚き、糖分の取りすぎは、食欲不振、肥満、糖尿病、虫歯の原因になること、多くなってきた子どもたちの成人病についてまで、発展させた発表で、なかなかよく調べてあった。

〈カルシウムと骨の関係〉

・最近、骨折など骨に関するけがが増えてきていることから、その原因を探ろうとしたグループ

養護の先生、保健所の方の協力を得て、ねんざや骨折が年々増えている現状や、本校においても、ここ五年間で、骨に関するけがが約二倍になっていることを知った。その原因は、運動不足と食生活にあること。

カルシウムの取り方が少なく、加工食品、インスタント食品、清涼飲料水など、リン酸を含む食品の取りすぎは、カルシウム対リン（1：1）のバランスをくずし、カルシウムを体外に追い出してしまった骨を弱くしていることなど、コーラを調べる中で、リン酸にぶつかったグループとは迫り方が違う、実際の生活と健康を結びつけた興味ある発表であった。

〈アイスクリーム〉

・自分たちが大好きな「アイスクリーム」に飛びついたグループ
アイスクリームの作り方を調べ、市販品と手づくりの違いを、実際に作ったものを発表当日持ってきて、試食をしながら比較した。手作りのもの（牛乳、生クリーム、卵、砂糖）と、市販品に入っている糊料と着色料を入れて作ったものを比べて見せた。添加物の入ったアイスクリームは、色がきれいで、量が三倍にも増えていたのにみんなどはビックリ！ 価格を安くあげるための手段と質の低下を目のあたりに見せてくれた、おもしろい発表であった。

試食した時、市販品の方がおいしいと言って食べた者がかなりいた。本物を知らない恐ろしさを感じずにはいられなかった。

〈発色剤〉

自分たちが好きで、弁当のおかずなどによく利用されているハ

ム、ソーセージに注目し、食品添加物「発色剤」を調べたグループ
このグループは、かなりみんなが積極的に協力しあい、実態調査、保健所、消費者センターへの訪問、テレビや新聞の報道、実験といろいろな角度から、精力的に学習に取り組んでいた。そこで、少し具体的に、内容を追ってみることにする。

★テーマ設定の理由

ハム、ソーセージの表示を見ると、化学調味料、結着剤、着色料、保存料、発色剤など、一つの食品にいくつもの食品添加物が使用されていることがわかる。ここに、加工食品の問題点があるように思う。ハムがきれいなピンク色をしているのは、本当の肉の色ではなさそうだ。ハム、ソーセージに必ずといってよいほど使われている「発色剤」について調べることにした。私たちの力で、どの程度できるかがんばってみる。

・一〇〇人（本校の父母、教師）に、実態調査 ・発色剤について（毒性・使用基準） ・発色剤含有実験 ・テレビ放映「手づくりのハム作り」 ・PTAの文化部の研修に参加した母親からの報告と資料提供……などの内容で、プリント十五枚ほどにまとめた（発表時に、発表の要旨を二〜三枚にまとめることになっていたが、このグループのたつての要求で枚数を増やした）

★生徒のレポートの中から（①）（⑥）

発表の中で「製造会社への一言」ということで、次のようなことが出された。

・身体に少しでも害になると思われるものは禁止してほしい。
・多少早くいたんでも、無添加の物を製造してほしい。
・外見に重点を置かず品質そのものに重点を置くような製造方法

をとってもらいたい

・品質の良いものは「値段」が高すぎる

・成長期の子どもがもっとたくさん食べられるようにしてほしい
・中に入っているものがどういいうものか、きちんと表示をしてほしい

・安全で品質がよく安い品物をたくさん出してほしい

・塩分を少なくしてほしい

・人間を大切にする心を持ち利益ばかりを考えてはしくない
なかなか厳しい、もっともな意見である。最後に『発色剤について、少しわかっていただけたと思います。私たちは、ハム、ソーセージを買う時、気をつけたいと思います。みなさんもちよつとだけ意識して下さい。みんなのちよつとだけが大切だと思います。お母さんにも話して下さい。研究に協力してください。先生方、お母さん方、消費者センター、保健所の方々に感謝します』としめくくり、それから、無添加のハム、ソーセージなどを売っている、町田の店の店（スーパー、デパートなど）を紹介して発表を終わった。

このグループは一人一人が、授業時間や調べに行く時だけでなく、日常的に注意深くアンテナをはっていたところに、この学習の意義を感じた。そして今後の日常生活の中で生徒たちが、この意識を持続させ、行動に発展させてくれることを願っている。

その他、三二のグループの発表があった。一グループ一五分の発表で、自分のクラスの八グループしか発表が聞けないので、その他は、各グループのプリント（二〜三枚）を読んで、どのような発表があったかを知るのである。

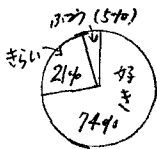
発表の方法をみると、提示物が、表、グラフ、絵などで、見やすく書いてあるもの。数字がいっぱい並んでいて、説明を聞いてもよくわからないもの、さまざまである。また、声が小さくて、何度か注意された者、発表時に、プリントが間に合わず、後日くばったグループ。中には、丸写し、棒読みに近い発表など、発表方法、内容ともに、十分なできとは言えない。しかし、初め資料を見ようとしなかった者の中に、学習し始めるとおもしろくなり、積極的になった者もでてきたし、最後までたまたしたグループも、何とか発表までこぎつけ、全員の声が聞けたのである。

お互いの発表を聞く中で、自分のグループの良かったところ、悪かったところ、こんな発表方法もあったのか、テーマは違っても関連があるのかなあ。同じテーマでも調べる角度が違っておもしろい。……など、いろいろと学習ができたようだ。次に生徒のレポートの中のいくつかを紹介する。

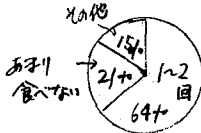
生徒のレポートから

① 発色剤についてのアンケート調査

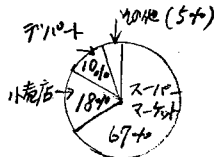
三つの父母と教師 100人に聞く



(1) ハムソーセージ類が好きですか。



(2) 1日に、ハムソーセージ類を、どれくらい食べていますか。



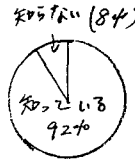
(3) ハムソーセージ類をどこで買いますか。



(4) ハムソーセージを買う時表示を見ますか。



(5) 「食品添加物」という言葉を知っていますか。



(6) 「発色剤」という言葉を知っていますか。

・ 半数以上の人が、ハム、ソーセージ類が好きで、1日に、1~2回は食べている。

・ スーパーのパック入り、袋入りを買う人が多い。

・ 「食品添加物」「発色剤」の言葉は、知っているも、表示を見ないで買う人が多いという。

②『発色剤』について

ハム・ソーセージはくん製品

塩漬けにした食品をけむりでいぶしたもので、けむりの殺菌作用により、微生物が繁殖しにくい、独特の味とかりがつく。

「くん製品」には添加物がたくさん含まれている。

肉用ソーセージ } 発色剤として亜硝酸ナトリウムを使用
魚肉ハム

食肉ハム・ソーセージ } 発色剤として亜硝酸ナトリウムを使用
ベーコン } 亜硝酸カルシウム
コンビーフ } 硝酸ナトリウム

「くん製品」にはその他長期間保存するために、酸化防止剤、味をよくする化学調味料、水分の調整とありをよめるために防腐剤など、多くの添加物が入っている。

発ガン物質としての危険性

※ 通介類などに含まれているターバク質の一種のアミン類と亜硝酸が反応してジメチルニトロソアミンという発ガン物質を作る。

※ 合成保存料のソルゼン酸と発色剤の亜硝酸が一緒になると強い発ガン物質を作る。

同じ食品を食べ続けると

同じハム・ソーセージなど食べあわせに注意。

STOP! ニトロソアミン!

ビタミンCの効用

ハムやソーセージと、あるいは野菜や果物を食べ合わせると、胃の中でニトロソアミンという強力な発ガン物質ができる（しかし、お通い食べる食品の中には、ニトロソアミンの生成をおさえてくれるビタミンCやアミノ酸を同時に含んでいる。

アミン類と亜硝酸が反応するためには、まわりの濃度が酸性であることが必要条件で、人間の胃の中は胃酸によって酸性になっているのでニトロソアミンの生成に、いい条件を揃えている。

ところがアミン類といふのはビタミンCがあるとき亜硝酸は、どちらか一方に先に反応して消費してしまい、ニトロソアミンの生成を抑える。

ハムやソーセージを食べる時は
ビタミンCを多く含む食品を
お忘れなく。

参考資料 農林省 食品成分表(海) 検編
からこの消費者
ビタミンはこんな初め(和田人)
野菜・ビタミン活用より(林徳満郎)

③消費者にできる 食品簡易テスト

不要な発色剤を見つけよう!

主な対象食品

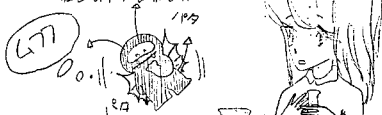
魚肉ソーセージ、ハム、ならこ、茄子、など

やり方

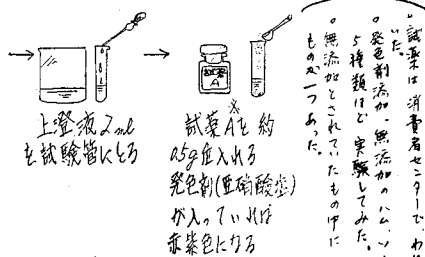
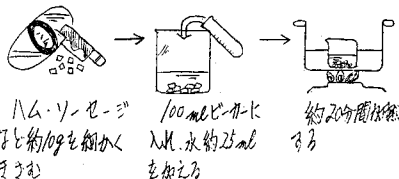
最近、魚肉ソーセージでは発色剤を使っているものがなくなってきたが、実際に使われているか、この方法でテストしてわかって来る。

原理

この発色原理は、亜硝酸のジアゾ化反応を利用したもの。スルファニル酸を亜硝酸をジアゾ化し、これにα-ナフチルアミンを結合させて紅色のアゾ色素を作る。



テストの仕方



※ 試薬A = クリーヌロキシ試薬

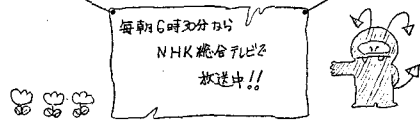
試薬は消費者センターでわけてもらった。発色剤添加か無添加かのハム・ソーセージ5種類ほど実験してみた。無添加とこれだったもの中に反応したものが一つあった。

増尾 清 試薬堂新光薬 消費者にできる食品簡易テストより

④ 明るい農村

「ハム作り教えます」から

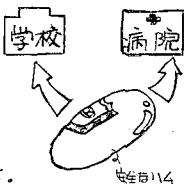
秋田県鹿角郡、雄物川上流に近い雄物川町の、まじり農協では去年秋、工場員が20人のハム・ソーセージ工場を建設しました。ハム・ソーセージ作りの指導者は、この道50年の山本さん(56歳)です。ハム・ソーセージを作る上で、大切な事は「肉を知る」という山本さん。ここでは、手作り、無添加のハム・ソーセージを作っています。昔からの作り方で肉をなるべく丁寧に、つけこみ、冷蔵庫といわれる大きな部屋で、じっくり熟成しています。肉自体から味が、かもし出されるようになります。手作りなので一日の生産量は、250kgと少なく、作るまで、忙しうたります。



⑤ 大町産ハム見学レポート

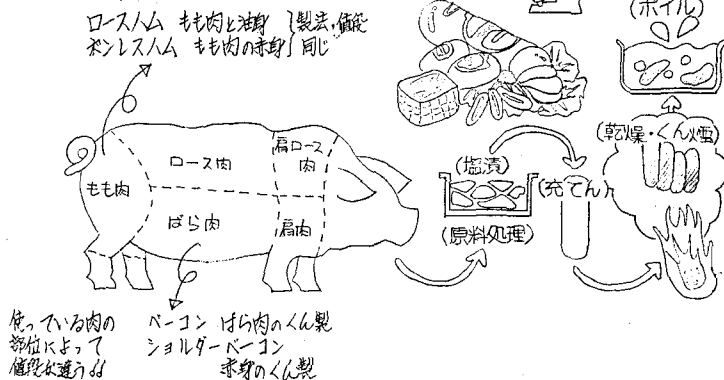
(6/11文化芸術研修旅行より)

昭和7年から「小森会」の名をスタートを切ったが、それ以前には大正10年よりドイツ技師アーグスト・エロマイヤ氏に技術指導を受け、我が国でも数少ない純ドイツ式ハム・ソーセージ・パークンを生産する「株式会社大町産ハム小森会」となった。大町産ハムでは、純ドイツ式製法(煮火ぐくん製法)という木を燃やし、時間をじっくりかけて肉からうま味(アミノ酸)をひきだすようにしているとのこと。おから多少値段も高くはなる。又、①天然調味料と香辛料を配合した独特の味、②長時間の自然熟成、③充分な乾燥、④丁寧にくん煙をすかせた豊かな風味が特徴がある。しかし、大手メーカーは、これらを造成式くん製法や、ている場合が多い。パークンにしても、外側はくん製風になっているが中身はやわらかい肉という事がある。生協の大きなバックがあり、学校、病院、その他各方面で積極的に早くおいしい商品を提供する為、細心の注意を払われて、出荷されているとのこと。



⑥ ハム、ソーセージの製造工程

(つづく) (東京都町田市立町田第三中学校)



新しい家庭科を創るために

＊高等学校では＊

入江一恵
西本和代・町田道子

生活実感を育てる

「生活と経済」の学習

はじめに

昨夏、高校生対象の82ひょうごサマースクールのくらしに関する講座が県立神戸生活科学センターで開かれた。前年度の講座が好評だったこともあり、県下から集まった高校生は、定員をはるかに超えて、主催者は、受講生を二回に分けて実施するという盛況振りであった。その最初の話し合いの中で、「今、私をもっとも欲しいものは」の司会者の問いにズバリ「お金」と「男」が返ってきたそうである。女子高が多かったことと、巧みな司会でリラックスした雰囲気を作られていたとはいえ、「友情」とか「生きがい」などを予想していた主催者は少なからず戸惑ったようである。翌日の神戸新聞は現代の若者気質と報じていた。

この最も関心のあるはずの「お金」にかかわる「生活と経済」の学習でどうも生徒の目が輝かない。上っ滑りな授業に流れている。

そんなもどかしさを感じさせられることが多い。難しい経済用語には拒否反応を示す。グラフ・数字から読みとる力が弱い。頻発する消費者問題に目を向けさせ、かしい消費者としての自覚を持たせ、それと消費者行動に結びつけるよう訴えるのだが、消費者運動はどこかのオバサマのしていること。タテマエとホンネの使い分けが返ってくる。授業のあとこんな空しさ^{そら}と焦りの中で、生徒自ら考えさせ、動かせ、触れさせ、発見させるためには……と考え続けてきた。その一つの試みを、長田高から——教育費から展開していく家庭の経済生活と、葺合高から——商品テストをとり入れた消費者問題の授業として報告する。

〈長田高校では〉

教育費から展開していく「家庭の経済生活」

本校では、二年の三学期に「家庭の経済生活」を学習している。

この時期は、生徒にとって進路の方向もほぼ決まって、そのほとんどが大学進学希望ということもあり、将来に向けての経済的関心も高まっていると考えるからである。しかし生徒の生活実感はなお乏しく、加えてこちらの力量不足もあって苦勞する。

あいつぐ公共料金の値上げ、物価高による実質賃金の伸び悩み、その生活費の補充を妻のパートなどによる収入に頼っている現状を説明するのに資料は事欠かない。住宅ローンの返済が家計を圧迫し

て起こった悲惨な事件に同情し、憤る心情を生徒は持ち合わせている。ただこれらの現象を家計と国民経済のしくみの中で総合的にとらえさせ、自分の経済行為に結びつけるのはかなり難しい。父親の給料は、たいていの家庭では銀行振込みとなり、労働に対する賃金の重みが感じられないのが現状である。

小遣帳をつけることから

生活実感を育てる手だてとして小遣帳の記帳を一年の最初に説明し、一ヶ月後に提出させる。この場合、小遣は月決めにし、その範囲内で自主的に使っていく態度を身につけさせ、高校三年間でどれだけ使ったかを算出させる。記帳の習慣づけをねらうと共に、三年間の経済面からの自己の生活記録とさせ、その変化を読みとらせる。ここから家計簿へと発展させる。二年の経済の学習時に全員に小遣について発表させる。一年からつけ通している者、途中でやめた者、月額七、〇〇〇円でも足りない者、二、〇〇〇円でも貯金している者、毎月小遣帳を親に見せる者など、エピソードを交えての発表に、日ごろ見せない友達的生活の一端を知ることができ興味深く、反省させられたり、とても参考になったとの感想をもらしている。ただ、こちらの意図する三年間つけ通す者の数はわずかで、習慣づけの目的を果たすには至っていない。

私たちの授業料は

現在、授業料の納付方法は、ほとんどの学校で銀行の自動振込みとなっている。そのためか経済の学習のはじめに、学校納付金の額を知っている者はわずか一クラス二、三名程度、かつての学資に対する感覚とは違って、その重さ、意識も変化している。ここで本校生徒の納付金の推移（資料1）のプリントによって、最も身近な

資料1 長田高校 学校納付金の推移 (入学年別) 円類

項目	46	48	49	51	52	54	55	57	58
授業料	800	800	800	3,200	4,000	4,800	5,600	5,600	6,200
育英会費	200	200	200	200	300	300	300	200	300
生徒会費	200	200	300	300	500	500	500	500	500
同窓会費	100	100	200	200	200	200	200	200	200
旅行権金	500	700	1,000	1,200	1,200	2,000	2,000	2,000	3,000
合 計	1,800	2,000	2,600	5,200	8,200	7,800	8,600	8,600	10,200

入学料 57年度より 2,000, (58年度より納入額12,000)

業、家計の経済のしくみを授業料を通して理解させる。

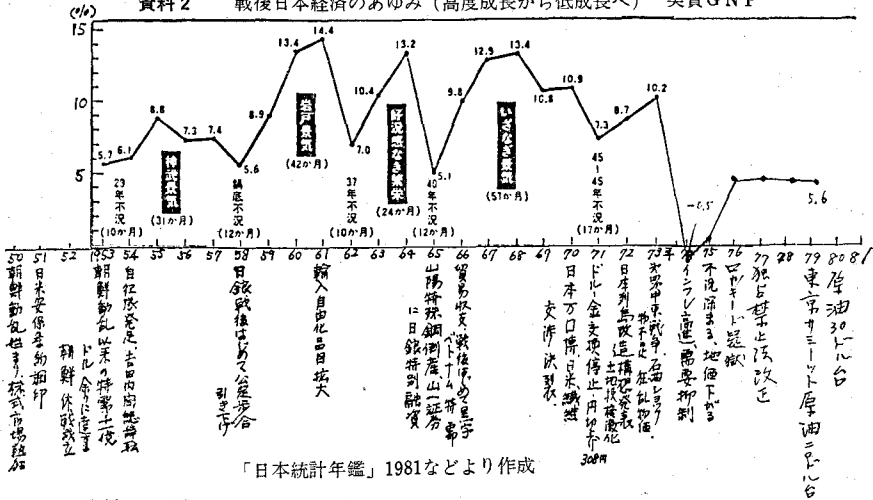
家計に占める教育費は

授業料の問題から一気に教育費全体へと話題を展開する。幼稚園から今までの教育費を算出させ、塾、おけいこごとの経費、公立と私学との格差（資料3）も認識させる。更に目前に迫る大学進学に要する諸経費も算出して家計の中に占める教育費の割合を実態として浮きぼりにさせていく。そして、親から精神的自立をめざすこの

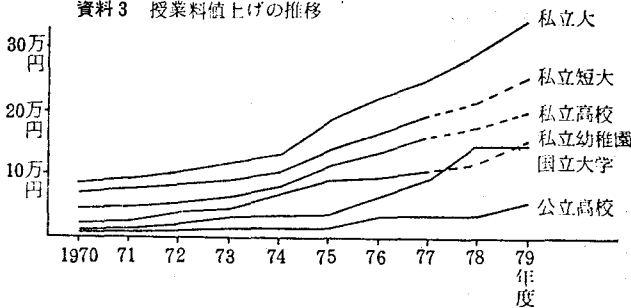
はずの納付金について考えていく。更に県財政のプリントも補助資料として用意し、県立高校の授業料と県財政との関係を知らせる。歳入の49%を県税に頼っているが、一九七五年度は県税減収14%となり、大幅な赤字をかかえピンチ、この打開の一方策として授業料の値上げが組まれたこと。また、この時期の県税減収は、七三年末のオイルショックに端を発した七四年の狂乱物価、景気の冷え込みによる日本経済の底の浅さが原因となっていることを究明し、国民は、二重、三重のしわよせを受けていることを次頁資料2によって説明する。

一 高校増設、その他によって八三年度の歳出の1/3が教育費となっていることにも触れながら、国、自治体、企

資料2 戦後日本経済のあゆみ（高度成長から低成長へ） 実質GNP



資料3 授業料値上げの推移



時期の生徒に、経済的自立がどのようなものか何を意味するかを考えさせ目ざめさせていく。

このあと「物価と家計」「予算生活」「物資の購入と消費」「流通機構」「消費者問題」へと展開していく。

〈養合高校では〉

消費者問題の学習に商品テストをとり入れて
前述のサマースクールに本校生徒が参加したのは昨
が二度目。「81くらしを科学する」に参加した生徒が九
月にクラスで報告した時の紅潮した頬、目の輝き、それ
は何か——私は生活科学センターの雑誌帳の参加メモを
読ませてもらった。「家庭科の授業はつまらないがこの
講座はおもしろかった」「先生にすすめられ、いやいや
参加したがこんなに楽しいとは、また来年も来たい」「楽
しみながら学ぶことができるのはステキ」。何が違うの
か。私自身への問いかけは日ごとにくらんでいった。
さかのぼって、八〇年全国高等学校家庭クラブ研究発
表大会が本県で開催されたが、その際、参加者に自ら挑
戦する機会を作ろうと商品鑑定を実施した。この催しは
大会では始めてのことというくらいいきさつがあった
が、結局、県連盟の主催ということで落着いた。この企
画、立案、実施に私も加わったが、商品の選択にはかな
り気を遣った。しかしこの時作ったパネルは、以後各学
校の文化祭に持ち回りで利用され、家庭科の展示の部屋
はこの商品鑑定を加えて盛況をきわめている。

資料4 トイレットペーパーに関して

購入時の関心度	2枚重ねか	60
	PCB	55
	価格の安さ	54
	長さ、幅など	49
	品質	49
不必要な性能	ミシン目	26
	蛍光染料	22
事故	香料	83
	漂白	73
	ミシン目	22
	2枚重ね	13
	ソフト化	5
事故	皮膚のかぶれ	3
	水洗トイレのつまり	2.7

は紫外線照射装置で調べる。ビー棒に水を入れガラス棒で攪拌しながら溶解

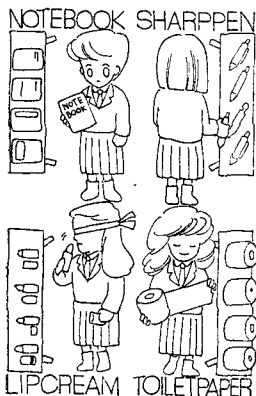
来週は商品テストと買い物コンテストをすると予告し、各班にトイレットペーパーを用意すること。その際四ロール入りの袋の表示、価格をメモしてやることを忘れないようにと注意する。
場所は広々とした被服室を当てる。机の大きいこともテストにはもってこいである。生徒はニコニコしながら「先生、コンテストで当てたら何かもらえるの」といながら入ってくる。先ず、長さ、幅、単位価格、パルプ100%か再生故紙かをみる。蛍光漂白剤の有無

これらの経験が一つのステップとなり、あれやこれやと思い悩んだ結果、私は思いきって授業の中に商品テスト、買い物コンテストを取り入れることにした。生活科学研究所の松井氏、生活科学センタの藤井氏に私の考えを話し適切な助言をいただき、商品テストにはトイレットペーパーを取り上げることになった。消費者団体の研究グループが行うものと異なり、半ば習慣に流されている日常生活に驚きをもたせ、そこから消費者としての権利意識に目ざめさせる導入にしたいと願った。先ず、各家庭に向けてトイレットペーパーについてのアンケート調査を行い、購入時の関心度、使用後の事故などについてまとめた(資料4)。

触って調べて考える商品テスト

資料5 トイレットペーパーのテスト結果

										82.77						
商標名	メーカー名	価 格 (100%パルプ)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	成形性	原料	再生	着色	芳香	JIS 表示		実測値		吸水 (g)	溶解 (分)
											長さ	幅	長さ	幅		
ネピア	王子製紙	70.0	117	0	1枚	B	100%				60.0	114	61.0	11.5	15.23	B
55×4	ダイエー	24.5	0.4		17枚	A	再生	○			55.0	114	56.0	11.4	10.8	C
ローラー	ウツロギ製紙	64.0	1.58	0	2枚	A	表示紙	○			27.5	108	27.6	10.8	10.82	B
130 コマンロール	王子製紙	25.0	0.57		1枚	A	再生				130.0	114	129.6	10.0	11.20	A
システイ	山崎製紙	72.0	0.92	0	2枚	A	100%	○	○		80.0	114	84.0	11.5	10.79	A



性を調べる。頬にあてて感触を、鼻にこすりつけてにおいをかぐ等々…
…資料5は各班の発表結果のまとめの一部である。
生徒の感想の一部を紹介すると
「トイレットペーパーなんていつも安いかどうかで何も考えずに買うので、こんな風に調べてみておもしろかった。これからはトイレットペーパーを見る目が変わりそう」
「長さの表示が絶対ウソだと思っていたが、実際に測定してみてもそれ以上あり感激!」
「おもしろかった。商品のみかけも大事であるが、体に関係のあるものは見かけだけではダメ。蛍光漂白剤を使っているなんてオドロキ」。

あなたの商品選択基準は

42名のクラスの半分は商品テストに回り、あとの半分が買い物コンテストに回る。100分のうち60分で両方をすませ、各班ごとにまとめて、あとの時間を発表にあてる。

さてこの買い物コンテストに提示する商品に何を選ぶかはちょっと難しい。相棒の岡本先生と相談して生徒の身近な商品である「ノート」「シャープペンシル」「リップクリーム」「トイレットペーパー」ときめ、それぞれ四、五種類選び番号をつけて並べる。先ずイメージ商品として高校生に人気のあるリップクリームはタオールで目かくしして選ぶ。次に目をあけて選ぶの両方をやって、結果を各自に比較させる。四ヶ所を回り、回答用紙の番号をそれぞれ○で囲み、なぜ選んだか理由を書かせる。各班ごとの発表をまとめるとリップクリーム——目かくしして選んだ場合の選択基準はほとんどにおいてあり、目をあけた場合は、色（パール）、容器が中心になり、唇の荒れを守るのとはあまり関係なさそうである。

シャープペンシル——書きやすさ、丈夫さ、価格、デザインとなり、かなり選択基準は堅実である。一〇〇〇円のものを選んだ生徒が最も多い。

ノート——書きやすい紙の質、とじ方、野の間隔などと答えながら、人気のあるのは、やる気が出るということ、かわいい、うすいノートになっている。学習ノートとして適しているか、かなり疑問である。

トイレットペーパー——商品テストしたせいもあり、さすがに選択基準は明確でノーコアを選んだものが36%と最も多い。

最後のしめくくりで、各々の商品の解説とねらいをプリントにし

資料6 買 い も の コンテスト

商 品	提 示	商 品	ね ら い	解 説
化粧品 (リップクリーム)	清生堂スベシヤン 1000- クネボ-リップクリーム(パール) 500- クネボ-4ヤムリップ 450- 清生堂リップクリーム(パール) 500- 清生堂リップ 500-	化粧品 の品質 価格、安全性	化粧品の品質 価格、安全性	化粧品は人体に 対する作用の強弱 なもの……化粧品の 皮膚障害
文房具 (シャープペンシル)	三菱 0.5 100- ゼブラシャープペンシル 0.5 100- ゼブラグラフター 0.5 500- 三菱ペン 0.5 1000-	シャープペンシル の太さ 使用性 JIS規格	シャープペンシル の太さ 使用性 JIS規格	シャープペンシル の太さ 使用性 JIS規格
文房具 (ノート)	ジャストノートA30枚 100- ラズベリ B20枚 100- グラフタ B20枚 100- スワグ B20枚 100- アピコ A50枚 170-	ノート の太さ 使用性 JIS規格	ノート の太さ 使用性 JIS規格	ノート の太さ 使用性 JIS規格
日用品 (トイレットペーパー)	リステイト 吸収力 250- (太陽) 花模様 250- 1-77 (明治) 100- 55x4 (タニ) 50- 100x4 (大高) 100-	日用品 の品質 価格、安全性 使用性 JIS規格	日用品 の品質 価格、安全性 使用性 JIS規格	日用品 の品質 価格、安全性 使用性 JIS規格

て渡し説明する(資料6)。生徒はプリントを見てハハンという感じ、先に見せてくれればよかったという顔をしている。生徒にとっても初めてのこと、めずらしさも手伝って楽しい雰囲気の中ですすめられた二時間であったが、「商品を選ぶのに迷った」「いいものを選ぶのは難しい」「正確な情報ほしい」と感想をもらしている。私がこの授業をすすめるに当たって最も気を配ったのは、事前の準備(教師、生徒、予備調査)としめくくりであった。アンケート調査、テスト結果などすべて各クラスごとに生徒の手によってまと

めさせ、興味と関心が持続している間に考察をすすめた。結果としてここから発展した「物資の購入と消費」「消費者問題」の学習はスムーズに運ぶことができた。

消費者教育の目標

ここで扱った商品テストは商品知識を得るための方法にすぎない。しかし、このことで触発され消費者としての姿勢が育ってくれたらと思う。私はかつて『家庭科教育』誌78年11月号で、消費者教育とは①知る——知ろうとさせること ②ホンモノは何かを見究める力をつけること ③くらしを創っていくことである、と提案している。これは家庭教育全体の中で取り組むことであり、今もって大きな課題である。今井光映氏によれば「消費者教育とは、価値の選択・評価の教育である」といわれている。氾濫する情報と多様な価値

観の存在する中で生活者として生きることが容易ではない。消費者教育は各々の生徒の今後の「生きざま」につながるものである。今年は、ますます巧妙をきわめるコマースと商品及び消費者心理の関係を探るのに「ナブキン」を取り上げたいと考えている。

おわりに

生活実感を育てる学習には、まだまだほど遠い実践である。しかし、授業の中で話題が家庭の中の話題となり、輪が広がることはうれしい。系統的な学習の展開に対して、ある題材を投げて波紋を描きながらその核を中心にして授業を組み立てることは難しい。しかしながら不思議にはずんでくる。

(入江—神戸市立葺合高校、西本—兵庫県立西宮今津高校、町田—兵庫県立長田高校)



〈We 埼玉の会より〉

三月二十七日、狭山の柴田栄子さんのお宅で開かれた会に初めて出席しました。家庭のこと、Weのこと、性別役割分業意識の問題、授業の内容、校内暴力など、様々な問題について話し、共感し、討論し、時には大爆笑といった、とても楽しい会でした。四月から高

校家庭科教師として第一歩を踏み出す私にとってはとてもためになることばかりでした。

私は、高校で柴田先生に出会ったおかげでWeとめぐり会いました。高二の終わり、家庭科で女の自立や職業、結婚などについて、先生とクラスの皆が共に悩み、考え、とても有意義な時間を持ちました。そんな授業を通して、私も将来柴田先生のようになりたいと思っただけです。そして今に至っています。

柴田先生と出会って、Weに出会って、今日の会でステキな方々と出会って……、そんな出会いを大切にしていきたいと思います。も

っと多くの方々がWeと出会って、Weの輪が日本中に広がったと思います。(高橋るみ子)

Weの会カレンダー！

- 5・21 城北 北区十条出張所 問合せ先—川名 014・六〇五三(夜間)
- 5・28 湘南 藤沢市民会館 塚越 〇四六七・三十一・〇三七七
- 6・4 横浜南 皆川 〇四五・七九・〇五八六
- 6・18 横浜北 植垣 〇四四・六三・八八五三
- ☆We山形の会がいよいよ五月下旬に発足！
- 問合せ先—佐藤慶子(昼間)〇二三六・三十一・四二一(内)二三七〇(夜間)43・七六七六

新しい家庭科を創るために

＊ 大学では ＊

福原 美江

教材づくりに向けて

教科教育のカリキュラムは、最近になってようやく整うようになった。本学の家庭科教育にかんする科目は、必修の「家庭教材」(小学校教員養成課程・三年次・通年・演習二単位)、および「家庭科教育法」(中学校教員養成課程・三年次・通年・四単位)に加えて、一九八〇年度より「家庭科教育特殊講義」(後期・二単位)が、また、八三年度より「家庭科教育演習」(通年・二単位)などが開講されることになった。

あとの二つは選択科目である。ここ二年間は「家庭科教育特殊講義」のみを開講したが、学生にとっては過密なカリキュラムのため、家庭科専攻生のみが、三年次で受講している。この科目が開講される前は、家庭科専攻生でさえ、「家庭教材」と「家庭科教育法」のいずれかを履習するだけで、卒論を書くという状況であった。しかし、選択科目を開講したことによって、学生の家庭科教育に対する問題意識が豊かになり、研究的な姿勢で自主的に学習する意欲が芽生えてきたようにおもふ。

本稿では、「家庭教材」と「特講」でとりくんだ二・三の試みについて述べることにしたい。

■ ■ ■
「家庭教材」の受講生は、およそ二百名いるが、それを二クラスに編成し、反復授業にしている。学生は、この「家庭教材」を受講するまでに、二年次で「美術」「音楽」「体育」の三教科の教材研究を終えている。これらの教科は、実習や実技を伴うため、数人の担当教官でクラス編成をしている。そのため「家庭教材」でも、これらの教科と同様に、実習(たとえば、調理や被服など)授業を期待し、また要望する学生もいる。男子学生は、小学校で家庭科を学習しただけだから、実習教材を多く含む家庭科の授業については不安をもつようである。新しい教材をつくりだす力を養うためにも、教材開発にとっても、発展性のある教材で実習することはだいじであるが、百名を収容する実験室や実習室がないため、部分的な実習を除いては実施していない。そのため、実験や実習教材に必要な材料や道具などはなるべく教室に運ぶ。また、授業記録や実践記録(プリント、スライド、VTRなど)を多く紹介することによって、実習教材の教材構成と方法を解説するようにしている。

通年の「家庭教材」では、おもに家庭科の基礎理論、教育実践論、および理論と実践を統一的に把握できるように、教材づくりの実際と授業研究方法論について、およそつぎのような構想ですすめ

ている。

一、家庭科教育の問題状況

(四月)

二、家庭科の教育課程史

(五月)

1、現行家庭科の教育課程

2、戦後改革と家庭科

3、家庭生活指導と家庭科

4、六〇年代以降の家庭科

三、家庭科の教育実践

(六月～九月)

1、教科書の教材構成と問題点

2、教育実践(各領域一～二編)の検討と分析

3、教育実践の特徴

四、家庭科の教育理論

(十月)

1、教科論

2、教育内容論

3、教授・学習過程論(教育方法論)

五、家庭科の教材づくりと授業研究方法論

(十一月～二月)

1、グループ別による教材づくり

2、授業案の立案

3、教材づくりの意図と授業案の報告

4、授業研究の方法

(注・三章と四章は、同時進行になるばあいも多い)

「家庭教材」の開講にあたって、まず、いまの家庭科教育をとりまく問題を明らかにし、家庭科への関心と問題意識を深め、教材研究の意図を自覚させることをねらいとしている。そのばあい、要約的

に解説するのではなく、学生じしんが教育問題にどのようににかかわっているかが自己判断できるように、時事的な問題を含めてミニレポートを書かせることにしている。

たとえば、小・中・高校の新学習指導要領が告示された時点であれば、「改訂の特徴や基本方針と家庭科の性格について」、国連婦人の十年に因んでは、『国内行動計画』(七七年一月)やその『重点目標』(同年十月)などにみられる教育のとりあげ方、また「教育基本法第五条の内容について」、「家事・育児天職論について」など、年度によって異なるテーマを課している。例年、新聞紙上で話題になり、解説されているテーマを選んでいるが、学生の問題意識は希薄であり、落胆させられる。それでもなお継続している理由は、学生じしんが、今日的な教育問題に無関心であり、鈍感である和自己判断すること、わたくしが、わたくしの講義内容と問題関心を反省するうえでも有効な材料になるからである。

「家庭科の教育実践」では、まず現行の教科書を検討している。ここでも、直接、教科書にあたってミニレポートを書かせているが、「自分が使った教科書と変化していない」、「チマチマしたママゴトの域を出ない」、「すぐ役立つ教材で、家庭科は実用性を重視した教科である」など、表面的な感想で終わっていることが多い。そこで、文部省の指導書と教科書の教材構成のねらい、および指導方法の特色について、領域ごとにも単元に即して分析していく。このように教科書教材の分析を位置づけている理由は、あとで紹介する新しい試みの教育実践と比較対照させて、教科書教材のどこがどのように問題なのか、自主的に試みられた教育実践は、どこにどのような特色があるかについて、学生じしんの力で分析し、読みとる

力を習得させたいからである（村田泰彦編『教科教育法・小学校・家庭』の「家庭科教育における指導の実際」を参照。日本標準）。

たとえば、「米」の教材については、二つの教科書会社が発行している教師用指導書の学習指導案のほか、「米を使って」（中学校一年・小松幸子）、「ごはんづくり」（小学校六年・細川ミサヲ）などのプリントを配布し、教科論や教材観のちがいが、展開過程のどこに反映されているか、どのような教材研究の過程で授業の構想ができていくか、また実践がつくりだされたのかなどを考えさせていく。それぞれの実践の特色を把握させたいので、学生には、「米」を素材として授業をつくるばあい、どんな教材観で学習項目や展開過程を組織するかについてレポートさせている。授業者の立場から学生に展開過程の骨組みを立案させると、創造力や構想力の貧困はあるにしても、オリジナルでさまざまな角度から学習項目や展開過程を作成するようになる。数名にその骨子を板書させ、自分じんの教材観と作成の視点を口頭で報告させ、共同討議していく。

教育実習の前は、机上プランになるが、「米」というひとつの素材から、多様な授業を構想できるということを実感させ、同時に、その実感を自分じんの言葉で展開過程において論理的に組み立てる力になるようである。基本実習（附属学校で四次に四週間）の段階で、教材研究と授業案を立案するばあい、唯一の参考書は、教科書会社発行の教師用指導書であるという現実があるが、それらにみられる固定化され、定型化された「米」の教材「価値」観をあらためて問いなおす力になるように配慮したつもりである。

このような内容と方法による教育実践の検討は、「米」のほか、「野菜」、「糸・布」、「うでカバー」、エプソンの「型紙」などでも試

みたが、食物および被服とも、一／＼の教材にとどめている。

一九八二年度の「家庭教材」では、教材研究の一過程として学生に実習をさせてみた。「結ぶ」、「編む」、「織る」、「縫う」の初歩的・基礎的な実習である。実習を組み入れた意図は、綿→↓（撚る）→糸→↓（結ぶ・編む・織る）→編みもの・織りものの基本原理→（縫う）被服、という被服教材の全体構造を認識させることと、それぞれの段階（部分）で教材化しうることを学ばせたいからであった。「結ぶ」は、『データ・家庭科』（一橋出版）を参考資料として、いろいろな結び方や基本的な結び方（巻き結び、連続結び、七宝結び）などを実習させた。しかし、このような「結び」は、学生にとっては、初めてのいわば原体験であった。学生は、多様な結び方には熱中するが、被服の全体構造を見通したうえで、教材化する段階まで到達することができなかった。別の機会に、ぜひ教材づくりに発展させたいと考えている。

また、「編む」と「織る」については、「初歩的な編む教材をとりいれて」と「織り物教材をとりいれて」（小学校六年・山本紀久子）の実験記録の検討と同時に進行で課したものである。既存の授業過程を体験することによって、教材価値の確定と、教材研究のポイントを体得させることを目標においた。しかし、かぎ針編みを体験している学生を除いては、指だけで「くさり編み」をつくることさえできなかった。両手のみを使ってメリヤス編みをつくることは、棒針編みの経験者でさえもできないことがわかり、技能水準の低下を再確認する結果になった。そのため、ここでは、「結ぶ」「編む」「織る」の基本原理の認識にとどめるをえなかった。

「家庭教材」におけるもうひとつの試みは、夏休みの課題として、次のようなテーマによる研究と読書をすすめたことである。

(一) ひとつの食品を選んで、その食品が、わが国または世界の国々でいつごろから、どのように食べられてきたか、また、現在はどのように加工・調理されているかなどについて調べる。

(二) 被服、食物、住居・環境・保育の三分野から各一冊の本を選び、選んだ動機・理由、著者の論点、感想などをレポートする。

前者の食品にかんするレポートでは、「ひとつの食品」を選ぶ基準は任意であるが、「教材にしてみたい」という積極的な課題意識をもって選ぶように指示した。しかし、「教材になりそうだ」、「教材になるだろうか」など、教材化への見通しは不安ではあるが、知的好奇心から調べてみたいという食品もよいことにした。さらに食品研究の視点として、(1) 生産・流通・消費（食品の原産地、伝播ルート、主要生産国、生産量、消費量、流通機構など）、(2) 食品の加工法や調理法（歴史的・地理的）、(3) 各地域における伝統的な加工・調理と食事様式（郷土料理や民族料理として残されている加工法や調理法、食物禁忌など）、(4) その食品に含まれる食生活上の課題（添加物や生態系とのかかわり、栄養や健康とのかかわり）などのヒントも与えた。

食品の教材価値を確定するためには、専門的な知識や学識が不可欠であり、選んだ食品にかんする基本文献の所在をたしかめ、それらを読むことによって正確な知識を獲得しなければならぬ。教材研究は、自分じんの生活経験に依拠するだけでは不十分であるし、教師用指導書の模倣と安易な再解釈だけでは成立しないというきびしさを体得させたいとねがっている。

後者の読書のすすめも、同様な趣旨で課した。教材研究の基礎教養として、だが、どのような本を書いているか、また、ある教材をつくる時、どのような文献をさがしたらよいかなども視野におさめてほしいと考えているからである。「何を読んだらよいかわからない」という学生が増えている。そのため、リスト・アップした文献は、入手しやすく、しかも新しい教材をつくりだすうえで参考になるとおもわれる本について、おもに新書本と文庫本のなかから、約四十冊を紹介した（一橋出版『家庭科ハンドブック』の「読書ガイド」を参照）。「読んでみたいと思って、果たせないでいた本が紹介されたので」、「書名や帯の紹介文にひかれて」、「読んだ人にすめられて」、「もくじにひかれて」など、動機は多様であった。内容的には、衣・食・住の生活における問題の所在や、生活文化への関心、生命や生活をつくる主体としての自覚を啓発させられたという学生も、少なからずあった。「宮崎の猛暑のさなかに、三編の読書レポートを課することは過酷だ」という不満もあったが、教材の教育的価値や新しい教材の開発を、自分じんの力で実現できることをねがって、今後も継続したいと考えている。

■ ■ ■
いうまでもないことであるが、授業の成否は、教材研究に依存している。しかも、教材研究の成果は、授業案に適切に反映されていなければならない。ここでは、「特講」における試みを紹介したい。受講生は、三名の家庭科専攻生である。まず、『授業の原理』（柴田義松・国土社）を輪読したあと、野菜を素材にして、教材研究――授業過程の組織化――授業案の立案――教具・資料の作成――実際の授業――授業過程の分析・考案、までを見通したうえで、教

具資料の作成までを課題とした。

この特講で、つねづね野菜を素材として教材化したいと考えていた動機は、次の三つにあった。

第一は、検定教科書の食物教材で用いられている食品が、あまりきつたりで、変わりばえない野菜が多いという点にあった。二社の教科書とも、トマト・レタス・キャベツ・きゅうり・ピーマン・にんじん・じゃがいも・玉ねぎ・ほうれんそうなど、おきまりの野菜である。これらの野菜は、全国的にいつでも入手できて、日本の生活の実態からみると一般的な野菜であらう。しかし、学校教育では、家庭生活や子どもの生活実態からは体験できない野菜を用いて、その加工法や調理法を原体験としてもたせることは、生命と生活をつくりだす家庭科に期待したいと考えているからである。

第二は、野菜のどの部分をどのようにして食べているか、をおさえたいことである。食品の分類方法として、栄養素の生理的作用にもとづいた三つの食品群、栄養素を基準にした六つの食品群などが一般的であるが、このような分類は、野菜の可食部分のみを対象にした分け方であり、植物としての野菜ではない。したがって、植物の全体をとらえたうえで、植物のどの部分を食用にしているかについてはいわからない。加工食品が氾濫する食生活であるからこそ、スーパーマーケットで小ぎれいに並べられ、パックされている野菜ではなく、根や泥がついた植物としての野菜の原型がわかるような学習を組織したいという点である。

第三は、宮崎県という特定の地域で意味をもつ野菜を選ぶという点である。

このようなわたくしじしんの教材化の動機を説明して、学生と

もに、ひとつの野菜を限定することにした。

素材とした野菜は大根である。大根は、ほぼ全国各地で生産され、その調理法も多様である。しかし、宮崎県内で生産される野菜のうち、もっとも生産量が多く、しかも、加工食品としての切干大根は宮崎県の特産物である。霧島山系の山すそに位置する都城市近郊から宮崎市南部にいたる地域では、十二月から二月にかけて、乾燥した冷気の霧島おろしを利用して、切干大根が生産される。純白の障子を十メートルもつないだように、斜めにたてかけた切干大根の乾燥風景は、宮崎市南部の風物詩でもある。

また、切干大根は、保存食品でもあり、その加工方法は単純で、大根を千切りにして、自然乾燥させただけである。加工方法としては、放水原理を利用した食品で、小学生にも容易にできる点もある。いっぽう、野菜のなかでも、きゅうり、なす、にんじん、ピーマン、玉ねぎ、などの野菜は、なぜ切干大根のように保存食品として加工できないのだろうかという疑問もあったからである。

つぎに、切干大根の教材化について紹介してみよう。

まず、大根についての教材研究のプロセスであるが、大根にかんする文献の所在をたしかめ、収集し、前述の「食品研究の視点」から整理した。つづいて、ひとつの単元としての骨組みを構想し、およそつぎのように立案した。

- ① 食事調べをして、食べた野菜を整理する
- ② 野菜の名前と実物を確かめる
- ③ これらの野菜を、食べている部分によって、根・茎・葉・花・実に分ける

①宮崎県の農産物、とくに野菜を調べる

②主要な野菜の生産地域を、宮崎県の地図でたしかめる

③生産量を調べ、大根に注目する

④切干大根の加工方法と加工原理を予想する

①切干大根の加工過程を調べ、加工の原理を明らかにする

②大根を千切りにする。他の野菜も千切りにして比較する

③野菜を乾燥し、もとの重さと乾燥後の重さを調べる

受講生のひとりが農家で、切干大根を生産していることがわかり、教材研究は、加速的にすすめられた。大根を畑から抜くところから、乾燥までの全過程を写真におさめ、スライドを作成した。学生は、文献収集のため宮崎県庁や市庁の関係部局を訪問した。また、宮崎県立博物館を訪ねて、千切りの道具の変化を調べ、学芸員からも説明をうけた。

このような作業とともに、「目標と展開過程」を作成し、報告させた。この時点では、内容的な問題として、およそつぎの点を指摘しておいた。

①食事調べによって「名前のでなかった野菜の実物を示し、その名前を知らせる」というが、「知らない野菜」や「分類のわからない野菜」として予想されるものは何か→食事調べや野菜の分類についての調査項目を作成し、予備調査をして明らかにする

②子どもに提示する宮崎県産の生産量をグラフで示す→OHPシート、またはプリントを作成する

③乾燥理由を整理する→水分の蒸発だけか。栄養的变化はないか。長所はなにか

④一本の大根を切干しにすると、重さはどのように変化するかを明らかにする(参考までに、一本四キログラムの大根は、約二百グラムの切干大根になる)

⑤千切りにした大根とその他の野菜の乾燥状態(水分の蒸発量)を調べる(いずれの野菜も、四日間で七〇〜八〇%を蒸発)。

⑥切干大根の生産地域は、宮崎県の南部に限定されるが、その理由はなにか。→気候や地形について調べる

⑦時間配分を考える

このような問題点を明らかにさせた後、形式をととのえた第一次授業案(略案)を作成させた。目標を的確に表現し、教材観を具体的に文章化することは、大変むずかしい仕事である。とくに「子ども観」は一般的に書くことになるが、可能な限り事前調査をして具体的に明らかにさせたい。この第一次授業案を再検討し、問題点を指摘したところで、後期は終了した。

第二次授業案(細案)の作成は、四年次の教育実習を終えた後に予定し、発問の内容、予想される子どもたちの活動と反応、板書事項、教具・資料など、実際の授業ができるところまで報告させたい。さらに、実際の授業は、四年次(八三年)の秋に、附属小学校で実施し、授業過程の分析考察まで計画している。教育実習で得た「教える側」からの体験が、授業案にどのように反映するかを期待している。

紙数の都合で、第一次授業案や小・中学生を対象にした野菜の種類の予備調査結果などは割愛せざるを得ないので、別の機会に、教材研究と授業研究の全過程を報告することにした。(宮崎大学)

We 一周年記念公開ゼミナールに参加して

塚越 敏雄

集会の途中、どなたかが「学校をよみがえらせよう」と言うが、それは現在の学校制度を前提としているのか否か」というような質問をしていたのが、私には心にかかりました。このタイトルには、いくつかのことが前提になっていると思います。

①現在の学校は死んでいる ②以前学校が生きていることがあった ③現在の死んでいる学校を、以前のように生きている学校にもどそう

では、いついかなる時代に、「学校」という制度や場が生きていた時があったのでしょうか。また、生きていたというその中身は何だったのでしょうか。そしてまた、死んだものをどうしてよみがえらせる必要があるのでしょうか。死んだものを死んだままではいけないと考えるのは、なぜなのでしょう。

こうした原則的追求は、それはそれで大切なことだと思います。しかし、原則論が論の

次元で空転することもよくあるものです。では、何をするのか」という実践を伴う必要があるのだと思います。(中略)

私と人や物との間に発見があったり、共感があったり、充実感があったり……という関係を、学校の外でも内でも創っていきましよう。そして、自分に合ったやり方で、自分のできることをどんどんやっていきましよう。

そんなふうにすることが時には制度の壁にぶつかるかもしれないけれど、制度を変えることによって私たちの関係が生きてきたものになるなら、変えるようにしていきましよう。たとえ困難なことであっても——こう、私は考えました。

藤田 靖子

公開ゼミの参加者アンケートで、「なれあいを感した」というご意見があったようです。が、それに近いものを持ったのです。この一年の集大成であり、多くの方々には仲間としてはだかのつきあいをしていっちゃった方々

だったでしょう。でも「公開」と名のつく限り、やはり初めて参加した人を考慮した会の運びをしなければならぬと思うのです。

たとえば、半田さんはもう当然誰もご存じの方としてご紹介のないままでした。お話をうかがったり、チラシを見れば、Weを読んでもいなくてもある程度わかるにしても、やはり司会者の一言は必要で、ご紹介なしなら、むしろ「今更必要ないでしょう」とのご発言はうかがいたくなかったと思います。朝日新聞での紹介記事を拝見して、やはり記者は上手にまとめている。あの席上で触れなかったことをも含めて、会の性格やパネラーの言いたいこと、実行していることをわからせてくれた、と思いました。限られた時間で、大きな問題を討議することはとても困難だし、問題提起ができれば成功と言えろとは思いますが、でも、あいにく出席不可能だった懇親会できっと皆様「今日の会は大成功」とおっしゃっているだろうけれど、果たしてそうだったろうかと、申しわけないけれど思いつつ帰宅したのでした。

ところで「現状のままで、本当に学校をよみがえらせるか」という問いに対して、今の受験体制、管理体制がくずされない限り不

可能ではないか、という悲痛な叫びをあげた
いと何度か思いました。(中略)

第二点として、家庭教育の目的が、半田さんのご主張のようであればこそ「シングルもふえていく現在、家庭科が対象とする家族とは何か」という疑問は起こらないような気がしたのです。人間として生きるために、たとえ一人であろうと、営む家庭は存在するはずだし、人それぞれの家族構成の中で、個を確立し、社会に生きる手だてとしての家庭を対象として把握できるはずだと思ったのです。家庭科が日常技術の受け売りで終わっているのでは問題になりませんが、手段を目的ととり違えないためにも、このあたりは本当に真剣に考えたいところです。男女共修ができるかどうか、この取り上げ方に大きくかわることでしょう。(後略)

長谷川 孝

①離婚などのク、ライ、問題、を、どう、教、える、か、
という問題が出されていましたが、問題そのものの社会的イメージがクライかどうかは非本質的なことで、その背景にある矛盾や葛藤を引き出し、自覚し、考え、判断し、批判し、
あうようになることが大事だと思うのです。
問題がクライかどうかではなく、そこに矛盾

や葛藤が反映しているかどうか、ということ
です。

②子供に「学習」したいものがあるのかどうか、または子供は「学習」したいと思っているかどうか、ということが、半田さんの学校教育は子供が知りたいことを教えていないという問題提起にふれて出されていました。「学習」といういい方をすれば、子供に「学習」したいものや「学習」したい気持があるかどうか。ないかもしれないですね、ということになります。でも「知りたい」ことを「まなびたい」という問いと気持は、必ずあると思います。そして「知りたいこと」「まなびたいこと」を自覚し吟味する(自分の生存・存在の根っこにかかわったホソネの問いをつかみとる)ことや、そのなかの矛盾を明らかにし、本質をつかむことに、教育は力を貸して
知りたいことをまなぶ力を育ててやらねばならないのだと、思います。

「知りたいことをまなびたい」というのは人間として生きていることの証ともいうべき子供の本質的な必要(つまりステアシティⅡ欠除性からの欲求)ではないでしょうか。

もう一周年！ 思い一杯でWeゼミに参加し
若竹 キミイ

ました。それぞれの世界でいきいきと果敢にWeを生きておられる方々に出会えて、この世界大事にしなければ……の実感ありました。

実は私、ナレあいみたいで、と感想書いた人。そうして本気で参加する気失せて、帰ってきてしまった人。簡単には解ききれない根っこにつながる問題と承知しながらも、やはり残って、ちゃんとそのこと発言してこなかった負い目思い続いています。探れば渋谷、谷ネラーの屈折に通じるもの、多分そう。

私、幼児の問題と婦人問題の周辺で、地域の社会教育に首まで身をつけている日常にWeへの思い願いをつなげようとしている者ですがゼミの席、余りにも地域との接点切れていたことへ気持がひるんでしまったんですね。少し遠回りながら、地域をとりこみ、とけ込む家庭科の学びから、子供たちの問題、とりわけ男女平等を生活の根から問う育て合いの方向を見ている点では、人一倍のつもりなんです。

具体的な提案ひとつ。担任じゃない家庭科の先生多いと思うんですが、できるだけクラス懇に出て、生活の話題にかかわっていただきたい。記事にも欲しい。

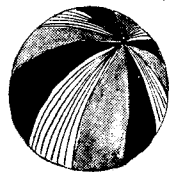


視 点

〈しかる〉と

〈おこる〉

長谷川 孝



〈しかる〉ことはやめにして〈おこる〉ことにしている、と前回書いた。「上手な子どもの叱り方」などという本が売れ、子どもをしかるのは親の責任だと思っている人も多いのだから、そしておこるというのは感情的な行為だから、私の文を読んで、なぜかしら？と不可解に感じた人も多いかもしれない。

〈しからない〉のには、それほど大きな理由があるわけではない。

〈しかる〉行為は、しかる側が正當さや常識や道徳律という基準を独占し、一方的に上から裁くという感じがするし、「まるで学校教師の下す評定みたいだ」という気もしてしまうのだ。親は、神の裁きを子どもにたいして告知する司祭の役割など、断じて果たしてはならないのだ。といえ、少しばかり格好がつかうか。

〈おこる〉のは、おこる側の感情、気持のあり方によるところが多い。その分だけ、おこられた側も多少は抗弁しやすいのではないかと、思ってみたりもしている。

〈しかる〉という行為は、〈しつけ〉という行為につながる。斎藤次郎さんは、着物のしつけ糸にたとえ、「子どもが一步一步一人前に成長していくにつれて、抜かれていくべきもの」と述べているが、『子育て原論』(教育出版)、一方的な基準でしかられてしつけられたら、しつけ糸のように抜けなくなるのではなからうか。やはり

〈しつけ〉は、しつけ糸のように抜きうるものであったほうがいいし、子どもが自分で抜けるようにすべきだ、と思う。

というわけで、私はときおりおこりだす以外、いわば放任主義で「甘い」父親ということになる。母親から見れば、威厳がなく頼りがいのないことこのうえない、にちがいない。

本人のプライバシーと名誉にかかわることなので、具体的にはいえないが、五年生になった息子のある「問題行動」には、頭を多少いためてきた。他人に迷惑をかけないとはいえ、一般的には、きびしくしかり、たたき直すべき行為である。

彼は、「問題行為」をしてバレても、断固として隠しとおそうとする。証拠をつきつけられても、簡単には認めない。シラの切りぶりをみて、ふと私は「なかなかのものだ」と思ってしまう。バレたあとも、「問題行動」はいっそう工夫をこらして、また続行される。その創意工夫ぶりに、「やりおるわい」と、つい感心してしまうこともある。だいたい私は、ふがいなくて、しかるなんていう立場じゃないのかもしれない。

あるとき、行きがかりで「そんなら、警察に行こうか」と、つい言ってしまった。あのときの私の全身に走った不快感といったなかった。血の気がひいて、黙りこんでしまった。しばらく考えこん

だと、息子と二人だけで向かい合っていた。「うまく黙りとお
せても、おまえの顔や首やからだの中に「うたがい」がベタベタと
ついているゾ。でもな、おまえがやっていないというなら、たとえ
やっていたとしても、お父さんはやっていない、と思うことにす
る。それが、おれのいう「信用する」ということだ」

そして私は、「お父さんに、おまえを信用させてください。お願
いします」といって、ペコッと頭を下げた。息子は、目に涙をあふ
れさせて「ごめんなさい」といった。それでも何日かするとワルサ
を再開し、私はだまされるのである。いまは、当分の間、だまされ
続け、信用しつづける（信用するという態度を崩さず、できるだけ
形に表す）ことにしている。

あるとき、湯舟につかりながら、「おまえが、あれをなぜやめら
れないのか、理由がわからんのだ。教えてほしいよな」と、息子に
いった。彼は、「何回かやろうと思ったけど、がまんしたんだ」と
いう。「そうか、がまんできた回数かふえたか。それはよかった」。
私は答えた。だがしばらくして、また再発する。

子どもをぶたないことにしている私だが、この原稿を書いている
途中に、息子に往復ビンタをくらわしてしまった。翌日は一日中、
そのことが心に重かった。帰宅して、私は息子にいった。ぶった理
由である。

「おまえのやったことは悪い。だけど、悪いことをしたからぶった
んじゃない。ひとつは、お父さんの信用を裏切ったから、もうひと
つは、おこるのを終わりにするためだ。そうしないと、あと何時間
もおこりつづければならなくて、おまえは寝られなかったぞ」。
いいわけじみているが、それほどためでもない。私には、

「しつけ効果」（つまり教育効果というのだ）をねらって「体罰」を
やったつもりは、まったくなかった。泣きながらすぐ寝つき、翌朝
は元気に学校へ行ったので、多少は救われた気分ではあったが、む
しろ「反効果」が不安だった。

ところで、ウソをいいはり、シラを切りとおし、ワルサに創意工
夫する息子におかしな「感心」をしながら、私には真剣に思ってい
ることがある。彼に伝えたい、私の思いだ。「ウソはだいいだ。人
間には、なにかとてもだいいなものを守るために命がけでウソをつ
かねばならないようなこと、ウソをつくことに苦しみながらウソを
つきつづければならないようなこと、があるものだ。冗談なら
ともかく、安っぽいウソはつくなよ」。

「ウソは他人を守るためにつけ。自分を守るためのウソは、ウソの
ウソだ。仲間を売るようなことは、したくないな」。

「戦争と人権抑圧のニオイが強まってきているこの時代だ。お父さ
んも、刑務所にぶちこまれることが起こらないとはいえないかもしれ
ない。刑務所にぶちこまれるなら、自分で自分に誇れるようなこ
とをしてぶちこまれたいものだ」……。

私が、つい「感心」してしまう息子の「能力」を、不条理とたた
かう知恵のちからに育てられればいい、とねがう。それで「問題
児」扱いされたり、処分を受けても、私はかまわないと考えている。
学校に出した「児童家庭環境調査」の「担任への希望」らんに書
いた。「考える力、判断力を育ててほしい。不条理をつかみ、それ
を論理化して言動に表せる力を育ててほしい」。

——でも、子どもとの格闘はつづく。子育てとは、自分育てであ
ると、つくづく思う。

（教育評論家）



霞 通 信

武田 秀夫

すすきの穂の打擲^{ちようちやく}

小学生を教えた経験のない私は国語教室をはじめるにあたってどんな作品をとりあげたものかと迷いましたが、安房直子の「きつねの窓」に出会ったときはじめて「よし、これでいこう」と気持がきまりました。

鉄砲をかついで歩きなれた山道をぼんやり自分の山小屋にもどろうとしていた男が、山道をひとつまがつたとき、青い桔梗の花畑に迷いこみ、その不思議な野原の中の染め物屋で、白い子狐によって自分の指を青く染められる話です。子狐の白い両手の親指と人差し指が桔梗の花のしるで青く染まっているというだけでもなんと妖しいのに、その子狐の青く染まった四本の指がつくる菱形の窓の中に、白い母ぎつねが（そのきつねは実は鉄砲で殺されたのですが）、しっぽをゆらりと立ててじっとすわっている姿が見えるというのですから、そのイメージの美しさはたとえようありません。

この「きつねの窓」につづいて「夕日の国」をとりあげました。これも橙色の液を一滴たらした縄で縄跳びをする少年と少女の不思議な話です。「ひとつ、

ふたつ、みつ」と数えながら跳んでいる少女の縄に誘われてとびこんだ少年が、跳びながら恐る恐る目をあけてみると、オレンジ色の砂漠にいま夕日が沈みかけており、ひなげし色の空の下、血のように赤い地平線のむこうに、重い荷物を背負ったひとこぶラクダの小さな影が見えます。少年はそのラクダがかわいそうでかわいそうでたまらなくなり、とんでいってその重い荷物をおろしてやりたくなりますが、「百よ、もうおしまいよ」という少女の声が無情に耳もとで響き、少年は狭い横丁の露地にひきもどされてしまう、そんな話です。

教師をやめたあと、私は、これからどうやって生きていこうかと思いついたあげく、とにかく国語の塾をやろうということだけは決心がついて、それではその教室をどのようなものとして創っていくかと考えていました。そうしたときに私は、安房直子の作品に出会いました。私は「きつねの窓」を自分の部屋で三、四名の子どもたちと読んでいる姿を思い描いてみました。すると、それは私の求めているもの——それを私はうまく言葉で表現できませんでしたが——それにたいへん近いように思われて、とにかく私は「きつねの窓」を五年生の女の子たちと読むことから「国語教室」を出発させたのでした。

子どもたちはもちろんそんな私の思惑などとはかわりなく、紅茶なども出るちょっと風変わりな小さな塾とでも思っていたのでしよう、案外楽しそうに通ってきて、無邪気に「きつねの窓」や「夕日の国」、やがては佐藤さとるの「だれも知らない小さな国」を読んでいます。それだけの作品としてあっさり読んだ子がほとんど

どでしたが、中には、安房直子の童話集「風と木の歌」をお母さんに買ってもらうんだとはりきっている子もいましたし、「だれも知らない小さな国」を第一作とする「コロポックル物語」をすべて読み通してしまった子もいました。友達から「よく読むね」と半ば呆れ顔で言われたその子は、それまでそれほど本を読んでいなかったらしいのですが、「だって、おもしろいんだもの」とだけ答えていました。「だっておもしろいんだもの、しかたないよ」といったニュアンスでその言葉は発せられているかのようにでした。

つい先日、五年のKさんが「安房直子の『しろいあしあと』って知ってる？」と突然問いかけてきました。

「小さな野ねずみがお白粉を買いにくるんだけどね、それを落としてしまうの。お白粉が地面にちらばるでしょう。とぼとぼと帰ってゆく野ねずみの白いあしあとが道について、次の日、葉屋の女の子がそれをたどっていくと、野原の中のねずみの家にたどりついてね……」と一所懸命に説明してくれました。私がおもしろそうだからこんどその本をみせてよと頼むと、次の週、部屋に入るなり「持ってきたよ」とその絵本を私に見せてくれました。私はそれを読んでその場ですぐに書店に電話をかけ、四冊ほど注文しました。

そんなふうにして私が「国語教室」のはじめに自分の心に適う作品を選んでいった結果が、いつのまにか、世にいわれる「リアルな」「社会性のある」児童文学作品ではなくこうしたファンタジックな作品を多くとりあげることになっていたのはどういふことなのだろうかと思えます。教師をやりながら「運動」にもかかわってきたこの自分が、こうして引き籠って、こうした現実離れた作品を

子どもたちと読んでいる姿を「退嬰的」と見るであろう他人の目を、私はいつも意識しないわけにはいきません。しかしそれを気にするあまり、「学校の外から公教育を撃つ」などという誇大な言辭を弄して自己を合理化することのないようにと自らを常に戒めています。私には私自身がいつも、そしていまも、うまく説明ができないでいるのです。

ただ私には、月明かりの夜道で、シヨールにくるまった自分の影に思わずうっとりとして見とれている婚礼前夜の野ねずみの娘、また、その娘がせっかく手に入れた大事なお白粉を思わず黒い土の上に落としてしまったときのはっと身を切るような辛さ、とりかえしのつかないことをしてしまったという辛い後悔、それらが大変リアルなものとして感受されるということだけがたしかなことなのです。

安房直子は、ようやくあきらめて立ち去る野ねずみの足あとを「しろいかなしいあしあと」と書いていますが、その「かなしいあしあと」という表現がまことに真実なものとして私の胸を打ちます。次の日その足あとをたどっていった葉屋の娘は、野ねずみの母親が手にしたすすきの穂で足をたたかれることによって小さくなりねずみの家に入ることができのですが、そのとき、その娘の足をほとほとたたいたすすきの穂の感触は生々しく私の足にあり、私は、それを感じつつづけているうちに徐々に心が痺れていって野ねずみの家にも入るようにわが身が小さくなっていったらと思っているのです。そしてこのリアルな私の感触を子どもたちにもっと差し出しリリーすることができたらと、それだけを願っているのです。

学習の 主人公たち



〈子どもの詩〉

〈生徒が作った保育だより〉

〈子どもの詩〉

じんち取り

(横浜市公田小学校四年)

橋本康一

女たちが、じんちをうばいにやってきた。

「ここはぼくたちが先に取ったんだぞ」。

「わたしたちが先に取ってたのよ」。

女たちがいろいろ文くを言ってきた。

ぼくたちがかわまないであそんでいても

うるさくてたまらない。

「公平に分けよう」と言って分けた。

後から文くをゆってきた。

「一回いいと言ったのに、いまから文くをい

にきたなんかわるいぞ」というと、

ちがう文くをいってきた。

文くがごっちゃまぜになり、

なにがなんだか分からなくなった。

そのうちにチャイムがなってしまった。

〈生徒が作った保育だより〉

静岡県立松崎高等学校一年生

「なんか、家庭科で妙なことをやっ

てるぜ」男の子たちは思っています。

した。「なんで、家庭科、女子だ

けやるの」。女の子たちは不満で

した。「これは男の子も女の子も

一緒に勉強しなければいけないん

だ」。私は考えていました。

そのことが「保育」で学んだこ

とを、男子にも理解してもらおう

との私の提案と、保育だより発刊

の素地となりました。週一回、各

班が輪番で出したのですが、生徒

たちは父性教育の必要性を確信し

たようです。

「子供ができたって? じゃあ、したってこ
とじゃん」。

生命を育む容易ならざる営みを、同性とし
て共感的に理解していると思っていたのに、
生徒の思いがけない発言に驚きました。生命
の尊厳を教える前に、生徒たちの周りには、
好奇的な性の情報が氾濫し、産む性と商品化
される性が、一見矛盾しないように存在して
います。しかし、その矛盾は多くの場合、陰
の部分にしわ寄せされていますし、性の商品
化は産む性を冒瀆し、女性と生まれてくる生
命を軽視しているように思えます。

産む性と商品化される性が同じ性であるとい
う事実から目をそむけない授業をしよう。
同時に、その学習で女子のみでなく、身近の
男子生徒の認識をも問いたい、そう考えてい
た私は、「性の商品化—ポルノ映画etc」
との板書を、たまたま体育の授業が早く終わ
って、廊下で待っている男子生徒の視線がと
らえているのに気づきました。気恥ずかしさ
半分で聞き耳をたてているらしいのを感じ、
このチャンスを利用してはならぬ、と一つの提
案をしました。家庭科の授業で学んだことを、
自分たちの言葉で男子に伝えよう! かくし
て「保育だより」発行! (松下恭子)

三学期において家庭科で保育を勉強します。

これによって男子に女子の勉強および保育の知識を理解してもらうために、この「保育だより」を週一回発行します。

お友達読んで下さい。

保育とは……

字のとおり「保護+養育」のことです。

又、元の意は、母性をどうとらえるか? ということです。私としては、よい Mother になるために、この知識を学びたいと思います。

(10年後、どんな Mother になっていることやら……)

「子供ができたって——。じゃあ、しつてことじゃん」

この言葉から何を連想しますか? 「しつて」事にはわれわれが知らないのは、別な事ですか? 松下先生、いづく……

性交→妊娠→出産→ストリートに考えている……しかし最近では、性交→妊娠→出産→自分の子供を育てていないように思えます。

つまり……性交に対する目的が変わって「性の商品化」が進んでいるのです。

さて、Youは、性商品にどんな物があるか知ってる?

私たちが知る性商品に次のような物があります。

・能着・ビニール着・ボディ映画・ストリップ

・10人衆・トルコ・パンク・パンク・パンク……etc.

お友達の中には、ビニール着など

見たことあるのでは?

え、どうして……。

つまり「しつて」性が商品にされるのか……

- ・お金のための売春
- ・enjoy & playのための
- ・1人の願望……
- ・避妊具の乱用
- ・女性の地位の向上に伴って女性としての権利をより多く。

ちょっと難しいかな……?

ではいい、いつ頃から「性が商品化」されてきたのか?

ええ、女性史について、ちょっとおしり……

女性史とは……

社会は女性をどうとらえていたか、ということですが

大和朝廷の時代にも、華女(うねめ)とよばれる人がいて、さらに平安時代には、遊女(うねめ)とよばれる人がいた。その人達は、今でいう売春婦や娼婦です。

じゃあ、一感想と!

この記事を読んで、女性史について理解しただけでいいのかな?

いや、いい。軽く読んで、性に對する心や態度がどうなっているかを感じてほしいと思います。

これからは性のことを、興味の対象として見るのではなく、彼女たちがええお金のために、利用される。知識を求めていざいざと見まわす。保育という性商品化の仕組みから見て、この性商品を通して、保育を学んでほしい。利用と交換を促して欲しい!

(10年後、どんな Father になっていることやら……)

— The end —

以上A様

お友達、お読み下さい!

信

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

Dear...

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

母性とは

今週は、妊娠について考えてみました。

妊娠とは、精子と卵子が卵管で出会い、(受精)して、出来る精子の数は約2億個。そのうちの1個が受精する。受精したものを、分裂しながら、子宮に着床する。それが妊娠の成立です。

中絶絶殺人 産む自由、産まない自由がある。自由、人間だからである。中絶とは、子宮内の胎児や胎盤などを除去すること。妊娠3ヶ月未満までは、簡単な方ですが4ヶ月以上になると、陣痛をおこさせ、出血と同じような苦しみ、ともなわなければならない。

胎児の発育について...

妊娠初期(妊娠1ヶ月~4ヶ月) 身長は15cm重さ100gほどで、全身にうぶ毛がはえ皮膚にしわが多くて老人のような顔つきをしている。第7月までは母体外では育たないので流産児として扱う。

妊娠中期(妊娠5ヶ月~7ヶ月) 身長35cm重さ1000gほどで、全身にうぶ毛がはえ皮膚にしわが多くて老人のような顔つきをしている。第7月までは母体外では育たないので流産児として扱う。

妊娠後期(妊娠8ヶ月~10ヶ月) 身長50cm重さ3000gほどで、足下脂肪が多くなり肥えて赤ん坊らしくなる。頭髪ははいつめはたかくなり、男児は丸が陰のう内にたくなり、女児は乳房が小陰唇や陰板をおおう。生まれると、呼吸、体温調節などの力があり、外界に適応できる。

せん、つまり、これから一生懸命、生きようとする命を、無償にも殺してしまふことなのです。 次の場合には、中絶を断られます。

夫婦のどちらかに遺伝病や精神病がある場合、夫婦または、四親等以内の親族に、遺伝性精神病や、遺伝性身体疾患がある場合、夫婦のどちらかがライ病にかかっている場合、

身体的または、経済的理由によって、母体の健康が害されるおそれのある場合、暴行や、脅迫によって強姦された妊婦した場合、

みなさん！中絶しないために、避妊という方法があるのを、知っておいて下さい。

奇形異状 カリドマイド児というのを知っていますか？妊娠初期に母親が、リウマチや、糖尿病などのカリドマイドという睡眠薬をのんだために生まれて来た子に、手がなだらかり、耳がなかりたりするのです。

一定時期に作用します。一定部位、妊娠初期(妊娠4~5週間)は、赤ちゃんとて、感受性が大きいからです。1970年に、製造禁止になったのですが、その間、日本では数百例のカリドマイド児が誕生しました。

最後に、みなさん幸れな結婚をして可愛らしい赤ちゃんを産んで下さい。

奇形異状児が生まれてくるのは？ 奇形異状児が生まれてくるのは？

奇形異状児が生まれてくるのは？

前回の新聞では、カリドマイドについて出ましたが、今回はホルモンの分泌、放射線による奇形発生についてお話しします。

まず最初に、ビルス症候による奇形発生について。ビルス症候は、胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

胎児の発育に悪影響を及ぼす。胎児の発育に悪影響を及ぼす。

保音 NEWS 昭和57年 2月26日 2版 No.4

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

ひとひの家さの今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

本 当 の 生 命 尊 重 と は 何 か

ヤ
 ン
 ソ
 ン
 由
 美
 子

妊娠中絶の是非が問題になっている。日本は、妊婦の自由意志による中絶は許されていない。それは刑法第二十九章の堕胎罪で禁止されている。実際の日本はマスコミで目にする「中絶天国」であろうはずはなく、中絶は堕胎罪が適用されないいくつかの例外条項を定めた、優生保護法によって部分的に合法化されているにすぎない。

このように、まず堕胎罪を設けて、意志的な中絶という行為を罰することによって女性全体を取り締め、しかし中には認めていい場合もあると、特定の例外条項を設けるという二重構造の中で、日本の女性たちの子産みは国家によって管理されている。

この、特定の例外条項というのが優生保護法となっているわけだが、名称が示す通り、この法は子供を優れた生命と劣った生命に分け、劣った生命、つまり精神的肉体的劣性遺伝を受けるおそれのある胎児になら人工中絶していいという、優生思想に基づいた現在では世界にも類をみない悪法である。

他の国でも中絶は優生保護法で取り締まられていると何の疑いも持たず信じている人が結構多いので、ここで、中絶を優生保護法というわくで制限緩和しているのは、近代国家で、今では日本だけであることを指摘したい。

〈中絶をめぐる世界の動向〉

現在、世界の国々は、子産みを国家人口の再生産という立場からみるマルサスの人口論の見方から、個人が自分の人生において選択し決断する基本的人権に属する問題であるとする見方によって変わっている。

西洋諸国はどの国もキリスト教の影響で、堕胎罪は重い刑をもつて処されてきた。堕胎した女を極刑にした国々も多い。二十世紀前半まで、母親が自分の意志で胎児を中絶してはならないとする道徳及び制度は、かなりの呪縛力を持って、実際に人々の人生を左右してきた。それが、一九六〇年代後半から急激に制限緩和、堕胎罪廃止、中絶を認める法律の制定へと変わってきている。一九六七年のイギリスの中絶法制定に端を発したヨーロッパにおける中絶自由化の動きは、現在ではオーストリア、フランス、デンマーク、スウェーデン、イタリアなどヨーロッパの主だった国々の法律を改正させるに及んでいる。堕胎罪がもはや時代おくれの法律であることは、ヨーロッパの常識になったと言って過言ではない。これらの国々は、多少の表現の違いはあっても、おおむね、女性の意志の表明と医者の判断があれば、母体の健康状態が許すかぎり、一定の妊娠期間までの中絶を認めるという主旨の法律を制定している。

また、刑法堕胎罪そのものは廃止しなくても、例外条項を増し、堕胎罪を形骸化するという方法をとっている国々もある。西ド

イツ、イスラエル、見方によっては、たとえ優生保護法というわくの中でも「経済的理由」を認める日本もこれらの一つであろう。

アメリカの場合は、一九七三年に連邦裁判所で中絶を認める判決が二件あったことが判例となり、現在妊娠三ヵ月までは自由化されている。しかし、日本同様「生命の尊重」派がこの判例を無効にすべく法制度を改「正」する運動がさかんである。

このように、一九六〇年代後半から現在まで、西洋諸国では中絶の自由化が急進していることは誰もが認める事実である。前出の国々はすでに制度を変えた国であるが、他にも現在、墮胎罪の撤廃を国会レベルで求めている国々もある。ドイツでは七〇年以来、何度も革新議員によって墮胎撤廃が上程されているし、オランダでは中絶法はないまでも、中絶は保険扱いされていて、墮胎罪は完全に形骸化されている。

〈女性解放運動の影響〉

一九六〇年代から現在まで、中絶をめぐる議論を一般化し、墮胎罪につきあげ、子産みは国が管理介入する問題ではなく、個人が決めることであるという方向にヨーロッパの世論を変えた立役者は、女性解放運動であることは、ヨーロッパでは周知の事実である。

刑法墮胎罪は、妊娠したら産むより他に道はない、女が失敗したらやり直しが効かないことを思い知らせる法律である。つまり望まない妊娠をしたら、女はもう産むより他に道がない、追いつめられた状況に置かれる。妊娠した子を産む

か産まないかを選択することを許さない法律なのである。最悪の場合、どうしても産みたくなかったら、お腹に子を宿したまま自殺するより他にない。そして、妊娠した女の自殺は現在でも実際に私たちの身边で起きている。

ヨーロッパの女たちは、望まない子を産むよりは中絶を、みごもってもまだ選択できる状況づくりを、と、墮胎罪を突き上げて来た。フランスの例をとると、七〇年代前半には主義主張が違い、セクト化していた女性運動グループたちが結束できたただ一点が、この墮胎罪廃止、中絶を「選ぶ」権利獲得運動だった。

カトリックが社会道徳をつくっているあのフランスで、あるいは、イタリアで、他の国々に先がけて中絶法が制定されたことは、女への締めつけが厳しいほど、女たちの団結も固いことを示していると思えてならない。

国際的に見れば、女性が自分自身の人生設計を立て、自分の足で立ち、自分自身の経済生活をもつことを求める時代に、いま私たちは生きている。国連が現在継続して行っている婦人の十年計画は、あらゆる分野で男女の平等と同権を実現するために、国際世論を反映して企画されたものである。

一九七五年、国際婦人年元年、メキシコで開かれた世界会議で採択された世界行動計画を見ると、子産みに関し、次のような合意がある。

「子の数と出産間隔を女性が自由に責任をもって決定する権利とその権利を行使するための知識と方法を利用し得ることは、女性が教育及び雇用の機会を活用し、責任ある市民として地域社会の生活に全面的に参加しうるか否かに決定的な影響を持つ」(第一三六条)。

言い換えれば、女性が男性と同様にあらゆる分野の活動に参加するために、自分で子の数、間隔を決断する権利が認められなければならない、ということである。

また、一四五条では、国の人口政策とは別に「個人及び夫婦は、制度化された組織を通じ、自らの子の数と出産間隔を自由にかつ責任をもって決定——中略——する可能性を持つべきである」とうたっており、これはとりもなおさず、子を産むか産まないかは個人の決める範疇にあるべきであるという見解と見ていいだろう。また中絶を認める制度の必要性を言っていると読むこともできる。

＜日本の特殊な状況＞

このような国際的な動向の中で、日本では現在、中絶は優生保護法の定める五つの条件のもとでしか認められていない。最初の三つは精神的身体的劣性遺伝子を子に伝えることを避けるため（もつとも第三項目のライは遺伝ではなく感染であることが判明しているが、いまだに優生保護法の例外条項となっている）と、状況的なもの、すなわち第四条の「身体的および経済的理由」と強姦などによる妊娠である。

現在、強姦による妊娠以外に、健康な女性が望まない妊娠をしたら、第四番目の経済的理由を利用する以外に中絶を受けることができない。つまり、現実には、日本でも子産みの決定は女性が、あるいは夫婦が自らの意志によって行っているのだが、制度上は個人の意志による中絶を認めていないのである。「経済的理由」ということになっているのである。

なぜ、個人の人生の最も大切な部分を、自分の意志以外の

もので決定されてしまうのか。中絶の是非は、もはや、政治や倫理から論じられるべきではなく、個人の人權という見地から論じられて当然ではないだろうか。

今まで述べてきたことをまとめると日本の中絶をめぐる論議を見るとき、三つの特徴を指摘することができる。一つはこの問題を、個人の人權という見地からとらえないこと。最終的には個人が自分の人生計画に従って子産みを決めるべきである、とする国際的女性解放思想の影響が全く見られない。第二に、産むのは女、しかし決めるのは男という徹底した女性軽視。中絶条項の強化を、女性の意見を全く無視した形で取り上げている。第三に、生命の尊重を説く中絶反対派の意見の矛盾性である。

この第三点について説明すると、優生保護法の中の「経済的理由」を削除しようと企てる人々は、その理由に日本は経済大国でもはや中絶しなければならないほどの貧困はないということと並んで、生命の尊重をあげている。村上参議院議員をはじめ、中絶が人間の生命に対する冒瀆であると主張する人々は、生命の尊さを絶対視し、受胎の瞬間からヒトの生命が宿るとしていながら、優生保護法の第一の対象者たち——身障者——の受精卵は中絶していいが、経済的理由での中絶はならぬと主張する。生命の尊さが絶対なら、どの胎児も同様に尊いはずではないか。なぜ経済的理由で中絶される胎児の命だけを特別に救おうとするのか。優生思想を認めた生命尊重論は一貫性がない。劣った生命は抹殺していいが優れた生命は殺してはならぬ、という論理で生命の尊重を説くことはできない。

＜日本は中絶天国ではない＞

中絶が自由化されると、中絶率が上がり、性非行が増え、性道徳

が退廃すると中絶禁止派の人々は言う。はたしてこの批判はあたっているだろうか。ここに一九七五年に中絶法をもって中絶自由化に踏み切ったスウェーデンの数字がある。一九八〇年出生児数約十一万人、中絶件数は約三万四千人、つまり中絶件数は出生児数の約三割である。これが日本の場合一九八二年の出生児数は約一五〇万人、中絶件数は厚生省発表で約六〇万人（注、ある産科医の推計によると約百万人）で出生児数の約四割にあたる。

スウェーデンの場合、中絶法が施行された一九七五年の中絶数は三万二千人、一九七九年は三万四千人である。中絶件数が増えているように見えるが、実際は妊娠可能年齢（一五～四四歳）の女性が多くなっているの比率は変わっていない。妊娠可能年齢の一〇〇〇人の女性のうち、中絶数は一九七五年も七九年も同じで二〇・二であり、中絶法ができてから中絶件数が増えたという批判はあたらない（以上スウェーデン全国性的教育連盟からの情報による）。

その上、中絶数の比較をすること自体、意味のないことである。問題はこういう中絶事情にあるのではないか。中絶しなくては方法を確認する方が急務であって、中絶する者を罰することは問題の根本的解決にはならない。

中絶禁止論者だけでなく、マスコミもしばしば表現する「中絶天国日本」は存在しない。日本では第一中絶は自由化されてはいない。それどころか、今のところ「経済的理由」に救われているが、ちゃんと堕胎罪は存在している。こんな制度の中でなぜ日本を中絶天国呼ばわりするのか。

日本の男女の性関係が、男が女を一方的に性の対象として扱い、女は男に嫌われるのを恐れて避妊もせずに応じると言うパターンで、その結果、失敗した妊娠の中絶が多くなったからと言って、青少年の非行の原因は安易な中絶制度にあると優生保護法の中の経済的理由を削除すべきというのは、あまりにも短絡化すぎる。

日本では本来に人間性を謳歌する性の解放はない。何十歳になっても、女は結婚してなければ性生活があってはならないとされているし、十代の子供たちの性行為は不純異性交遊と呼ばれ、経験者は「不良」のレッテルを貼られるこの日本で、性が解放されているはずがない。

女は受身で、自分の体のことさえ、男を恐れるがあまり管理せず、失敗しては中絶を繰り返すという状況で、性教育も避妊知識もない男や女が、一方で映画、雑誌、マンガでこれでもかと思われ刺激性的な性描写を見せられる。男は経験がある方がいい、女は処女がいい、何も知らない方がいいという性文化は、男と女を切り離してしまふ。そして、そのような考え方が商売用の性と結婚用の性という二重道徳を日本社会に植えつけてしまったのではないか。

男と女が同じ性道徳を持ち、自分たちの性に平等な責任をとらない限り、中絶問題は永遠に隠された女の問題として扱われるだろう。誰が好んで中絶をするだろう。中絶しなくてはすむ環境、制度、生き方を求めている。女が働くことと子産みのどちらかを選ぶのではなく、両立させて行くためには、どうしても、自分の人生の決定権を自分の手に握らなければならない。

子を産むか産まないかは、国家が決めることではない。女が自分の人生の中で選ぶことである。

「ソフト」と「家事」と「落ちこぼれ生徒」

梶原 公子

「男にも家事を」と言う時、我が夫に關しては、「実行して欲しい」「実行し得ない」七年間の攻防の記になってしまふ。なぜなら彼はモレーツ社員ならぬ、モレーツ監督であるからだ。会社のためにエンヤコラ利益をあげようと働く社員なら

いざ知らず、「落ちこぼれ」生徒相手にソフトボール部に情熱を注ぐ彼。しかもそのソフトボール部が全国一ともなると、そちらを「適当にやってよ」とは言えなくなる。しかし私はあえて言いたい。全国一となろうとも、家事・育児も生活人としてやりなさい、と。家事・育児もやり、ソフト部も全国一にしたなら誉められるが、そちらはやらずにソフトばかりやれば強くなるのは当たり前でしょう。こちらにだけ「内助の功」とばかり家事・育児をすべて押しつけないで。

しかし、私は彼のソフトボールが嫌いなわけではない。高校野球の華々しさはない。「ソフトボール、男子もやるの？」と言われるくらい地味な方である。そして現にソフト部員は、野球の続かない子や、ボクシング部をやめた子たちの下請的な「落ちこぼれ」部だった。グラウンドも、野球やサッカー、陸上部が幅をきかせる中で、小さくなってやっていたのが始まりである。しかも、高校で男子ソフト部のある所は少なく、対外試合も社会人チームとすることが多い。しかし、社会人でのソフトボールは案外ポピュラーで、色々な職場が

チームを作っているように、息長くやれるスポーツという利点がある。そして野球のようにあまりプロ化、ショー化していず、スレていない純粹さもある。

そういうソフトに熱意を注ぐ彼に、決して声援を送らぬわけではない。しかし、同じ教師でも体育を担当する彼と家庭科の私では、方向が少なからず違い、ぶつかることがしばしばである。それで彼のソフト一辺倒には抵抗し続けてきたわけだが、その私の抵抗に「抵抗」して来たことが、部をゼロから全国一にまで盛りあげていった力になったのではないか、と秘そかに思っているのだが……。

彼がソフト部を創ったのは七年前、私と結婚したころである。その時の部員は確か三人、それから三年間は、どんな公式試合も負け通しで、彼の夢は「インターハイ出場」だった。毎日の朝練はもとより、帰日も遅く、休みの日はソフトばかり。共働きゆえに家事のしわよせはままならぬもので、そんな時の彼の口癖は「俺を男にしてくれ」だった。

しかしその熱意と練習量の成果で、三年前の県新人戦に優勝。翌年の高知インターハイには晴れて出場することができた。この大会ではベスト8に進出。そしてこの三月、第一回全国高校ソフト選抜大会には、優勝を飾ることができた。この春休み、彼は大忙しである。

が、どの年のチームを見ても決して「優秀」などと言える生徒た

発言

ちではなかった。いや、「落ちこぼれ」のワルばかり、と言った方がよい。学校でも有名なワルで、もう退学するばかりの子が、ソフトボールだけのために「つながっていた」というのが多い。タバコ、怠学など日常茶飯事だ。

この選抜大会に優勝したエースが某大学からスカウトされたそう。しかし彼は大学など行く気がないどころか、今でも高校すらやめたいと言っている。「ヨタッ小僧」であり、授業などいつも寝ている……とか。監督（夫）は「お前は全国一のエースなんだから、もっと素行に気をつける」と言うのだそうだ。

私はそんな彼らを憎めない、どころかツッパリ、ワルでいる彼らを好ましくすら感じる。中学で「優秀」でなかったのが、勉強嫌いになり、やがて「ワル」のレッテルをはられていく。しかし本当にそんなレッテルは正しいものなのだろうか。

学歴主義・学力選別の教育体制が、彼らを「ワル」に追い

ああ、ソツギヨウ式

芦谷 薫

どうやら第二の成長の節にさしかかったようで、近ごろとみに、ムカッとくるような言葉や態度をする娘に、まともに応戦してしまう母親の私。軽妙な言葉のキャッチボールのテクニックもいつの間にか身につけている娘。ひとえに、TVと友達同志の三角四角関係の賜物ですなと私。そのくせ、

やってはいないだろうか。学力で勝った者だけが、人間的価値ある者と見られ、本人もあたかも「優秀人」という錯覚を持つ。そうでない子は以後、劣等感を持って生きなければならぬ。その彼らが、劣等感ゆえに問題を起こすとしたら、原因はどこにあるのか明らかではないか。

「落ちこぼれ」た生徒にも、ブライドも、さまざまな能力もあるのに、学校はあまりにそれを忘れすぎてはいないか。そういう生徒の方が、人間的味もあり、生活力もねばり強さもあるのではないかな、とつくづく思う。

今は、ツッパったり、問題を起こす子を余りに冷遇しすぎている。教師の態度を彼らはじっと見ている。彼らとどう接していくか、それを考えることが、校内暴力など解決する一つの道にもつながるのではないか。

「落ちこぼれ」たちの良き理解者である夫よ、これからもガンバツテ。しかし全国一になっても、やっぱり二児の父、生活人としてこれまで以上に家事・育児に励んでください。

「周遊券」手七の場六にン!? の娘。生活に根ざした!? 言葉はイマイチのところを見ると、まだまだ修行が足りないネと私。いまひとつぎくしゃくした関係から抜け出せない状態に、時としてうんざりすることもある。

そんな娘も小学校卒業の時を迎えた。

ある日、「卒業証書をもらう練習の時まちがえた。一歩さがって礼をするのいつもまちがっちゃうんだな」とやけに気にした様子で言う。どういう風にやるように言われたのかと問うと、礼をして一歩前に出てもらい、一歩さがって礼をするという。普段から口を開くと文句が多い母親に、卒業前の様々な学校のことをほとんど言わない娘が、ポロッと心配気に言った言葉は気になった。

私は娘に、「そんなことは小さなまちがいだよ。まちがってでもいいから堂々とやりなさい。小さなまちがだから気にせずに。もっと大きなまちがいが世の中にはあるんだよ」と話した。娘の顔は少しなごんだ。

卒業式の朝娘が自分で選んで着た服は、二年前に祖母が買ってくれた白いブラウスに、紺のビロードのジャンパースカート。それにいつの間にか自分で買って来たらしい黄色の飾りのついた髪をゆわえるゴムヒモ。さらに私のタンスをゴソゴソして見つけた白い小さなコサージュをつけるといふ。

前々から、卒業式に着る服は自分で考えて洗濯などの準備をしておくように言っていたので、どうやら友達の情報なども得て考えたようだ。

私の方はというと、黒いセーターに明るい色の上衣とスカート。それに真珠のアクセサリ。前夜かかってきた電話連絡の「ジーンズはさけてください」に啞然としたが、いつものジャンパーとズボンで行くだけのエネルギーもかき起せない中、普段着の中から改まったものにした。

式が始まった。そして証書授与。舞台そでで、どなるよう

な大声の返事。緊張した面持ちで歩み出て、礼、一歩前で手をびんと伸ばして受け取る。校長はひとりひとりに「おめでとう」と言うがどの子の顔もほころばない。一歩下がって礼、正面向いて壇をおりる。しごく真面目な顔ばかり。

五人だけが、顔や手足や身体全体から湧き出るようなうれしさを表した。わか草学級の生徒たち。これなんだ。これが本当なんじゃないかと思ったのは私だけだったのだろうか。

そういえば、壇上正面中央には日の丸が貼りつけてあり、壇に登る大人たちは皆、壇上で中央に向かって軽く頭を下げていた。司会の教頭も、担任も堅い表情をし、袴姿、ロングドレス、黒スーツに白ネクタイであった。

舞台には、子供たちが育てた鉢植えの花や下級生たちが作った桜の花で飾ってあったが、それらとチグハグな大人たちや卒業生の姿に思えた。

式後記念撮影のため校庭にバラバラと出ている卒業の男子を、教室の窓から眺めていた母親のひとりには、「まるで制服のようね。みんな紺のブレザーに赤いネクタイよ」といった。母親たちだって色紋付きに黒い羽織が半分位。着物姿は思ったより多かった。洋服姿も普通の外出着ではなく儀式、パーティー用。

大阪に住む姪は、娘と同年、すでに七日前に卒業式をすませた。この子の学校は、教師も生徒も皆普段着でということだったらしい。「男の子なんかジーンズで来ていたよ」という姪の言葉に、やっただね！と思わず言った。最近読んだ雑誌に西ドイツの小さな町の小学校の記事があった。入学式について「講堂の舞台には黒い幕が張られ、花が美しく飾られて華やかな雰囲気です。それでも日

親として

本の『入学式』のようなあらたまった式典とは違って、子供も親も普段着のまま出席します。この日のことを『入学式』とは言わないで『初めての学校の日』といいます。……大人の長い祝辞に終始する入学式と違い、このような子ども中心の歓迎式には心温まる思いでした」とある。

入学や卒業は子どもの生活のひとつの節ではある。だけど、儀式ばったものにする必要はないと思う。式の運び方や、子供の動作や服装で緊張した節目をつくり出すのではなく、もっと子供の心に親しき喜びをつくるような緊張（心の震え）がいいなと思う。

思えば、七・五・三だって入学式だって、子供の健康を祈

り、成長の節目を祝う気持ちに変わりはないと、強いて儀式的にしていなかった。近頃の小さなお宮さんに行って鈴を鳴らしたただで、親も子も衣裳で変身した写真もない。就学時前検診はボイコットし、普段着の入学式。しかし儀式に代わる節目への手だてを、親が充分にしてやれたかどうかについては反省の方が大きい。特に入学に際してはその思いが強く、小学校に入ってから娘のことで思い悩む時は、いつもこの手だての不充分さも原因のひとつではないかと考えてきた。

そういう私の中の情けない思いと、一公立小学校の卒業式への不快な思いが今の私には共存している。

* ひ と *

「団地の風景」の

遠藤和枝さん

姉妹都市を選ぶならブラジリア。初めにプランありきって街、多摩ニュータウン。

「おさだまりのコースで結婚し子を産んで何にも考えない時期が十年ぐらいあったの。そのころ文章書いても、肩書きは「主婦」ね。

そのことをなんとなくいやだなと思いながら五年ぐらい過ごして、編み物教室でやってい

こうと決心したのはここ二・三年ね。今はやりの言葉でいえば、アイデンティティがようやく持てたって感じ。

都内から団地に越してきて、地域の活動の中で映画会を計画していた時、今ニューヨークにいる三井マリ子さんから突然電話がかかった。一年後二人は『団地のをんな』を刊。一九八〇年九月のこと。年四回、十二頁を今は一人でがんばっている。長女由紀さんのカットが爽やか。

自立とは―「まず経済的なものがあって、考えは次ね。そうでなければ」している」とは言えない。周りの人にこういうと、保育所

がない、仕事がないと反論されるんだけど……。今「していな」くても「しよう」としている人とは友達でいられるのね。

手編教室の歴史は新しい。今後の行方は―「パンも編み物もすべて手づくりという人がいるでしょ。その人に働いている人が、ヒヤカして優雅でいいわねなんて言う。みんながもっと余裕を持って、生活を楽しめたいのと思う。私自身は一週間フル回転して経済的自立を目指せば、手づくりを放棄せざるを得ない矛盾した生活なんだけど……」教室のドアを開けるや、動きにスピードが加わった遠藤さん。

（中野敬子）

We に なんでも言おう なんでも聞こう



◇四月からWeを読むことにしました。Weとかかわりは、かなり前からあったのですが、Weのきまじめさが私には息苦しくかなり長い間ためらっていたのです。

内容が専門的だから……。というだけではありません。教育とは！ 家庭科とは！ と問うていくその「純粹さ」が私には、まぶしくもあり怖ろしくもあったのです。

教育のあり様を深くつめて考えてゆくことは、おそらく大切な事でしょう。しかし、教育とは「」付きで大きく語られることが、かえって教育というものを見えづらくしているような気がします。身の人間と人間とのかかわりとい

うあたり前のことが、どこかで忘られていってしまうように感じます。そしてそのあたりが、今良心的な教師とさえ、親たちが手を結ぶことが出来なくなっている一つの理由のような気がしています。それが私のこたわりでした。

こたわりは、溶けたわけではありません。でも私はこの春、大勢の方たちと会いました。

名取弘文さんを知りえたことは幾年にもわたる「学校との消耗戦」に疲れはてた私には、何よりの飲びでした。彼の「面白がる心」に私は、物いう時に自分の中に欠けていたものを知らされました。子供はあるがままで、おもしろくも豊かなものであると、今は素直にそう思えます。

そう思えることで私には、彼の授業が静かでないことも、「有名病の軽薄な人」と言われつつも、彼らしくあることを止める気がないことも納得出来ます。重々しく謙虚である人をどうも私たちは事

さら求める雰囲気があるように思えます。人にはそれぞれの個性と想いがあるはずです。私がこの春出会ったWeの方たちは際立った個性の素敵な人たちでした。その個性の多様さが私には魅力的です。

「同じ考え方の人たちがうなづき合う怖ろしさ」とは私の友人の言葉ですが、私もそれこそが一番のなれあいだと思います。多様な人たちの多様な考え方がぶつかりあい噛み合う中で一人ひとりの想いと個性は、ひとりであることを超えてWe（私たち）を創り出していくでしょう。

Weは異なった考え方をもちりすてない大らかさと、それを面白いと感じる豊かさをもちた素晴らし人たちの集まりだと私は感じたのです。

そんなわけで、私はこの春巷にあふれる本の中から野の花Weを選びました。（神奈川・渋谷路世）◇We四月号の鈴木妙香さんの投書を読み、人を批判するには、それ

なりのルールが必要ではないかと思いました。まず、①「切るものは切れ」式の「排除の論理」はやめようじゃありませんか？ 四千人の読者がいれば、好き嫌いがあるのは当然で、「あれを切れ」「これも切れ」が始まったら、玉ネギの皮むきと同じで、最後に残るのは涙だけ、という結果になりかねません。

②排除のための批判ではなく、「相手を変え、時には自分も変わる」ための批判だとすれば、具体的な事実に基づく批判でなければなりません。臆測による悪口では、PTAの廊下トンビと同じです。名取さんは「男の家庭科教師だから」有名になったのではありません。それ以前に「生徒の自己評価による手づくり」の通知票作り等公教育に対するラディカルな抵抗運動を実践してきた人として知られてきたと思います（現代書館『反教育シリーズV・通信簿と評価権』参照）。

鈴木さんは「人の痛みなどおかまいなしの人が、公に文章など書いてほしくない」と言われますが根拠も挙げずに、名指しで「有名病の軽薄な人」と形容するやり方は、本当に「人の痛み」の分かる人のやり方といえるでしょうか？

③「半田さんは周りの人たちに利用されている」「骨までしゃぶられてしまわないか」という表現がありますが、これももつと具体的に説明してほしいと思います。

人間関係にはいろんな側面があり、例えば八百屋さんとお客さんの関係にしても「互いに利用している」とも言えるし、又「互いに助け合っている」とも言えるわけで、どちらの側面を強調するかはその人が人間関係をどういう角度から見ようとしているか、ということと密接にからみ合っていると言えるでしょう。We誌は、その名の通り、みんなで作る雑誌のほずすから、読者みんなが、自分のイメージを反映する誌面を望むで

しょう。中には、矛盾・対立するイメージもあるでしょう。その場合、自分のイメージと合わない人たちがいるからと言って、「半田さんを骨までしゃぶろうとしている」とみなしてしまうのでは、ミもフタもないではありませんか？ もつと包容力のある、ゆたかな人間関係をつくっていききたいものです。（東京・ますのきよし）

◇Weが創刊よりいろんな考えの人の意見を真剣に取り上げて、広く論争の場となり、そこからみんなとってこられたことは十分理解しているつもりです。でも鈴木さんの文にはこたわってしまいうです。それは次の二点です。

一つは「編集に偏りがある」という意見としてとらえなければいけないと思いましたが、あの文面からは建設的な意見や批判という感じがせず、名取さんやその他の執筆者（有名病の軽薄な人）と書かれています（が）への非難や中傷の

取り上げられたのか、よくわからないのです。（東京・芦谷薫）
（編集部より一言）
鈴木妙香さんから、何かいやなものを感じて、購読継続を迷ったのはがきをいただき、その理由を具体的におきかせ下さいとお願いしました。鈴木さんはよく考えてみると言われて書いてこられたのが四月号69頁に載せた文です。

熱い期待をもつて購読された方が一年でなぜ止められたのか？その理由をどうしてもつかみかかったこと、多くの方の善意の上に乗って、人間の美しさだけを見てきたと厳しく自分を問いつめていた時期であったこと、鈴木さんの文を投げかけることで、読者の皆さんの中にくすぶっている声を聞き、二年目以降の編集に生かしたいと願ったこと、が鈴木さんの文を載せた理由です。鈴木さんの感想は鈴木さんのものであり、それを「切る」ことも、私にはできません。（半田）



③ ほえない犬あくつつぐ

藤田健次

「ほえない犬も食つつぐ」。スビッツは神経質な犬で、気に入らないひとを見かけると、かん高い声でなきわめく。非常ベルでも鳴りだしたみたいだ。対象物が、その場を立ち去らない限りなきつつける。すごい執念だなと感心するが、ただそこを通り過ぎただけなのに、いかにも凶悪殺人犯のごとく叫びたてられるのには、つい腹をたててしまふ。

一方、土佐犬などは、「うー」とうなって、いきなりガブリとやるからこわい。ほえない犬こそかみつくのである。つまり無口な人間は、案外腹に一物をもっていることが多いのだ。

「あれあ、あまり口しゃべらねばって、意地ああって、ながながのしつかり男だど。ほえない犬あ、くつつぐずごとだ」などと。不満や批判があっても、腹にためておいて、誰かが代弁してくれるのを待つ。これは、ずるい。自分は矢面に立たず、甘い汁だけ吸おうとしている。これでは、「ながながのしつかり男」だとはいえない。ほえない主義もまたいい。だが、時にはガブリとやってもらいたい。

ところで、人間は、無口な方がいいのか、おしゃべりな方がいいのか。土佐犬がいいのか、スビッツがいいのか。いやいや、土佐犬も、スビッツも、いろいろとあるから世の中おもしろいのだと、やっと気がついた。

この春、学窓を巣立っていった人たちの中に、大学のクラブ活動などで障害者とかかわりを持つようになり、身の回りの介助を手伝うことで、世の中の矛盾、差別に否応なく気づかされた若者は数多い。しかし、仕事をもてば、誰でも時間の制約を受ける。新入社員となればなおのこと、研修などでヘトヘトになり、休みは「寝てよう日」。仕事を覚えるのが精一杯の一年目を過ぎると、今度は仕事がおもしろくなり、他のことに関心を持てなくなる。「ボランティア」と呼ばれる活動を、学生時代だけするもの、と彼らも私たちもなぜ決めてしまうのか。学生時代よりも社会に出てからの方が、差別や矛盾をより身近に感じ考えさせられるのではないか。

今のボランティアの年齢構

成は、十代後半から二十代前半と、四十代から六十代の人たちで占められている。高校や大学時代の約七年間、そして子育てをある程度終えたあとと老年までの二十年間ほどが、ボランティア世代なのだ。なぜ二十代後半から三十代の人たちが少ないのか。精神力も体力も一番充実しているこの年代の人に、もっとと身近にいてほしい。私の場合、同じ年代（三十代）の人との交流は数えるほどしかない。職についている人だと、一年に二、三回会えればいい方だ。同世代の女性はだいたいが家庭を持っているので、子供ができたたりするとまるで行き来ができなくなり、しばらくぶりで会ってもお互いの共通の話題が見つからなくなってしまう。

学生のときにボランティア活動を真剣にやっていた若者たちは、就職してからも、時間の許す範囲で障害者との接触を続けてほしい。確かに、時間をつくるのは並大抵の努力ではないと思う。働いているということがどういふことなのか、在宅の重度障害者にはほとんどわからない。だから、お互いの立場をはっきりさせるように、よく話し合うことだ。初めのうちは、両方とも何か物足りなさ

を感じたり、不満を覚えたりするかもしれないが……。

学生にも、勤め人にも、家庭の主婦にも、そしていろいろな人たちに何らかの形で介助を頼めるようにできたら、障害者自身はもとより、その家族にとっても日頃の重圧から解放されて、少しは気楽になれると思うのだ。国の福祉政策が変わってきて、障害者も、老人も、家庭でめんどろを見なければいけないような状態に、だんだんとなっていく感じだ。家族だからそれが当然と誰もが思い、私たちもあたり前のこととしてきた。高齢化社会が近づいていることなどを考えると、私たちが家族だけに頼り、世話になることは、最善の策ではないように思う。寝たきりの老人や、重度障害者の世話をするのは、主に妻や嫁、娘。今年からホームヘルパーには生計中心者の年間収入によって金を払うことになった。私たちと、その家族が受けるしわよせを、どのように解決していくか。これを全ての人に理解してもらいたい。年齢や、仕事の有無に関らず、いろいろな立場で何らかの手助けをしてほしい。私たちには、敵はたくさんいても、「本当の味方」は少ない。

団地の中の一室を借りて教えている私のあみもの教室では、幼稚園児や小学生を持つお母さん方が多く、みんなせっせと家族のセーターを編んでいる。「次は僕のを編んで、と主人がいうのよ」と幸せそうだ。

「男は仕事、女は家庭という役割分業社会が諸悪の根源と常日ごろお母さんはいうくせに、女の人だけあみもの教えて良いの」と娘が批判するけど、「職業に矛盾はつきものだ」といって今のところは逃げている。

考えてみれば、私も教育産業の一端になっているわけで、自分の仕事を通して理想を追求しようとすれば、男にもあみものを教えるなければならない。しかし団地の中で、男のあみもの生徒募集なんてチラシを配ると、変なうわさになりそうな気がする。

私が家で機械あみをしていると、夫がよく傍へやって来て、機械の構造をあれこれ眺めながら、「手で動かさないで、キャリジが自動的に動くように改造してやろうか」などという。「そんなことしたら工場と同じになっ

てしまう」と私は拒否する。

「製図をコンピュータでできるようにして上げる」と、この間も私が食卓で製図用紙を広げていたら夫はそういった。

男にあみものを教えると、こんな風にきつと何もかも自動化しようと考えてるに違いない。

昔々、16世紀のイギリスでは、手あみのくつ下を、エリザベス女王がいたくお気に入り、貴族たちは競って手あみのくつ下を愛用したという。

団地の風景



かあさんがあ
よなべえをして
遠藤和枝
(カット・由紀)

庶民の女たちは手内職でせっせとくつ下を編んでいた。牧師のウィリアム・リーの妻も内職に毎日毎日細い絹のくつ下を編んでいたのだろう。やさしい夫は妻の肩こりをもみほぐして上げたかどうか、とにかくこんな割に合わない労働を妻にさせるにしのびなく思っ

て、くつ下あみ機を考案してしまったのだ。

手あみの六倍の早さで編めるというその機械は、イギリスでは女王が特許を許可しなかった。それは熟練技術者の保護と、大量生産による高級品の大衆化を恐れたためであったのだけど、リーの機械はフランスに持って行かれて、ルーアンにくつ下工場ができた。という話は、16世紀の出来事ではなく、今のイギリスで起こったような話である。

能率が悪い、というそのひとことで女がせっせと手を動かして作って来た手仕事の歴史を、男たちは次々と機械化していった。

能率よくできるようになって、人間のくらしが本当に楽になったとは思えない。

「男が家事を分担すると、何でも能率よくということばかり考えるのよ」と友人が言っていたけど確かにそうだ。団地というのは正に男の発想で作られていて、効率よく空間を使っている。その能率よく家事ができるように考えて作られた団地の一室で、暇のできた妻たちが、最も能率の悪い手あみを楽しんでいるのはどういふことなのだろう。

ウィリアム・リーはあみものの歴史に革命を起こしたけど、女たちは今機械を拒否して手あみをしている。色々な手づくり教室が盛んなのは秘そやかな女の革命かもしれない。

いま、町は選挙の季節を迎えている。職場の昼休み、女三人のよもやま話。

「今度の市会議員選挙に〇〇の奥さんが出るそうなあ」

「女が出るとは、初めてじゃあなか？」

「どげな人じゃろうか……こいだけ女が働く世の中に、男の市会議員ばかりじゃ。男ン衆は男に良かごとしか決めんて、女が出て、女のためになるごとせん。一人くらい女がおってもよかなあ」

話の輪に加わりながら、私にはくつきりと頭をもたげてくる思いがあった。確かに女の議員がいていい、男ばかりなのはおかしい。だが、女の議員を必要とするのは「一人くらい」なのか。まして、立候補する人は「〇〇の奥さん」として知られている。「とおる(当選)・とおらぬ」以前に、まだまだ取り組むべきことが山ほどあるのではないだろうか。

今度の選挙が、町の噂にのぼり始めたころ、私は親しい友人の家で、思いがけず「出ないか、出ろ」といわれた。熱心なすめに驚きもしたし、うれしくもあった。だが、私はお断りした。やりかけの仕事があるので。当面それに取り組みたいのです——と。

私の仕事は、この町にできたばかりの勤勞

婦人福祉施設の嘱託指導員。仕事場の少ないこの町で、ようやく巡りあえた職場だ。市が直接運営し、住民の働きかけでできたのではないから、施設はりっぱだが人的配置に乏しい。そんな中で、これまでさがし求めてきたことを生かし、この町の女たちが、色々なやものや場面に会おう橋渡し役をしている。こうした日々、仕事の場でさまざまな人や

Weの読書室



まちの選挙(1)

横山 雅子

動きに接していると、これまで見えなかったこの町の貌が見えてくるのだ。自主的な動きが根つきにくい——とされるこの町の人びと、家、土地や暮らしが。

ほんとうに知らなかった、知ろうとしなかったな、と思う。農業と漁業に主な生産基盤をおくこの町は、貧しい。従って女たちの多くが働いている。誘致企業のパートや、家業

に従事して。それに、ここは、名だたる男性王国。「女ンくせに」「出ばり(女が自分からコトにあたるとき、あびせられる)」がまかりとおっているとこだ。報われることの少ない仕事と、家事・育児。男性の目、近隣の目が光るせまい共同体——いわばがんじがらめの日常を、女たちは生きている。これが、この町の女たちの暮らしの現実だ。

それなら、私の中に一瞬間をもたげたあの思いは、もう一度とらえなおしてみるのが必要がありそうだ。職場の昼休みに気がねなく選挙の話をする事、ともかく女が立候補するということ。この人を出そう、と本気になる女がいること。それらをていねいにたぐると、これは大変な地殻変動がおこりかけているのではないか……。いまずぐ実を結ぶわけではなさそうだが、確かにやむにやまれぬものとして、女たちの中に息づいているものがある。土地を出、また土地に帰り、その暮らしになんていくことに四苦八苦している私は、何かに照らし合わせて自分の位置をさぐることをした方がよさそうだ。

そうして、一冊の本に巡りあった。(つづく)
『叢書・民話を生む人びと②』まちの選挙
小野菊枝著：山代巴解説・而立書房・1200円

愛って何? 「ラヴ」を観て 野村 康子

激しい運動のあとに甘味が無性に欲しくなるのと同じように、走り通しの人生に訪れる束の間の息抜きの時、人は甘やかなみずみずしさに憧れる。それが異性への愛である場合、最後の華やかな「思い出」になるかもしれない。そんな中年後半期にある男女の「心の飢え」をTVドラマ『夕暮れて』で切々とうたいあげた山田太一が同じテーマで書き下ろした初めての舞台劇『ラヴ——こころ、甘さに飢えて』を観る機会を得た。で、今回はテレビの枠を外れて書かせていただく。

大学生の息子は家を出て下宿、証券会社支店長の夫は典型的な会社人間。妻はカルチャーセンターに通ったりしてみることが心は満たされず、昼間はアルコールに安らぎを求める。そんな妻の状態を知る夫は、毎朝出かける時に妻を「孤独の冷蔵庫」に閉じこめていくような気がする。こんな関係を打開しようとする夫は酔余、宝石店主夫妻に「夫婦交換」を持ちかける。この夫婦も「二人で何かをしようなんて十年以上もなかった」から、「夫婦交換」によって「鋭い刺すような嫉妬心」が生じ状況が変化することを期待する。この成行きに抵抗するものが証券マンの妻。彼女にしても「夫以外の男に抱かれた」と思ったことがないのか」と問われれば黙るより仕方ないし、「夫にうんざりした時より、愛している時の方が長いと言えるか」といわれれば「わからないわ」と答えるしか術がない。しかし、彼女はもう一度夫と二人で何が欲しいのか話

ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像

ほかのシネマガイドほかのシネマガイドほかのシネマガイドほかのシネマガイドほかのシネマガイド

『東京裁判』 名取 弘文

『少年探偵団』『紅孔雀』などに夢中だった小学生のぼくにとって、映画は内容よりも大人たちの反応が楽しかった。そんな映画の一つに『巣鴨の母』がある。戦犯として巣鴨プリズンに収容されてしまった息子に年老いた母親が差し入れをもって行くのだけれど、面会も許されない。母親は涙をふきながら巣鴨プリズンの高い塀をながめる。しかも、息子は無実だったというストーリーだ。ぼくはこの映画を祖母と小学校の校庭の映画会で見た。三男を戦争でなくした祖母はしきりに泣いていた。涙は事実認識を危うくさせることがある。映画『東京裁判』を見ようとして、ぼくは反戦映画というのはあるのかと考えていた。例えば『地獄の黙示録』はベトナム戦争の愚かさを描いた反戦映画である。が、ぼくが興奮したのはヘリ部隊がワグナーを流しながらベトナム村を襲うシーンである。その華々しさにびっくりしたのである。映画は見せ物、演出なのである。

四時間半の『東京裁判』は、実写フィルムでほとんど構成されている。敗戦の玉音放送、ポツダム会談、原爆と史実を逆行して、日本の敗戦を米ソ対立の中でとらえる。マッカーサーの厚木到着、GHQの設置、戦争犯罪人の逮捕、そして裁判へと大日本帝国の崩壊が写し出される。東京裁判が裁こうとするのは「戦争」である。しかし、裁判官は一人を除いて戦勝国から出ている。公平な裁判にはならない。戦争を裁く法律もない。弁護団の構成も不十分だし、検事に都合よく法廷指揮が行

し会いたいと願ひ、自分が求めているのは夫との間の甘いようなやさしさつまり愛なのだという事に気づく。息子とその恋人の若いカップルに今ことばは不必要だ。ところが愛の歴史を刻んできたはずの夫婦の方が「愛している」という言葉によって自分たちの関係を再確認しなければならないという逆説。

歳月は皺とぜい肉を贈ってくれ、燃えるような愛、身を灼く恋を持続しつづけるエネルギーを奪い去ってしまうものらしい。この劇もそうだし、『夕暮れて』『早春スケッチブック』いずれの場合も、子供たち（新世代）が、崩れかかっている家庭や両親（旧世代）を積極的に支え、その再生に大きな役割を果たしていることが私には大変興味がある。

山田太一という人は、ふつうの人間の日常生活にひそむ危うさを鋭く抉り、彼らの「ありきたり」の考えや行動への異議申立を非常に衝撃的に展開するのだけれど、結局は平凡なつまらない生活こそが人間を育て鍛えるのだという結論に達する。だから、彼のいわゆる「小市民批判」の毒が強烈であればあるほどそれをのりこえてしまう「小市民」のしたたかさやバイタリティが強く擁護される。その見事などんでん返しに、私はいつも大きな安心感と同時に小さな不満を感じてしまう。その意味が、この舞台劇を見て、山田太一ファンはより一層その定石の素晴らしさに魅惑されるだろうし、そうでない人は彼の姿勢の中にある「求道精神」あるいは「健全さ」とでもいえるものに苛立ちを感じるかもしれない。

（地人公会演。三月〜六月、関信越・東海・北陸地方巡演）

ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像ドラマ残像

ほくのシネマガイドほくのシネマガイドほくのシネマガイドほくのシネマガイドほくのシネマガイド

われる。また、天皇の戦争責任を最後まで回避したこと、戦後のソ連封じ込めを目論んでいたことが映画の中で明らかにされていく。社会派の小林正樹監督の指摘は鋭く、東京裁判が「世界を破滅の淵から救う」というタチマエとはかなり違っていたことを観客に納得させる。そして、東京裁判で「平和に対する罪」が裁かれたにもかかわらず、その後も世界の各地で戦争が続いていることへの憤りを観客に感じさせる。その意味では『東京裁判』は秀れた映画である。

しかし、東京裁判が裁判としては不合理なものであったことを描けば描くほど、裁かれた「戦犯」に同情が行ってしまうのである。外交官松岡洋佑の仕事ぶりが「かっこいい」と思ってしまうし、広田弘毅がただ一人文官として絞首刑の判決を言い渡され、傍聴席の娘に会釈をすると観客は涙を誘われてしまう。そして、東条英機がキーンナン首席検事と堂々とやり合うのを見ていると、「首相をやった人物だけのことはある」などと感心してしまうのである。A級戦犯についてしかり。BC級となると、もつといいかげんな裁判だったのだから、「戦犯」はいかにも気の毒である。フランキー・堺主演の「わたしは貝になりたい」を思い出してほしい。

しかし、いくらぼくたちが映画に涙を流したとて、日本が朝鮮、中国を侵略したことは事実である。太平洋戦争の当事者であったことは確かなのである。その事実と責任をぼくたちは今もなお問われている。極東国際軍事裁判を東京裁判と呼び、ベントゴンが、一部提供したフィルムを編集した『東京裁判』が真実と思っただけは間違いなのである。

「ねえ、聞いて。私ね、いま、お父さんとふたりだけの生活が最高なのに、どうしてオトナは「お母さんがいないと淋しいでしょ」って聞くのかな？」

——オトナにはね、父親と母親がそろっていない家庭の子どもは不幸だ、という思い込みがあるからね。不幸かどうかは、当人に聞いてみないとわからないのね。それで不幸じゃないの？ アナタは。

「チットモ。だって、お父さんと私、友達みたいなんだもん。月一回はニューミュージック



のコンサートにふたりで行くし、太極拳を習いに行くし、反核集会にも行くんだよ。お父さんの影響でジャイアンツのファンになったしね。友達というより、恋人という関係かな？」

——家事はどうしてるの？

「朝と晩の食事と洗濯はお父さんがやって、私は部屋の掃除。アッ、ときどき、洗濯ものを取り入れてたむのは、私がやってるよ。お父さん、料理うまいんだよ」

Y子。十歳。小学校五年生。Y子の父は三十五歳。病院の医療事務にたずさわる。父子

家庭七年のキャリアをもつ父と娘。Y子の母

は、Y子が当時三歳のとき、「クレイマー・クレイマー」のジョアンナのように、自らの人生を取りもどすため出奔した。ただし、ジョアンナより、離婚の意志は固く、自立の足固めをした上での出奔だった。協議離婚の末、Y子と父の父子家庭が始まる。

——親の離婚は、子どもにとってはいい迷惑でしょ？ 親の身勝手なモロに受けるわけだから。親に対して恨みなんてない？

ねえ、きいし……

宮 淑子

父子家庭って最高だ」



「それは親と親の問題でしょ。私には関係ないです。恨みもないです」

——別れた母親を恋しく思うことない？

「ゼンゼンないです。なんでみんな同じ質問ばかりするのかね。私ね、よくお父さんが「父子家庭、三日やったらやめられない」ってひとにいうからね。そのとき決まって、「私も同じ。今の生活がサイコー」っていうんだよ」

——そうか。いまの生活がサイコーだったら、他人は口出しすることないよね。

Y子の父は、父子家庭になってスナナリ家

事・育児ができたわけではなかった。それまでの人生は、自分の存在をいつも何かに預けているような状態だった。高校へ入ったら政治活動で組織に身を預け、大学に入ったら闘争でマルクスに身を預け、結婚したら女に身を預ける。その左翼インテリゲンチヤアの甘えにクサビを打ち込まれたのが、妻の出奔だった。「この子にまますメシを食わせなきゃ、相手は死んでしまう」という現実の錘に、Y子の父は変貌させられていく。Y子と父

は、親子というより、生活のパートナー。

どちらがころんでも困るから、気づかいいたわりあい、「個」としても認め合う。

——もし、お父さんに恋人ができて、その恋人と結婚するようになったら、どうする？

「それはお父さんが決めることでしょ。私は関係ないです。お父さんの人生はお父さんのもの。私の人生は私のもの。それでいいんじゃないかなあ」

離婚は、必ずしも子どもを不幸にはしない。鍛え育む場合も、数多くある。

わんにゃ

★6カ国婦人比較調査—総理府★

総理府が4月3日発表した「婦人問題に関する国際比較調査」によると日本は婦人の社会進出が著しい割に、意識はまだだ。

調査は昨年1月と9月に日本、フィリピン、米国、スウェーデン、西独、英国の20～59歳までの女性1200人ずつを対象に同一方法で実施した。

夫婦の役割分担について「夫は外で働き、妻は家庭を守る」の肯定派は①日本71%②フィリピン56%③米国34%④西独33%⑤英国26%⑥スウェーデン14%。「結婚後は女性は自分のことより夫や子供など家族中心に生活した方がよい」の肯定派は①日本72%②フィリピン58%③西独41%④米国18%⑤英国10%⑥スウェーデン6%。

子供のしつけは「男は男らしく、女は女らしく」の肯定派は①日本63%②米国31%③フィリピン28%④英国、西独各20%⑥スウェーデン6%。

女性が職業を持つことについて各国とも「子供ができたらず辞め、成長したら再び職業に就く」という再就職型と「子供ができてでも続ける」継続型の2タイプが主流。男性に比べ職場で不当差別を受けた時の対応をみると日本は①何もせず我慢25%②同僚、上司と相談22%③職場を辞める12%。外国は「辞める」がいずれも3%以下で「我慢」はフィリピンの16%を除いては3～8%と少ない。（毎日、4・4付）

★“子離れ”の老夫婦—デンマーク★

女性大使としてデンマークに赴任した高橋展子氏が休暇で帰国。高橋氏の報告によると、デンマークは65歳以上の人口が15%を占める高齢化社会（日本は10%）だが、子供と同居している人は8%（日本70%）。施設に入っている人は6.1%（同1.4%）。8割以上が夫婦二人または一人暮らし。

老人だけの世界が多いのは「親子双方とも自立心が強いせいもあるが、1日に1回は地方公共団体から質量ともにたっぷりした温かい食事が配られ、訪問看護制度もしっかりしているから」。「年金は67歳から支給され、1人1カ月8万円ぐらい。自宅の

ない人には住宅手当、といった色々な手当が付くため」と分析。（同、4・16付）

★生命・倫理懇談会発足—厚生省★

「東北大での体外受精の成功や米国の人工心臓移植などをきっかけに医と倫理をめぐる議論がさかんになっている中、厚生省は4月13日「生命・倫理懇談会」（厚相の私的諮問機関、座長・林厚相）を発足させた。臓器移植から遺伝子操作まで幅広く議論し「ガイドラインのようなものを作りたい」としている。徳島大医学部は体外受精の倫理基準を作成したが、行政レベルの基準づくりはわが国では初めて。

第1回会合では「生命尊重という場合、動物の生命も含むのか」「人間として許される技術の範囲は、どこまでか」などが出された。委員は江橋節郎・岡崎国立共同研究機構生理学研究所教授、中根千枝・東大東洋文化研教授、中村元・東大名誉教授、加藤一郎・成城学園長ら。（同、4・14付）

★道徳教育—初の全国調査、文部省★

文部省は、校内暴力の多発などで荒れる学校の立て直し策として道徳教育の充実を打ち出し、全国の公立小・中学校計約35000校を対象に戦後初めての道徳教育実施状況全国調査を行うことを4月14日決めた。

調査項目は①道徳教育の実施状況②道徳教育に関する教員研修の実施状況③都道府県教委での道徳担当指導主事の設置状況—など計23項目。

道徳の時間は1958年に特設され、現在、小、中学校は週1時間。その他にも他教科、特別活動を通じて道徳教育を行うこととされている。

これに対し日教組は「戦前の修身のような押しつけ道徳教育強化を目指すものだ」と反発。（同、4・13付）

★非行対策へ“非常事態宣言”

PTA全国協議会★

公立小、中学校のPTAで組織する日本PTA全国協議会（岩橋延直会長）は3月19日、東京で校内暴力など非行対策についての懇談会を開催。「教師と父母の協力体制強化」などを訴える“非常事態宣言”を加盟全PTAに流すことを決めた。

その上で学校に対しては①校長中心に一致した指導体制の確立②校内暴力などの事実をすみやかに父母に公開③校内暴力多発などの問題について全教員とPTA父母、役員との話し合いの場を設ける—を要望する。（同、3・20付）

疲

はたらくことをめぐって

半田 たつ子

女たちとの新しい出会いを求めて、市や区の社会教育、自主的なグループ活動の場に出かける。昨年、最も多く取り上げられたのが「自立」であった。主婦としての自立、子どもの自立を助けるには……などなど。「人間の自立には、精神的・経済的・生活的の三つの柱がある」という模範解答は、先刻ご承知のこと。だが、ひとこと経済的自立という言葉に触れた途端、ほとんど専業主婦である参加者は、身体を固くする。そして話の後には必ず「働いていさえすれば自立しているといえるのか」「経済的自立はできていないが、私は精神的には自立している」が出る。

◇
もう十年近く前、家庭科の男女共修運動が始まったころ、新渇に招かれた。いきなり男女共修では抵抗があると思うので、男女共に

生活的に自立するには、ということ話を話してほしいといわれた。会場には赤ちゃんをおぶって参加した人もいた。この方は、新聞の催しもの紹介の小さな欄を見て列車に揺られてきたとのこと。「私は働きたい。子供も大勢いるし、私が働かなければ家計は火の車。職安めぐりをしている。けれど赤ん坊をおぶっている上に、片方の耳が難聴だと知れると、もろどこも雇ってはくれない。今日はそういう言葉を聞かなかったが、『経済的自立なくして何の自立ぞ』と言う人たちに、では、私の就職を世話してくれ、と訴えたい」と語った。その時以来、私は「『経済的自立』と『働くこと』」を考え続けてきた。

◇
女子教育について語り合う時「性」を今日の教育の中にどう位置づけるか、と共に、「労

働」をどうとらえさせるかが話題になる。キャリア・ウーマンや翔んでる女性を志向させるのではなく、厳しい労働の現実を直視させ、その中で「働く」意欲をかき立たせ、働くことに人間としての誇りを見出ださせるにはどうしたらいいのか、と。

だが、生きるため、食うためには、好むと好まざるにかかわらず、一家をあけて働かなければならなかった時代、働くことを理の当然とし、コツコツ努力すれば報われる喜びを味わえた時代を経て、一人(多くは男、夫、父)が働けば、三、四人の家族を養えるようになった現在、あえて働く必然性を女生徒にわからせるのは容易ではない。

もし「働く」ことを、自己実現や、女性の地位向上に結びつけるなら、それは競争原理を肯定し、学歴社会の中に彼女らを追い込むことになりかねないのだ。

◇
働く必然性を持たない都会の奥様方の集まりでは、「あえて働かざるの弁」がとうとうと語られる。

「……そうかといって、缶詰工場にも行けませんし」

「中学生の息子が『うちのママはこんな仕事

をしているんだよ』と胸を張れるようなものではないと」

「私が家事育児一切を引き受けているからこそ、主人は働くことができるのです。お湯わかすのが関の山、というあの人を養っているのは私です」

「女がみんな働きに出たら、生協運動、PTA……社会や地域の活動はどうなるんでしょう」

「子供を産んでも働き続け、三人目でとうとう身体をこわした私は、両立は到底無理だと悟ったんです。女が働き続けられない社会をなんとかせずに、働き、働きと言ったってムリです」

際限なく続くかに思われた「あえて働かざるの弁」に、ストップをかけたのは、七十年代だろうか、品のよい方の静かな言葉だった。「いまの奥様方は、恵まれすぎていらっしゃるのですねえ。敗戦後のすさまじいインフレの中で、未婚還の夫を待つ私は、赤ん坊をおぶい、幼児を自転車の前に乗せ、荷台に箱を積み、旗を立て、「キャンデー、キャンデー」と売ってまわりました。『校長先生の娘さんがあるなことをして』と言われたけれど、恥ずかしいどころか、生きて子供を養うのに必

死でした。私の一生で、一番生き生きと働いた時代でした。貧乏でしたが幸せでした」。

◇

公立学校の教師として、出版社の社員として、給料をもらう生活をしてきた私。そこでは、経済的安定とひきかえに自己実現を制約される。だが、今、だれからの制約も受けない仕事に、乏しい力量のすべてをかける。住まいが事務所でもある風変わりな出版社だから長い間なおざりにしてきた、地域の住民らしくくらしぶりのまねごとでもできるようになった。朝食の片づけもそこそこにこの原稿を書き、夜はテレビを見ながらも、封筒に予約終了の印を押す。くらしと仕事が一つになった働きの一年、三六五日。しかも、オーナーであり、編集者であり、労働者であるという働きに、どれほどの給料が見合うのか、それは知らない。雑誌を出し続け得ることを大前提として、自分に支払ったそこばくの給料が、こういう働きに見合うのかどうか、それは知らない。そして思うことは――。

私が、あえてこのような冒険に踏み切ることができたのは、夫に一応の安定した収入があったからではないのか。夫は、四十を過ぎ東京に移り住んでからの転職だから、決して

恵まれた条件の仕事ではない。一年中、六時三十五分に家を出、帰宅は九時過ぎ、という働きの中で得る夫の給料が支えになっていなかったら、私は「We」を始められなかったかもしれないのだ。私は、その意味で「ご主人」の給料によってくらしを成立させた上で、地域社会の問題やPTA活動などに打ち込む奥様方と、どこが違うのだろう。私は精一杯働いてはいるが、私が経済的に自立して、奥様方が自立していないと、どうして言えるのだろう。

◇

一人ぐらしになった八十一歳の私の母の、しゃんと背筋を伸ばしたくらしぶりは、日常生活のこまごましたことに心をこめ、手をかける働きが生んだものだ。経済的に自立していない、と誰が彼女をけなすことができる。経済的自立をしていると自認する人が、経済を度外視して働いている人を、どうして見下すことができる。働くことと給料をもろうことはイコールではない。「はたらく」とは、より広い意味を持つ言葉だと思う。と同時に、自分の心になかう「働き」と、生活をなう経済力とが、二極に分裂していく「時代」を、わびしく思うのだ。

◇まずはじめに「Weは運動の中から生まれてきた雑誌である」ことを、再確認したいと思います。私がWeにかかわりはじめてから、いつもこだわり続けてきたのは「身内意識」のことでした。助っ人気分でかわり出したころは、誌面のあちこちに、違和感、疎外感を感じていました。夏の合宿に参加したりして、Weに集う多勢の方々と面識もでき、今、私自身の内では、そういうものは薄らいでいますが、周りに働きかけようとする時、かつての私と同じ反応が返ってきて、たじたとさせられます。

◇二・三月号の「波」で、半田さんは「何万・何十万の読者を相手にするマスメディアと異なり、Weの読者はみんな身内です。私はまだ当分は身内意識を捨てられないことでしょう」と記されました。確かに四千余人の身内に支えられた手づくりの雑誌であることが、Weの身上ではありますが、そのWeは、何万、何十万の未知の人々を相手にして働きかけていく媒体であるということを、改めて意識の上と呼びもどす必要があると思うのです。

こんなこと、自明のことではあります。私にはこの一年、心許せる集まりに参加できるうれしさに、つい気もゆるみがちで、全く初めての人にも通じる言葉を敷く選んできたかどうか、身内同士の情報交換的な記事が多すぎはしなかったか、という気持が残るものですか。

そこで具体案——編集面では①読者層を分析し、読者数を維持し、更に広げてゆくには、甘辛どちらの記事に比重をおくかを検討する。私はもっと辛口の記事をふやしたほうがと常々思っています。うかがえば逆の要望

も多いみたいで難しいとは思いますが

- ②対象を教師とするか、一般市民とするかという問題は、先の公開ゼミナールで形成された「学校と家庭、家庭科をかけ橋に」(三月八日付朝日新聞の見出し)の視点を貫くことで、解決できそうです。そこでもちろん両者を等しく対象としていってほしいと思います
- ③身内の情報は、Weの会便りへ移し、誌面には各地Weの会の所在や会合の日程くらいにとどめる
- ④未知の読者も参加しやすい欄を設ける。読者各自の経験から誰にも書きやすく関心の共通しやすいテーマで、読者の投稿を募集するなど
- 営業面では①マスコミへ話題を
- ②表紙の「新しい家庭科」は、いかにも教師向けに弱い。「学校と家庭、家庭科をかけ橋に」の線で、新しいキャッチフレーズ

を作るほうがよいのでは

- ③各種の集会上、Weの会会員は積極的に出かけるようにし、その際チラシを配るなど、Weをアピールする
- ④すでにあるWeのトレーナー、Tシャツ、ハンカチ、あるいは小林カツ代さんがお子さんのために作ったコックさん風の男子用エプロンなどを、各地の集会やデパートの個人用売店にスペースを借りて販売
- ⑤図書館、書店においてもらうにはどうしたらよいか、更に検討する。マスコミ等でWeに興味を持ち、書店で探したのだが、見つからなかったのだから……という人は多い
- We城北の会としても、現在十二三人定着した常連だけの居心地のよい会に安住してしまわないように他のグループとの交流をはかり、会だよりをきちんと出す、映画会講演会など活動内容を広げたいと思います。(東京・川名はつ子)

◇二・三月号の「くらしを
いとおしむ」は、私に何か
糸口のようなものを与えて
くれたような気がします。
くらしってなんだろう？
自分なりに考えてみました。
た。まだ未熟で経験の少な
い私なりに。

くらししていくことは当然
のことであり、身近なこと
です。だから、気にかける
かったら、人はどんなふう
にもくらしで生きていけま
す。でも、逆に言えば、そ
んな小さなすっぱらなこ
との積み重ねだけに、一日
一日一生懸命気にかけてい
ったら、膨大なものとなっ
て返ってくるのではないで
しょうか。私はくらしとい
くことが大好きです。

そして、そのくらしの根
本である集団単位の家族・
家庭の大切さもひしひしと
感じるので。

私の家族は、家庭は、みんな一

緒にくらしではいるものの、心の
つながりは、あるようでなく、思
いやりが欠けているのか、口げん
かが絶えません。でも、私は自分
の家庭を見捨てようとか、これで
おしまいだなどとは思っていませ
ん。時々きょうだいで素直に話が
できたときは、うれしくてたまり
ません。そして、同時に将来、自
分が結婚し、家庭をつくっていく
時の期待を大きくするのです。
私は家庭科という教科が、少し
わかってきたような気がします。
学校教育（小・中）の家庭科が、
いかに必要で重要なものか。『学
校をよみがえらせよう―家庭科の
窓から』、今、なぜ家庭科なのか。
実感として共鳴できます。

今、短期大学の家政科に学び、
一応、家庭科教師を目ざす一人と
して、もっとも家庭科を考え
ていきたいと思えます。これから
も、いっぱいいい出合いを期待し
ています。（東京・野口康美）

◇やっと来ました四月号。オヤ少

し重みみたい。ウン少しぶ厚い。
アレエ、表紙、絵の展覧会なら通
過。全くかわれない分野。パス
！一番々瀬さん、大好き。重い
ことば。ああ、さくら草、ウワ
ッ。野の花のページができてる。
カンゲキ。これぞ待ち望んだ一ペ
ージ。うれしいデス。霞通信、夏
のキャンプで話をなさった方です

ね。この塾がもう少し近かったら
入れていただくに。膚のぬくも
りが伝わってくるような霞通信。
たのしみ。つがるいろはがたも
いいですね。せっかく日本中に
仲間がふえたのですから、そのひ
とたちのおつれあいや子供たちの
いる台所の声や音、匂い香りが伝
わってきそうなページも見たいで
す。（東京・武末久子）

◇We二年目の第一号が届き、夕飯
の仕度も忘れて、立ったまま読み
ふけりました。表紙をあけてすぐ
の「野の花」、藤田さんの「いろは
がるた」、目次―パッと目に入り込

み、新鮮な気持でした。また、実

践欄の小学校、大学の部、書き手
のお人柄が直截に伝わって、楽し
みです。武田さんと遠藤さんの連
載も滑り出しよく、期待をもたさ
れました。ますのさんの授業は、
テープで聞いていたのですが、な
かなかのものですね。子供たちの
感想文にショックを受けました。

（鹿児島・横山雅子）

◇四月号の主張は、どれもこれも
読みつ放しにしておけないものば
かりで、「そうか、気づかなか
た」なんて思いがいっぱいでした。
斎藤次郎さんのバランス主義につ
いての批判もその一つで、自分の
弱さ（まだ私の中に「まあいいじ
やないの」が存在している、その
中で自分のいいかげんさの許しを
請うてしまう）をつきつけられま
した。（埼玉・近江谷まつ美）

（編集部より）
初めに載せた川名はつ子さんの
ご提言に対して、読者の皆さんか
らのご意見をお待ちしています。

十字路

新潟・卒論はお国巡り道中記

卒論といえは大学生の話、それも必修科目としない大学が増えている昨今、長岡の中島小は社会科の体験学習に卒論を取り入れている。テーマは日本一周「地図旅行」。「よく考え自ら学びとる子供」を教育目標に掲げる同校では、何か自分の情熱を傾けられるもので小学校時代の記念になるものをと、前年度から始めた。原稿用紙五百枚の頑張り屋が十一人も現れ、先生をびっくりさせた。広井教諭は「自ら学ぶ姿勢を身につけたようです」と語る。

(新潟日報、3・18、山口久子)

栃木・県内女性農業後継者

県内の未婚の女性農業後継者の半数以上が恋愛結婚を望み、夫としての条件は必ずしも農業の経験が必要とせず、農業に専従しなくても、休日や農繁期などに手伝ってくれればいいと思っている。現在、農業だけに従事しているのは六・三％、農業以外の仕事だけに従事しているのが五八・八％。こんな調査結果が県農業会議の「女性農業後継者の実態調査」で明らかになった。同調査は、県内千五

百九十三人の未婚の女性農業後継者（見込みも含む）を対象に無記名アンケートで実施、回答率は三〇・八％だった。（下野、3・28）

・一級防水技能に合格

今市市岩崎の駒場フミさん（51）と同所の田辺ヨネさん（50）は、鹿沼市麻生町の防水施工会社に勤務して十九年のベテラン。防水施工技能士には一級、二級があり、六部門に分かれている。二人は五十四年に合成ゴム系シート防水工事作業部門に挑戦し、実技はパスしたものの建築法や英語の学科に不合格。四度目の挑戦での合格。女性としては全国初で、全国防水連合会も特別表彰をすることにした。

（下野、3・20、坂本昌子）

東京・よかったネ、康治君

普通学級への転校を求め六年越しの運動を続けてきた都立城北養護学校の金井康治君の問題で、足立区教委は二十二日、康治君の中学への就学通知書を郵送した。区教委出身障害児就学指導委員会は、八日、入学を認める決定を下しているが、区が最終的態度を表明したことで、障害児との統合教育か、分離教育かをめぐり論争を呼んだこの問題もついに決着を迎えた。康治君は同区花畑六、区立花畑北中に入学する。

（毎日、3・23）

・夫は共働き希望、家事は妻まかせ

共働き夫婦の年収の四割は妻が稼ぎ、夫の九割は妻が働き続けることを希望しながら、家事は妻まかせ―就職情報センター（東京・新橋）が首都圏と京阪神圏の共働き夫婦三百五十一世帯にアンケート調査したところ、こんな夫婦像が浮かんできた。妻の年齢二十歳―三十五歳に絞ったため、夫は三十一―三十四歳、子供がいる世帯が五九％、借家、賃貸アパート住まいが五六％だった。主に夫がする家事は「ふろ場の掃除」「子供の教育・しつけ」が一〇％台であとは一けた台。

（毎日、3・28、三橋典子）

千葉・校内暴力、中学で増加

県教委指導課は、二月末までに報告のあった五十七年度中の公立小、中、高校における校内暴力をまとめると共に学校側に事件防止のための適切指導を訴える通知を出した。校内暴力件数は計十五件で、うち中学校におけるものが十三件に達し過去最高。校内暴力は対教師暴力が九件、校内の生徒間が二件、学校間の生徒暴力三件、校舎破壊一件。

県教委からの通知は「卒業期には的確な指導をはかり、校内暴力などの問題行動の防止に万全を期するように」というもの。

(毎日、3・3)

・私服警官が警戒の中、姉崎中卒業式

昨年から教師に対する暴力事件が散発的に起きている市原市立姉崎中学校(林幸男校長、生徒数千五百八十四人)で卒業式が行われた。式には卒業生四百八十九人と在校生のクラス代表二百二十人だけが出席。「生徒を刺激する」として式場取材を断り、市原署に警備を要請、私服警官が校舎周辺の警戒にあたった。

午前十一時過ぎ、式を終えた林校長は、さっそく市教委に、式の無事終了を電話で報告した。

(毎日、3・16)

・県教組、荒れる学校、で提言書

県教委は昨年夏「児童・生徒の非行や問題行動に関する実態調査」の結果を踏まえて提言書を作成した。①原因を他に求める前に私たち自身へ問い直しを②非行・問題行動克服の手だてはある—の二本柱に分けて提言。

「子どもも朝から帰りまで小言や注意ではやりきれません。私たち教師はもっと工夫していいのではないのでしょうか。毅然として人生や平和を語ってやるべきではないでしょうか。子どもたちの心に何かを残してやれなかったら、この一年の教育は一体何だったのか

しょう」と訴えている。(毎日、3・20)

・37中・高校の卒業式に警官出動

県内中学・高校の卒業式が各校を除き終了した段階で、県警少年課が二十二日まとめたところによると、警戒のための私服警官が出動したのは三十七校にのぼった。中学校では要請のあった十一校と、独自の判断で派遣した二十四校。高校は要請のあった二校だけ。トラブルは一件もなかった。

(毎日、3・23、木田直子)

広島・学ラン追放にブレザー制服

ツッパリ学生服の追放に役一役。今春開校する県立高陽東、祇園北、呉昭和、廿日市西の四校と、既設校の安西高。中学では仁保中、五月ヶ丘中がブレザーを男女生徒の制服として採用する。「新しい制服で学校のイメージ刷新を図るのが目的」と学校側。だが、一方で、非行のシンボルともなっている「長ラン」「短ラン」など改造学生服の追放の狙いも。学校名がはつきりわかる目立つ制服になることで、生徒の指導や管理が厳しくなるのでは—の指摘もある。(中国、2・24)

・IOCU日本国際セミナー 4/6〜9

日本に消費者運動が起こって始めて国際消費者セミナーが「健康・安全そして消費者」

と題して、埼玉県武蔵嵐山の国立婦人会館で開かれた。25ヶ国からの参加者と総勢三百五十人。大会宣言を抜粋して紹介する。

「健康と安全に関する嵐山宣言」

すべての消費者にとっての関心事は、安全を保証される権利です。安全を保証されるというのは、人間の基本的な権利であり、世界中で尊重され、拡大されていかなければなりません。消費者保護の必要性については、各国の政府もまた、規制を要する重要課題としての認識を深めつつあります。IOCUは一九八二年一月一七日に国連が行った有害製品の輸出を規制する決議を歓迎し、国連や加盟団体に対し、この決議をすみやかに実行するよう強く要望します。世界の消費者運動は、大きな市民運動の一部を成すものとして、環境や健康を守る運動や、女性運動などの他の運動と協力して、私たちすべてにかかわる問題について活動していかなければなりません。消費者としての権利は人間としての権利です。より人間的で非暴力的な、そして社会的・経済的に公正な社会が達成される日がくるまで、私たちは熱意をもって持続的に、他の人々と協力していくこと、ここに宣言します」。(編集部)



◆「日本人は友人に会ったために、外国人は友人をつくるために会に出席する」という意味の文章を読んだ。「We」を共通項の友人をつくりませんか。散会后、再会された自分をみつめる喜びを味わって下さい。

気の合った人に「We」の感想を語っている人は多いと思いますが、ちょっと勇気を出して、知らない人にも呼びかけて下さい。読者会誕生です。

◆「We」の会」会員は現在百三十名。今、3・5ゼミのパンフレットづくりと夏のフォーラムの準備中です。ご入会をお待ちしております。

◆エプロンができます。赤、黄、緑、青、デニム地、一八〇〇円です。「We」の資金になりますので協力をお願いします。

(中野)

◆四月号の福田三津夫氏のタイトルに「男女共教」という言葉を使っています。読者の方から「一瞬どのようなことがわかりません」という声がかかっています。読者の皆さんから「はたらく」とはたらくにさせることだと聞いた時、語源の信憑性よりも響きの美しさを新鮮に感じました。人間は経済的自立のために働くのか、より人間らしい生を紡ぎ出すために働くのか。働くことは、人間にとって義務なのか、権利なのか。小さいころから、大人になったら働いて妻子を養う義務があると思ひこまされてきた男性。私にも職を、採用の門を開いて、働く権利を要求する女性。このテーマはまた取り上げましょう。

◆夏季フォーラム、とじ込めの案内をご覧の上、早目に申し込み下さい。

◆次のテーマは「コミュニケーション」です。(半田)

(馬場)

告知板

▼88頁になったら、今までうずうずしながらできなかった新刊紹介ができる! と思っていました。けれどもなかなかそれも容易ではないのです。大変心苦しいけれど、自信をもっておすすめしたい本10冊を、挙げさせていただきます。

▼石田宇三郎教育論集『ルソーを継承するもの』双柿舎▼梅田正己・金子さとみ『差別と戦争を見る眼』高校生文化研究会▼樋

口恵子・中島通子・向井承子編『女が生きた職業全3巻—I就職 II職場 III再就職』筑摩書房▼上野千鶴子編『主婦論争を読むI II』勁草書房▼マルチーヌ・セガレーヌ『妻と夫の社会史』新評論▼斎藤 茂男『妻たちの思秋期』共同通信社▼A・Mクック編『からだの百科』岩波書店

▼小社の『人間って不思議』もぜひ高読の上、読後感などお寄せ下さい。

新しい家庭科—

Vol. 2 No. 3 1983年5月20日発行
¥500 (年間購読料 ¥5,000)
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎03(326)1380 振替 東京6—59867
印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

引き続きWeの仲間になって下さい

Weの仲間をふやして下さい

— Weの取り扱い店一覧 — お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい（4月19日現在）

旭川	富貴堂	＜千代田＞	書肆アクセス	浜北	谷島屋書店	姫路	姫路九善
小清水	嵯峨井書店		三省堂本店	藤枝	江崎書店	岡山	弘栄堂
札幌	なにわ本店		八重洲B.C	沼津	マルサン書店	米子	今井MC本店
	なにわリーぶる		東京堂	一宮	文正堂書店	出雲	武田書店
函館	神田書店		信山社	名古屋	ウニタ書店	松江	千鳥
青森	成田本店	＜文京＞	鈴木書店		正文館書店	広島	やまびこ書店
盛岡	東山堂	＜豊島＞	芳林堂		白樺書店		いづみ書店
仙台	こどもの本の店	＜新宿＞	模索舎	名古屋	日進堂		岡田書店
	ブーの家		ブックスミヤ		ふたば	山口	白藤書店
	八重洲書房		芳林堂	江南	青雲堂	松山	去来社
	ポラン	＜杉並＞	柏木堂書店	豊橋	文教書店	観音寺	タカハシ書店
	萩書房		木風舎	豊田	鈴彦書店	徳島	雄徳堂徳野書店
	高島書店		新愛書店	新潟	栗山書店	北九州	北九州書店
	ホビット館		ブラサード書店		白石書店		白石書店
	金港堂B.C	＜中野＞	明屋	小千谷	島谷書店		金栄堂
	金港堂本店		あかつき	三条	新潟書房	福岡	リーぶる天神
	ホビット館	＜葛飾＞	宏精堂	沢	うつのみや		寿屋
泉	加賀屋書店	＜世田谷＞	やまべ書店		セールスセンター	長崎	好文堂
秋田	八文字屋		江崎書店	富山	清明堂書店	熊本	高校生協
山形	岩瀬書店		京王	高岡	清文堂		三章文庫
福島	西沢書店	＜練馬＞	かじか書店	岡谷	笠原書店	日向	片桐書店
	深川第二書店	＜北＞	愛京堂	長野	平安堂書店	宮崎	岩切書店
	十字屋書店	＜墨田＞	業平堂	福井	ひまわり書店	大分	開書堂
	大月店	＜上野＞	京成明正堂		じっぷじっぷ		紀伊國屋書店
	松文堂	＜三鷹＞	第九書房		吉川隆文堂		札幌、新潟、
藤岡	川島朝日堂	＜府中＞	国府書店		春江書店		新宿、渋谷、玉川、住友、
	初心堂		啓文堂		品川書店		吉祥寺、川越、船橋、梅
	アルプス社	＜国分寺＞	青野書店	岐阜	宝島		田、岡山、広島、松山、
前橋	近江書店	＜国立＞	東海書店	奈良	海老山書店	福岡、熊本	
結城	太陽堂	＜立川＞	石井書店	大阪	旭屋書店本店	西武B.C	前橋、船橋、
水戸	ツルヤB.C	＜小平＞	和中書店		ユーブー書店	藤沢、甲府、八尾、大津	
	川又駅前店	＜八王子＞	くまざわ南口		増田書店	大学生協	
日立	梓書房	＜清瀬＞	マルオカ書店		樋口書籍		畜産大学、東北大学、福
浦和	岩渕書店		飯田書店		米原十六堂		島大学、新潟大学、群馬
	須原屋	＜町田＞	久美堂		西村書店		大学、宇都宮大学、日本
上尾	黒田書店	川崎	北野書店	和泉	かつらぎ		女子大学、東京大学、東
東松山	比企文化社	横浜	有文堂	部	松香堂書店		京家政大学、東京学芸大
船橋	前原かっぱ		有隣堂		ブックスストア談		学、愛知教育大学、金沢
浦安	原勝書店		栄松堂	宇治	京都書院		大学、大阪市立大学、関
千葉	日東寺支店	相模原	ブックス上溝	長岡	恵文社神足店		西大学、関西学院大学、
	多田屋プラザ	鎌倉	たらば書房	京戸	幾久書店		立命館大学、宮崎大学、
市川	弘栄堂	相模大野	相模書店	神	淳久堂		高知大学、熊本大学、琉
松戸	元山書店	藤沢	豊元書店		ヒカリ書店		球大学
東京	蔭書店		東松堂		海文堂書店		
	計文堂	静岡	百町森書店		コーベブックス		
＜千代田＞	ピッピー		吉見書店		明文館		
	日成堂	浜松	中田島書店	尼崎	宣文堂書房		

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。